するなり　しびら上裳に同じ唐裳の上に着くるなり　ひたひ押たれて　陪膳に候する人櫛をさすこと本義なるよし古風にそのまゝを守り居るなり　内教坊内裏にあり女の舞など習ふ所　内侍所内裏の中に天照大神の靈代なる神鏡を祀りて内侍の奉仕せる所の意にて賢所ともいふ　齋院天皇御即位あるごとに親王又は女王の未だ嫁し給はぬをえらびて伊勢の神宮と加茂神社（天子の御産土神）とに奉祀せしめ給ふ共に齋王（いつきのみこ）といひ伊勢なるを齋宮加茂なるを齋院といふ、この齋院誰ともなし　うれふなりつるはれさも寒き年かなと愁ひしをいふ　かのものに夕顔と共なりし時河原の院にておそはれしことなり　からうじて明くるわびしきのうらうへなり　居丈の高う俗に坐りぜいの高きなりをせながのをは小篠（をすゝ）小野（をの）の如くそのをていふ意味

侍從は齋院に參り通ふ若人にて、此頃は無りけり。愈〳〵奇う鄙びたる限にて、見慣ぬ心地ぞする。最ど愁ふなりつる雪、搔垂れ甚う降けり。空の景色然う風吹荒て、大殿油消にけるを、點しつくる人も無し。彼物に魔れし折思し出られて、荒たる體は劣ざんめるを、場所の狹う、人氣の些有るなどに慰めたれど、凄う轉寢敏き心地する夜の儘なり。興うも哀れにも樣變て、心留りぬべき有樣〻、甚埋れ木强にて、何の映なきをぞ口惜う思す。辛じて明ぬる氣色なれば、格子手から上給て、前の前栽の雪を見給ふ。踏分たる跡もなく、遙々と荒渡りて、甚う淋氣なるに、振出て往ん事も哀にて、源「興き時の空をも見給へ。盡せぬ御心の隔こそ理無けれ」と、恨み聞え給ふ。未だ微闇れど、雪の光に甚ど美麗に若う見え給ふを、老人ども笑榮て見奉る。源疾出させ給へ。不興し。心柔順きこそ」など敎へ聞れば、有繋に人の聞る事を得ぬび給ぬ御心にて、兎角引繕て膝行出で給り。見ぬ樣にて、外の方を眺め給れど、後目は啻ならず、如何にぞ、打解勝りの聊もあらば嬉からんと思すも、强ちなる御心なりや。先づ居丈の高う、を背長に見え給に、然ばよと胸潰れぬ。打次て噫醜と見るものは、御鼻なりけり。偶と眼ぞ留る。普賢菩

薩の乘物と思ゆ。可驚う高う伸かに先の方少し垂て、色付たる事殊の外に憂てあり。色は雪耻く白て眞靑に、額容此上なう脹たるに、猶下勝なる面樣は、丈方重大う長きなるべし。瘦給る事最惜氣に骨立て、肩の邊などは、痛氣なるまで衣の上まで見ゆ。何に殘なう見顯しつらんと思ふもの乍、珍き容の爲たれば、有繋に打見遣れ給ふ。頭容髮の垂下はしも美げにて、愛しと思聞る人々にも一向劣まじう、往の裾に溜て曳れたる程、一尺許餘たらんと見ゆ。着給る物どもをさへ言立るも、言說分別なきやうなれど、昔物語にも、人の御裝束をこそは先言たんめれ。禁色の理無う上白みたる一襲、名殘なう黑き袿襲て、上着には黑貂の裘衣、甚美麗に香しきを着給り。古代の趣致づきたる御裝束なれど、仍若やかなる女の御裝には似氣なう。事大き事甚顯著れたり。然ど實に此皮なうては寒からましと見る御顏容なるを、心苦と見給ふ。何事も言れ給ず、自身さへ口閉たる心地し給ど、例の無言も試んと、兎角聞え給に、甚う耻ひて口覆ひ給るさへ、鄙び古めかしう、事々しう儀式官の練出たる臂容肖て、有繋に打笑給る氣色、仍う不用意びたり。最惜く哀にて甚ど急出給ふ。源「賴しき人なき御有樣を、見初たる

なき語なり
ふげんぼさつの乘物
普賢菩薩乘ニ大白象一鼻如ニ紅蓮色一と經にあり
ゆるし色　深紅深紫は禁色にて許されねば着用するとあたはぬ故にいふこゝは深紅の年經て上白みたるなるべし
名殘なう黑き俗に眞黑きなり
ふるき朝鮮遼東邊の產にて「てん」といふ松樹に棲みてその實を食ふ毛の色黑し數枚を繼ぎて裘として珍重するよし
子（村上の后）ふるき衣を高光少將

人には疎らず思睦びせんこそ、本意ある心地すべけれ。許なき御氣色なれば憂う」など托て、

源「朝日射す軒の垂水は解ながら、
何か垂氷の結ぼるらん。」

と宣ど、唯「むゝ」と打笑て甚口重げなるも、最惜ければ出給ぬ。御車寄たる中門の、最痛う曲み蹌て、夜目にこそ著きながらも萬事隱たる事多りけれ。甚哀に淋う荒惑るに、松の雪のみ暖げに降積る、山里の心地して物哀なるを、彼人々の言し葎の門は、斯樣なる所なりけんかし。實に心苦く可愛げならん人を此處に据て、不安う戀しと思ばや。非倫き憂悶は其に紛なんかしと、思やうなる住處に合ぬ御有樣は、取べき方なしと思ながら、我ならぬ人は況て見忍てんや。我斯う見馴けるは、父親王の不安しと副へ置給けん魂魄の、嚮導なんめりとぞ思さるゝ。橘の木の埋れたる、御隨身召て拂せ給ふ。羨み顏に松の木の自れ起反て、颯と零る雪も、名に立つ末のと見るなどを、甚深からずとも、尋常なる程に應酬ん人もがなと見給ふ。御車出べき門は未だ開ざりければ、鍵の受託尋出たれば、翁の甚高齡きぞ出

入道横川に住み侍りけるに遣はしける
「夏なれど山は寒しといふなれば此のかは衣は風を防がん」とあり
松の雪のみ「み山には松の雪だに消えなくに都は野べの若菜つみけり」
かの人々のいひし雨夜の品さだめに人々の言ひしことなり
あるまじき藤壺のことなり
うらやみ顏に風情をかしき書きざまなり
名に立つ末の「我が袖は名山に立つ末の松のこえぬ日ぞなき」雪を波によそへて思はるゝなり

來る。娘にや孫女にや、中間なる年配の女の、衣は雪に遭て煤まどひ、寒しと思る氣色深うて、奇き器に火を只微に入て袖包に持り。翁門を得開やらねば、寄て引助る甚鈍なり。御供の人寄てぞ開つる。

源「ふりにける頭の雪を見る人も、
劣ず濡す朝の袖かな。

若き者は形隱ず」と打誦じ給て、鼻の色に出て甚寒しと見つる御面影、偶と思出られて微笑れ給ふ。頭中將に是を見せたらん時、如何なる事を擬へ言ん。常に窺來れば、今見付られ「なんと術なう思す。尋常なるほどの殊なる事なさならば、思捨ても止ぬべきを、判然に見給ては却々哀に甚くて、懇切なる體に常に訪れ給ふ。黑貂の皮ならぬ絹綾綿など、老人們の着べき物の類、彼翁の爲まで、上下思遣りて奉り給ふ。斯樣の實際事も耻げならぬを心安く、然る方の後見にて保護んと思し取て、特殊に然ならぬ打解事も爲給けり。彼空蟬の打解たりし宵の側面は、甚醜りし容貌ざまなれど、擧止に隱れて口惜うはあらざりきかし。劣べき階級の人なりやは。實に種性に依ぬ事なりけり。性質の溫和に憾氣なりしを、負て止にしかなと、

雪にあひて雪の白きに嘗のすゝけ汚れたるがはゆるなり
ふりにける古と降とかけたり
若きものは白樂天の秦中吟に夜深燈火盡、霰雪白紛々、幼者形不蔽、老者體無温、悲嘆與寒氣、併入鼻中辛とあり若き者は手足を露出しても堪ふれども老者は體寒きと悲愁とにて鼻痛く鼻汁出づるとなり
かの翁かの預りの翁なり
うちとけわざ衣食の給與などなり
御宿直所禁中御宿なり
先こそは一先きに申上げむとなり
艶なりと氣取りたるとなり
つゝみ綾に泥繪（金銀箔を粉にして膠にてつくる繪）なるもの
衣筥蒔繪のものゝよし
袖まき干さん人も「淡雪は今日は降りそ白妙の袖巻き干さん人もあらなくに」（あらぬに）
侍從こそは今不在なればなり
今樣色の紅梅の濃きをいふ榮花物語に祐子内親王

物の折毎には思し出づ。歳も暮ぬ。内裏の御宿直所に在すに、大輔の命婦參り。御梳櫛などには、懸想立つ筋なう心易き者の、有繋に宣ひ戯れなどして、使ひ慣し給れば、召なき時も、聞べき事ある折は參上りけり。命「奇き事の侍るを、聞させさらんも僻々しう思ひ給へ煩て」と、微笑て聞やらぬを、源「何齣の事ぞ、我には包む事あらじとなん思ふ」と宣ば、命「如何は、自身の憂は畏くとも先こそは。是は甚聞え難くなん」と、甚う言籠たれば、例の艶なりと憎み給ふ。命「彼宮（陸）より侍る御文」とて取出たり。源「況て是は取隱すべき事かは」とて、取給も胸潰る。檀紙の厚肥たるに、香ばかりは深う染給り。甚好う書果せたり。歌も、

末唐衣君が心の憂ければ、
袂は斯ぞ濡ちつゝのみ。」

心得ず打傾き給るに、裏に、衣筥の重りかに古代なる打置て、押出たり。命「是を如何でかは、傍痛く思給ざらん。然ど朔日の御裝束とて、殊と侍るめるを、仂なうは得返し侍ず。獨り引籠侍んも、人の御志違ひ侍るべければ、御覽ぜさせてこそは」と聞れば、源「引籠られなんは辛かりなまし。袖巻干ん人もなき身に、甚嬉き志にこそは」と宣て、殊に物言れ給ず。扨も可驚の詠方や。是こそは手からの御事の最上なんめれ。侍從こそは取直すべかんめれ。又筆の尻取る博士ぞ無るべきと、言効なく思す。心を盡て詠出給らん體を思すに、甚も畏き方とは是をも言べかりけりと、微笑て見給を、命婦面赧て見奉る。今樣色の得免すまじく、艶なう古めきたる直衣の、表裏等う濃なる、甚無骨う端々ぞ見たる。淺しと思すに、此文を披ながら、端に干習弄び給を側由に見ば、

源「懷き色ともなしに何に此の、
末摘花を袖に觸けむ。

色濃き花と見しかども」など書汚し給ふ。鼻の咎を仍有る樣あらんと、思合する折々の月影などを、最惜きもの乍可笑う思成ぬ。

命「紅の一花色薄くとも、
一向腐す名をし立ずば。

心苦の世や」と、最甚う馴て獨語つを、巧きにはあらねど、斯樣の普通にだに有ましかばと返々口惜し。人の際の心苦きに、名の朽なんは有繋な

紅梅の十二を召したるを中納言の局美しの今様色やと申したる由あり

得ゆるすまじく非常になり俗にたまらぬなどの意

こまやかに色濃きなり

末摘花卷の名と姫君の名これより出でたり

紅〳〵にの花は末より咲けばやがて末より摘むに故に末摘花といふ

折々の月影命婦が姫君を見參らする折々の月影などを思ひ合するなり

とりかくさんやとりかくさうよなりくはや

り。人々參げ、源「取隱さんや。然る事は人の爲るものにやあらん」と、打呻き給ふ。何に御覽ぜさせつらん。我さへ心無きやうにと、最耻くて徐下ぬ。又の日殿上に侍へば、臺盤所に差覗き給て、源「くはや、昨日の返事、奇く情ばみ過さるゝ」とて投給り。女房達何事ならんと床しがる。源「たゞらめの花の色の如、三笠の山の少女をば棄て」と歌遊びて出給ぬるを、仍命婦は甚可笑と思ふ。事情知ぬ女房は、女「何ぞ御獨笑は」と咎合り。命「否ず。寒き霜の朝に、搔練好る鼻の色合や見つらん、御畿り歌の甚可笑き」と言ば、女「强なる御事かな。此中には、匂る鼻も無んめり。左近命婦、肥後采女や交ひつらん」など、心も得ず言合ふ。御返事奉りたれば、宮には女房集て見愛けり。

源「逢ぬ夜を隔る中の衣手に、
かさねて甚ど見も染よとや。」

白き紙に捨書給るしもぞ却々美げなる。晦日の日夕つ方、彼御衣筥に、御料とて人の奉る御衣一具、蒲萄染の織物の御衣、又山吹か何ぞ色々見て、命婦ぞ奉りたる。往し色合を惡しとや見給けんと思知るれど、「彼將た紅

「えらよ」ほどの意

あやしく心ばみ過さるゝ妙にむづかしくてなどの意

たゞらめの花のごと風俗歌に「たゞらめの花のごとかいねり好むやけし紫好むやー三笠の山とあり三笠のをとめとはその末にあるべしとばなるべし古註にたゞ梅の花のあやまりなるべしなどあれど案ずるに梅のつまりたる色の如き搔練共に紅梅の練絹末摘花好むやの赤きに思ひよせてふと歌はれしなの重々しかりしをや。然とも消じ」と老人們は定る。老「御歌も是よりのは事理明白にこそあれ。」老「御返歌は唯興き方にこそ」など口々に言ふ。姫君も容易ならで爲出給る事なれば、物に書付て置給りけり。朔日の程過て、今年男踏歌あるべければ、例の所々遊騷り給に物騷しけれど、淋き所の哀に思し遣るれば、七日の日の節會果て、夜に入て御前より罷出給けるを、御宿直所(桐壺)に卽て泊り給ぬるやうにて、夜更して在したり。例の有樣よりは、氣色打賑き世着たり。君(姫君)も少し嫋ぎ給る氣色持付給り。如何にぞ、改て引更たらん時とぞ思し續らるゝ。日差出る程に猶豫なして出給ふ。東の端戸押啓たれば、向たる廊の屋も無く荒たれば、日の脚程なく射入て、雪少し降たる光に、甚顯露に見入らる。御直衣など奉るを見出して、少し差出て側臥給る頭容、溢出たる程甚愛し。生直りを見出たらん時と思されて、格子引上給り。最惜かりし物懲に上も果給で、脇息を押寄て打掛て、御鬢莖の亂次きを繕ひ給ふ。理なう古めきたる鏡臺、唐櫛笥、搔上の函など取出たり。有繫に男の御具さへ微少あるを、戯て興しと見給ふ。女ゝ御裝束、今日は世着たりと見るは、往し筥の趣致を然ながらなりけり。然も思し寄ず興あ

るべし　左近の命婦肥後采女二人は鼻赤き故にいふ　あはぬ夜を／＼心の隔てをかさねよとの御心かとなり　衣だに中にありしはうとかりきあはぬ夜をさへだてけるかな　一の意なり　見もしみよとやよく見よとてかとなり　かの御衣筥末つむより贈られし衣筥になり　御料とて源氏の着料とてなり　えびぞめ經（たて）紅に緯（よこ）紫の糸にておりたるなり　山吹表薄朽葉裏黄なるもの春季着用するなり　命婦ぞ命婦がお取次して末つむに奉るなり　消えじまけまいなり　男踏歌正月禁中に行はるゝ公事にて十五日に男踏歌十六日に女踏歌あり少年童女年始の祝言を歌ひて舞ふ曲の終りに必ず萬年阿良禮（あられ）と唱ふるによりあらればしりとの意）によりあいひ後に萬歳樂ともいへりこの日節會あり五位以上を召さる七日の日の黒毛に少し青みあるをいへり初めはそれなりしを後に白馬を用ふるやうになりしよし）を庭中に引渡すを天皇御覽あり後に御宴あるなり　かゝげのはこ結髪の具を入るゝ筥　紋模様なり　さへづる「百千鳥さへづる春はものごとに改まれども我ぞ古りゆく」

る紋付て、著き上着ばかりぞ、奇しとは思しける。源「今年だに、聲少し聞せ給へ。待るゝ物は差措れて、御氣色の改んなん床しき」と宣ば、末「囀る春は」と辛じて戰慄し出たり。源「然や、年經ぬる證よ」と打笑ひ給て、源「夢かとぞ見る」と打誦じて出給を、見送りて倚臥給へり。口覆の側面より仍彼の末摘花甚匂やかに差出たり。見苦の事やと思さる。二條院に在したれば、紫の君、甚美き片生にて、紅は斯う可懷きも有けりと見るに、無紋の櫻の細長柔軟に着做て、何心も無くて在し給ふ體甚う可愛し。古代の祖母君の御名殘にて、齒黑も未しかりけるを、引粧せ給れば、眉の顯に成たるも美う美麗なり。心から何か斯う憂世を見扱らん。斯く、心苦き者をも見て居たらでと思しつゝ、例の諸共に雛遊し給ふ。繪など書て彩色給ふ。萬、興う遊び散し給けり。自身も書添給ふ。髪甚長き女を書給て、鼻に紅を點て見給に、繪に書しも見ま憂き態したり。我御影の鏡臺に映るが、甚美麗なるを見給て、手から此紅花を書付け匂して見給に、斯く美き顔だに、然て交れらんは見苦かるべかりけり。姫君見て甚く笑ひ給ふ。源「麿が斯く醜に成なん時、如何ならん」と宣ば、紫「憂てこそ有め」とて、然もや染着んと危く思給り。虚拭をして、源「更にこそ白まね。要なき戯なりや。内裏に如何に宣んとすらん」と、甚眞面目に宣ふを甚最惜と思して、寄て、御硯の瓶の水に、檀紙を濡して拭ひ給ば、源「平仲が如に彩り添へ給な。赤からんは合なん」と戯れ給ふ體、甚興き妹背と見え給り。日の甚麗なるに、疾と霞み渡る梢どもの待遠き中にも、梅は氣色ばみ微笑渡る取分て見ゆ。階隱の許の紅梅、甚疾く咲く花にて色付にけり。

源「紅の花ぞ理なく疎るゝ、梅の立枝は可懷けれど。いでや」と漫然打呻れ給ふ。噫最惜し、斯る人々の末々如何なりけん。

年へぬるしるし
年脩し給へば物を言はるゝとなり
夢かとぞ
「わすれては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみ分けて君を見んとは」の業平の小野の宮を訪はれし時のうたを思ひよせられしか、とにかく珍かなる意にて口ずさばれしなるべし
口おほひ
袖にて口を覆はれしなり
袴の細長
さくら、白くして少し赤色なり細長は袿に似て大領(おほくび)なきも袖一尺七寸童(男女)の着るもの無紋は無地なり
おば君の古代は幼年の間は歯黒めせざりしかばなり
眉の歯黒めと共にぼうぼう眉の常の眉となりたるなり
はなやかにつくるなりすべて花やかなるを匂ふといふ香ふとはたがへり
平仲
宇治大納言物語に「平貞文(宇平仲)ある女のもとに往きて泣く眞似をして硯の水をふところに持ちて目をなんぬらしけるを女心得て墨をすりて入れたりけるをしらで又ぬらしければ女鏡を見せてよめる『我にこそつらさは君が見すれども人にすみつく(住み付くにかけたり)顔のけしきよ』云々」
階がくし
車輿を寄するために階の上に屋根あるなり
いでやいやもうなり

試樂
試樂調樂などいひて舞樂のこゝろみをするなり
青海波
龍宮の曲といふ舞人の服に波の文を染むに淺黄に藍にて渦を四分したる如きを並べ重ねたり舞ふさまも横に一方に向ふは潮の滿干に象るといふ
相手
かたてなり
詠
小野篁の作といふ「桂殿迎二初歳一相棲早

紅葉賀

朱雀院の行幸は、神無月の十日餘なり。尋常ならず面白かるべき度の事なりければ、御方々物見給ぬ事を口惜がり給ふ。帝も藤壺の見給さらんを飽ず思さるれば、試樂を御前にて爲させ給ふ。源氏中將は青海波をぞ舞給ける。片手には大殿の頭中將、容貌用意人には殊なるを立並ては花の傍の深山木なり。入方の日影朗に射たるに樂の聲增り、物の面白き程に、同じ舞の足踏顔容世に見ぬ體なり。詠など爲給るは、是や佛の御迦陵頻伽の聲ならんと聞ゆ。面白く怜なるに帝涙墮し給ふ。上達部皇子達も皆泣給ぬ。詠果て袖打直し給るに、待取たる樂の賑はしきに、顔の色合優て、常よりも光ると見え給ふ。春宮の女御(弘徽殿)斯く愛きに就ても、平ならず思して、弘「神なぞ空に愛つべき容貌かな。轉忌々し」と宣ふを、若き女房などは、必憂しと耳留めけり。藤壺は、畏き心無らましかば、況て愛たく見ましと思すに、夢の心地なん爲給ける。宮(藤壺)は卽て御宿直なりけり。帝「今日の試樂は青海波に事皆盡ぬ。如何見給つる」と聞え給ば、あいなう御答聞え難くて、藤「殊に

年媚剪花梅樹下蝶鸞畫梁邊一

迦陵嘴伽雪山（せつせん）にありしといふ妙聲鳥とも美音言鳥とも いふ殼中に在て鳴く、聲微妙にして餘鳥に勝るとあり

科など空に醍醐天皇の行幸に富士井の路の御息所の御腹の親王雅明七歳にて舞まはせ給ひしに萬人しほれぬはなく御かれたち光るやうに美しかりしかば山神のめでゝとり奉りし事ありしを思ひよせてのるはしく言はるゝなり

あいなう何となくなり

家の子

侍りつ」とばかり聞え給ふ。童「片手も惡うは有ずこそ見つれ。舞の容手法なん、家の子は殊なる。此世に名を得たる舞の師の男どもゝ、實に甚巧けれど、巨々しう優雅たる筋をなん見せぬ。試の日斯く盡しつれば、紅葉の蔭や淋々くと思ど、見せ奉らんの心にて、用意せさせつる」など聞え給ふ。翌朝中將の君、源「如何に御覽じけん、世に知ぬ漫心地ながらこそ。

源　物思に立舞べくもあらぬ身の、
　　袖打振し心知きや。

あな畏」と有る御返事、目も絢なりし御姿容に、見給ひ忍れずやありけん。

藤　唐人の袖振る事は遠れど、
　　起居に就て怜とは見き。

大方には」とあるを、限なう珍う、斯樣の方さへ不案內しからず、他の朝廷まで思し遣る御后言葉の、豫てもと微笑れて、持經の如に披て見居給り。行幸には、皇子達など、世に殘る人なく仕う奉り給り。春宮も在します。例の樂の舟ども漕廻りて、唐土高麗と盡したる舞ども種多り。樂の聲鼓の音世を響す。曩日の源氏の御夕影、由々しう思されて、御誦經など所々に爲さ

榮花物語に東三條の院の御賀に舞人家の子の君達とあり家とは良家なり撫政以下上萬の家をいふ

あなかしこあな恐れ多しゆめ〳〵もらし給ふなかなり

見給ひ忍ばれずや

いつも大方は御返事なきを今日は默し得でなり

から人の大方にはおほよそには思はざりしとなり

御后言葉今女御なり后の價値ありと賞美したるなり

持經手を放さずよむなり

せ給を、道理と哀かり聞るに、春宮の女御は、强ちなりと憎み聞え給ふ。垣代など、殿上人地下も、特殊なりと世人に思れたる、有職の限整させ給も。宰相二人、左衞門督、右衞門督、左右の樂の事を行ふ。舞の師どもなど世に普通ならぬを取つゝ、各自籠り居てなん習ひける。木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代、言知ず吹立たる物の音どもに合たる松風、眞の深山嵐と聞て吹迷ひ、色々に散交ふ木の葉の中より、青海波の輝き出たる體、甚恐きまで見ゆ。簪の紅葉甚う散過て、顏の匂に消壓たる心地すれば、御前なる菊を折て、左大將挿代給ふ。日暮かゝる程に氣色ばかり打時雨て、空の氣色さへ見知顏なるに、然る甚ら姿に、菊の色々映ひ得ならぬを簪て、今日は又無き手を盡たる、入綾の程漫寒く此世の事とも覺ず。物見知まじき下人などの、木の下岩隱、山の木の葉に埋れたるさへ、少し物の情知は、涙墮しけり。承香殿の御腹の四の皇子、未だ童にて、秋風樂舞給るなん、直次の見物なりける。是等に面白さの盡にければ、他事に目も移ず、却ては興醒しにやありけん。其夜源氏中將正三位し給ふ。頭中將正下の加階し給ふ。上達部は皆然べき限の加階し給も、此君（源氏）に引れ給るなれば、人の眼をも驚し心

ゆゝしう鬼神など魅入れて取らんかとなり　あながち今いふ「あんまり」の語に何處のも當れり　かいしろ三十六人にして詠者と唱歌者と三管（笙篳篥笛）を奏するものとなり各器を取て舞臺の南方に至り左右よりて舞ふ者二人此の中に入りて裝を改むれば其の後圍みをとき並立して樂を奏し初むるなり　四十人のかいしろ四十人の中、地下五位以下の未だ昇殿を許されざる人

をも悅せ給ふ、昔の世床しげなり。宮（藤壺）は其頃罷出給ぬれば、例の隙もやと窺ひ歩き給を事にて、大殿には騷れ給ふ。最ど彼若草尋取り給てしを、二條院には人迎へ給りと人の聞ければ、甚不快と思いたり。内々の有樣は知給ず、然も思さんは道理なれど、柔婉う例の人の如に怨宣ば、我も二心なく打語て慰め聞てんものを、疎遠にのみ取做給ふ御愛想なさに、然も有まじき遊戯事も出來るぞかし。人（葵上）の御有樣の偏に、其事の飽ぬと覺る疵も無し。他より先に見初てしかば、切に貴き方に思聞る心をも、知給ぬ間こそ有め。終には思し直されなんと、穩しく輕々しからぬ御心の程も、自然賴る方は殊なりけり。幼き人（紫）は見着い給まゝに、甚美き性質容貌にて、何心も無く睦れ纏し聞え給ふ。暫し殿の内の人にも、誰と知せじと思して、猶離たる對に、御裝飾二なくして、自身も明暮入在して、萬の御事ども を教へ聞え給ひ、手本書て習せなどしつゝ、唯外なりける御娘を迎へ給らんやうにぞ思したる。政所家司などを初め殊に分ちて、不足からず仕う奉らせ給ふ。惟光より外の人は、不審のみ思ひ聞たり。彼父宮（兵部卿）も得知り給ざりけり。姫君（紫）は、仍時々思出聞え給ふ時は、尼君を戀聞え給ふ折多り。

序（始作）破（繁聲になる）各二人、そのあと三十六人垣代のよし　左の人將前の宰相二人云々と共に系圖になし　いりあや更に立かへりて面白く舞ふ　ことなり一時鳥二村山を尋ねん入あやの聲や今日はまさると　承香殿この女御誰ともなし四の皇子、桐壺の御子源氏の弟なり　正下これまで從四位なりしを一階加へられて正四位下になりたるなり　むかしの世前生　うち〳〵のありさま

君の在する間は紛し給を、夜などは時々こそ留り給へ、此所彼所の御暇なくて、暮れば出給を、慕聞え給ふ折などあるを、甚可愛く思聞え給り。二三日内裏に侍ひ、大殿にも在する折は、最甚く屈しなどし給ば心苦うて、母無き子持らん心地して、外出も靜心なく覺え給ふ。僧都は斯くなんと聞給て、奇きもの乍、嬉しとなん思しける。彼（紫の祖母）御法事など爲給にも、壯嚴う吊ひ聞え給り。藤壺の罷出給る三條宮に、御有樣も床うて參り給れば、命婦、中納言の君、中務などやうの人々對面したり。顯露に遇し給かなと、安らず思ど、鎭めて、大方の御物語聞え給ふ程に、兵部卿宮參り給り。此君在すと聞給て對面し給り。甚趣ある體して、色向しう嫋び給るを、女にて見んは美しかりぬべく、人知ず見奉り給にも、旁睦う覺え給て、細に御物語など聞え給ふ。宮（兵部卿）も此御樣子の、常より殊に懷う打解給るを、甚愛しと見奉り給て、婿よなどは思し寄で、女にて見ばやと、色向たる御心には思す。暮ぬれば、御簾の内に入給を美くく、昔は主上の御待遇に、甚氣近く人傳ならで物をも聞え給しを、此上なう疎み給るも、辛く覺るぞ理無きや。源「屢」も侍ふべけれど、事ぞとも侍ぬ程は、自然怠り侍るを、然べき事などは、

幼少なるとはなり

まんどころ家のことを一切をするを所そこにつとむるを家司といふ

かたがた藤壺の兄なり紫上の父なる故なり

母方は物忌令に祖父祖母父方のは暇（いとま）世日服（ぶく）五月、母方の月は暇廿日服三月とあり

事も侍んこそ嬉く」など、直々しうて出給ぬ。命婦も謀り聞ん方なく、宮の御氣色も、以前よりは甚ど憂節に思し置て、心解ぬ御氣色も恥う最惜ければ、何の効も無て過行く。儚の契やと思し亂る事互に盡せず。少納言（紫の乳母）は、覺す興き世をも見るかな、是も故尼上の、此御事を思して、御看經にも祈り聞え給し佛の御驗にやと思ゆ。大殿甚貴くて在し、此所彼所數多關係ひ給をぞ、眞に大人び給ん程には、煩しき事もやと覺ける。然ど斯く取分き思給る御寵愛の程は、甚賴しげなりかし。御服母方は三月こそはとて、晦日には脱せ奉り給を、又親も無て生出給しかば、眩き色にはあらで、紅、紫、山吹の地の限織る、御小袿などを着給る體、甚う趣致しう美げなり。男君は、朝拜に參り給とて差覗き給り。源「今日よりは、大人しく成給りや」とて打笑給る、甚愛う愛嬌付き給り。疾雛押据て居給り。三尺の御厨子一雙に、品々裝飾据て、又小き屋ども作集て奉り給るを、所狹きまで遊び擴げ給り。紫「攤追ふとて、いぬきが是を毀ち侍ければ、繕ひ侍るぞ」とて、甚大事と思いたり。源「實に甚心無き人の所爲にも侍るかな。今繕せ侍ん。今日は言忌して勿泣い給そ」とて出給ふ氣色甚所狹きを、人々

つけぬなり

朝拜は一條天皇頃より廢されたれば正月一日のみ朝拜なるべし清涼殿の前庭に諸臣拜すなり

いつしか何時といふ分ちなくなり

に出て見奉れば、姫君も立出て見奉り給て、雛の中の源氏の君粧ひ立て、内裏に參せなどし給ふ。少「今年だに、少し大人びさせ給へ。十歳に餘ぬる人は雛遊は忌侍るものを、斯く御夫など儲け奉り給ては、有べかしう靜肅にこそ見奉せ給め。御髮梳る間をだに、物憂くせさせ給ふ」など少納言聞ゆ。御遊戯にのみ心入れ給れば、耻しと思せ奉んとて言ば、心の中に我は然は夫儲てけり。此人々の夫とてあるは醜くこそあれ。我は斯く美げに若き人を持りけるかなと、今ぞ思し知ける。然は言ど御年の數添ふ證なんめりかし。斯く幼き御樣子の、事に觸て著ければ、殿（源氏）の内の人々も、奇と思けれど、甚斯う情着ぬ御副臥ならんとは思ざりけり。内裏より大殿に罷出給り。例の麗う壯重しき御體にて、柔婉き御氣色も無く苦ければ、源「今年よりだに少し情着て改め給ふ御心見ば、如何に嬉からん」など聞え給ど、殊と人据て冊き給と聞給しよりは、止事なく思し定たる事にこそはと心のみ隔れて、甚ど疎く羞澁く思ざるべし。強て見知ぬやうに擬して、猥たる御樣子には、得しも心强らず、御答など打聞え給るは、仍人よりは殊なり。四年許が年長に在れば、打過し尊貴げに、盛に整りて見え給ふ。何事かは此

雛遊

雛の爲に除夜に鬼やらひをせしなり追ふなり禁中にもその夜人を疫病せの鬼に拵裝ふ式逐ふ文武天皇二十二年天下多疫百姓疾苦諸國死亡し月その年元年雲慶元年武天皇文驅あり

所狹き

仕人すべ人など多くてなり

人の飽ぬ所は在し給ふ。我心の餘り怪らぬ戯に、斯く怨られ奉るぞかしと思し知る。同じ大臣と聞るにも、寵遇此上なく在るが、宮腹に一人齋き冊き給ふ御驕傲甚此上なくて、些も疎なるをば驚異しと思聞え給るを、男君は何か甚然もと慣ひ給ふ御心の隔ともなるべし。大臣(左大臣)も、斯く賴しげなき御心を、憂しと思聞え給ひながら、見奉り給ふ時は、怨も忘し冊き營みて、御裝束し給に、名高き御帶手から持せて渡り給て、御衣の御後引繕ひなど、御沓を取ぬばかりに爲給ふ、甚哀なり。源「是は内宴などいふ事も侍る左「其は勝れるも侍り。是は唯眼馴ぬ體なればなん」とて、強て帶せ奉り給ふ。實に萬に冊き立ても見奉り給に、生る効あり。稀にても斯らん人を出し入て見んに、增す事あらじと見え給ふ。參座しにとても、數多所も歩き給ず。内裏春宮一院ばかり、扨は、藤壺の三條宮にぞ參り給る。「今日は又殊にも見え給ふかな。成熟給ふ隨に、忌々しきまで成增り給ふ御有樣かな」と、人々愛で聞るを、宮(藤壺)は御几帳の隙より微見給に就ても、思す事繁かりけり。此御事の十二月も過にしが待遠きに、此月は然ともと宮人(宮人の)も待聞え、

同じ大臣と奏上の境遇をいへり父は大臣の中にも寵遇重く世評も此上なく母は當今の妹君なる中の一人娘なるとなり

名高き御帶束帶の時着くる玉の帶(どくの帶)の名高きものなるべし玉の帶とは革製にて後には圓形なる玉、又石(紀伊石、出雲石など)角(つのなど)十個ほどとぢつくるもの故いふなり

内宴　内々の節會にて正月廿一日仁壽殿にて行はる文人ども題を賜はり詩を作り御前に

内裏にも然る御準備どもあるに、無事て經ぬ。御靈氣にやと世人も聞え騒ぐを、宮甚因惑う。此事に因り、身の徒に成ぬべき事と思し歎くに、御心地も甚苦くて惱み給ふ。中將君(源氏)は甚ど思合て、御修法など殊とはなくて、所々に爲させ給ふ。世中の定なきに就ても、斯く果敢てや止なんと、取集て歎き給に、二月の十日餘の程に、男御子生れ給ぬれば、名殘なく内裏にも宮人も悦び聞え給ふ。命長くもと思すは心憂れど、弘徽殿などの咀しげに宣ふと聞しを、空く聞做給ましかば、胡盧にやと思し强りてなん、辛う少づゝ爽い給ける。主上の疾と、床う思召たる事限なし。彼人知ぬ御心にも、甚う待遠くて、人間に參り給て、源「主上の覺束無かゝ聞させ給を、先見奉りて奏し侍ん」と聞え給ど、藤「穢げなる程なれば」とて見せ奉り給ぬも道理なり。然ば甚驚嘆う珍なるまで、寫取給る貌違べくもあらず。宮の御心の鬼に甚苦う、人の見奉るも奇しかりつる程の罪科を、正に人の思咎じやは。然ぬ些き事をだに疵を求る世に、如何なる名の終に漏出べきにかと思し續るに、身のみぞ甚心憂き。命婦の君に稀に逢給て、甚き言どもを盡し給ど、何の効あるべきにもあらず。若宮の御事を理なく覺束ながり聞え給ば、

て講ず

參座　參賀なり

一院　この物語桐壺帝を延喜(醍醐)の帝によそへて書きあれば寛平法皇(宇多)に相當するにや

ゆゝしきまで　神などのめでゝ取り給はずやと忌々しきまでなり

この御事　懷妊の事なり

御所にあられし　人は十二月御產と思ふなり源の通ひしは四月以後なり

むなしく死せしと弘徽殿などに聞かれてはなり

いつしか　疾くとなり

ひとまぬ　人の居らぬ間になり

見つるけしき命婦おとりもちしたるなれば、さまざまに思ふべし

命「何ど斯しも強ちに宣すらん。今自然見奉せ給てん」と聞ながら、思る氣色互に只ならず。傍痛き事なれば、正にも宣で、源「如何ならん世に、人傳ならで聞させん」とて、泣給ふ體ぞ心苦き。

この世子といふ意をかけたり

源「如何さまに昔結る宿緣にて、此世に斯る中の隔ぞ。斯る事こそ心得難し」と宣ふ。命婦も宮の思し亂たる體などを見奉るに、得心得がたけれ子などあると思へば又かく隔てねばならぬが心得がたしとなり

仂なうも差放ち聞ず。

命「見ても思ふ見ぬ將た如何に歎くらん、此世の人の惑てふ闇。哀に心緩びなき御事どもかな」と忍て聞けり。斯のみ言遣る方なくて歸り給ふものを、人の批判も煩しきを、理なき事に宣せ思して、命婦をも昔思いたりしやうにも打解け睦び給ず、人目立つまじく、溫和に遇し給もの乍、煩厭と思す時もあるべきを、甚困惑く思の外なる心地すべし。四月に內裏へ參り給ふ。程よりは大に成育給て、漸う起反りなどし給ふ。驚歎さまで紛所なき御顏容を、思し寄ぬ事にしあれば、又比び無き同志は、實に肖似給る

にこそはと思しけり。甚う思し冊く事限なし。源氏の君を限なき者に思召から、世人の許し聞まじかりしに依て、坊にも得据奉ずなりにしを飽ず口惜う、臣下にて畏き御有樣容貌に成長もて在るを御覽ずる隨に、心苦う思召を、斯う貴き御腹に、同じ光にて差出給れば、疵なき玉と思し冊くに、宮(藤壺)は如何なるに就ても、胸の隙なく安らず物を思す。例の中將君(源氏)此方にて御管絃などし給に、抱出奉せ給て、帝「皇子達數多あれど、其許をのみなん、斯る齡より明暮見し。然ば思渡るゝにやあらん、甚酷こそ肖たれ。幼き間は皆斯のみある事にやあらん」とて、甚く愛しと思聞させ給り。中將の君面の色變る心地して、恐うも畏くも、嬉くもあはれにも、旁移ふ心地して、涙墮ぬべし。物語などして打笑給るが、甚由々しう美きに、我身ながら是に似たらんは、甚う大切う覺え給ぞ强なるや。宮は理無く傍痛さに、汗も流てぞ在しける。中將は却々なる心地の搔亂るやうなれば、罷出給ぬ。我御方に臥給て、胸の遣方無きを、稈過して大殿へと思す。御前の前栽の、何と無く靑み渡る中に、床夏の花かに咲出たるを折せ給て、命婦の君の許に、書給ふ事多るべし。

いりは藤壺の心なり

思の外なる命婦の心なり

四月

薔薇にては卯の花さけば卯月といふなり

よそへつゝ見れど露だになぐさまずいかにかすべき撫子の花」若宮を撫子によそへてよまれたり

「よそへつゝ見に心は慰で、露けさ増る撫子の花。

花に咲なんと思給しも、効なき世に侍ければ」とあり。然ぬべき際にやありけん、御覧ぜさせて、命「只塵ばかり此花片に」と聞るを、我御心にも、物甚哀に思し知るゝ時にて、

藤「袖濡る露の縁と思にも。

仍疎れぬ大和撫子。」

とばかり微に書止たるやうなるを、喜ながら奉る。例の事なれば効あらじかしと屈托て眺め臥給るに、胸打騒て甚う嬉さにも涙墮ぬ。倩々と臥たるにも、遣方なき心地すれば、例の慰安には、西の對にぞ渡り給ふ。亂次く打膨み給る髪茎、戯れたる桂姿にて、笛を懐う吹弄びつゝ覗き給れば、女君往つる花の、露に濡たる心地して倚臥給る容、美う可愛氣なり。愛嬌溢る如にて在しながら、疾も渡り給ぬ、生恨しかりければ、例ならず背き給るなるべし。端の方に突居て、源「此方や」と宣ど、見向ず、背「入ぬる磯の」と口吟て、口覆し給る膳、甚う戯て美し。源「噫憎、斯る事口馴給にけりありつる花撫子の花なりありつるは彼の最前のなり

そひふし物によりかゝり居るなり

入りぬる磯の

「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく戀ふらくの多き」見らくは見ることなり

見るめにあくは「伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふ見るめ（海松）に人を飽くよしもがな」

押し下して琴の緒のせまりたるを押し下すなり

さしやり紫の方へ押やりたるなり

らう〳〵じう巧者なるなり

ほそろぐせり舞樂の長保樂（チャウホウラク）の破（ハ）なり長保樂の破は保曾呂倶世利、急は賀利夜須（カリヤス）と

な。見る眼に飽は正なき事ぞよ」とて、人召て、御琴敢寄て、彈せ奉り給ふ。源「箏の琴は、中の細緒の堪難きこそ所狭れ」とて、平調に押下して調べ給ふ。搔合ばかり彈て差遣給れば、得怨じも果ず、甚美う彈給ふ。幼き御身に、差遣て搖し給ふ御手容甚美ければ可愛と思して、笛吹鳴しつゝ教へ給ふ。甚敏くて、難き調子どもを、唯一遍に習取給ふ。大方藹々じう、情趣き御性質を、思ひし事叶と思す。保曾呂倶世利といふものは、名は憎けれど、面白う吹澄し給るに、搔合せ未だ若けれど、拍子違ず上手めきたり。大殿油參りて、繪どもなど御覧ずるに、出給べしとありければ、人々聲作り聞て、「兩降侍ぬべし」などいふに、姫君例の心細て屈し給り。繪も見止て俯伏て在すれば甚可愛て、御髪の甚愛たく散溢かゝりたるを搔撫て、源「外なる間は、戀しくやある」と宣ば、頷き給ふ。源「我も一日も見奉らぬは甚苦うこそ。然ど幼く在する間は、心安く思聞て、先曲々しう怨る人の心破じと思て、煩ければ暫時斯も歩くぞ。大人しく見做ては、外へも更に往まじ。人の怨負じなど思も、世に長う在て、思ふ様に見え奉んと思ぞ」など、細々と語ひ聞え給ば、有繋に耻くて、兎も角も答聞え給ず。卽て御膝に倚

あり　人々供の人たちなり

こわづくり　咳拂ひなり

懸て寢入給ぬれば、甚心苦うて、源「今宵は出ずなりぬ」と宣ば、皆立て御膳など此方に參せたり。姫君起し奉り給て、源「出ずなりぬ」と聞え給ば、慰みて起給り。諸共に食など參る。甚些げに食びて、紫「然ば寢給ねかし」と危氣に思給れば、斯るを見捨ては、甚さ道なりとも赴き難く覺え給ふ。斯樣に留められ給ふ折々なども多るを、自然洩聞く人、大殿に聞ければ、「誰ならん甚眼覺き事にもあるかな。」「今まで其人とも聞ず、然樣に纏し戯れなどすらんは、貴に奥床き人にはあらじ。」「内裏邊などにて、些く見給けん人を、物めかし給て、人や咎んと隱し給なんなり。」無邪氣に幼て聞るば」など侍ふ人々も聞合り。内裏にも斯る人ありと聞召て最惜く、帝「大臣(左大臣)の思歎るなる事も、實に物氣なかりし齡を、懇切斯く奉仕たる心を、然ばかりの事思慮ぬ齡にはあらじを、何か情無くは擧動すらん」と宣すれば、畏りたる體にて、御答も聞え給ねば、心適ぬなんめりと最惜く思召す。然は、帝「好色しう打亂て、此見る女房にも、又此方彼方の人々など、尋常ならずなども見え聞ざんめるを、如何なる物の隈に隱歩て、斯く人にも恨らるらん」と宣す。帝の御年老させ給ぬれど、斯樣の方は得過させ給ず、采女女藏人

はかなきこと　をも源氏の一寸した戯れを言ひかけられても拒否する者はなきなり

かはほり　蝙蝠(カハホリ)を見て扇をつくりそめつればいふ　いたう〳〵延べ

などをも、容貌風情あるをば、殊に寵遇し思召たれば、趣致ある宮仕人多る頃なり。些き事をも言觸給には、拒否る〻事もあり難さに、目馴るにやあらん、實にぞ奇う好色給ざんめると、試に戯言を聞掛りなどする折あれど、情なからぬ程に打答て、眞には猥れ給ぬを、質實に淋々しと思聞る人もあり。年甚う老たる典侍、人も貴く思慮ありて、貴に地位高くはありながら、甚う艶いたる性質にて、其方には重らぬあるを、斯う盛過るまで、何ど然も淫るらんと、不審く覺え給ければ、戯言言觸て試み給に、似氣なくも思ざりけり。驚異と思しながら、有繋に斯るも興うて、物など宣てけれど、人の洩聞んも古めかしき齡なれば、難面く遇し給るを、女は甚憂しと思り。帝の御梳櫛に侍けるを、果にければ、帝は御袿の人召て出させ給ぬる間に、又人も無て、此内侍常よりも美麗げに、容體頭容艶さて、裝束有樣甚美に好しげに見るを、然も古難うもと嫌厭く見給もの乍、如何思らんと有繋に過し難くて、裳の裾を引驚し給れば、扇の得ならず畫きたるを差翳して見返たる眼、甚う見延たれど眼皮は甚く黑み落ち入て、甚く外れそゝけたり。似合しからぬ扇の體かなと見給て、我持給るに翳代て見給ば、赤き

たれど、眼をはれやかに大きくして見るなり

外れそゝけ俗に眼のくしやゝになり居るなり

森の下草「大あらきの森の下草老いぬれば駒も好まず苅る人もなし」

森こそ夏の「ひまもなく茂りにけりな大あらきの森こそ夏の蔭はしるけれ」

老いたれば内侍の述懷あるをひまなく男の言ひよるにとなり大あらきは地名なり

さゝわけば「篠わけば荒れこそまさめ草がくれの駒なつくめる森の下蔭好色なればなじめる

紙の映るばかり色深きに、木高き森の畫を塗隱したり。片つ方に手は甚奮過たれど、巧なからず、「森の下草老ぬれば」など書弄びたるを、事しもこそあれ、憂ての趣向やと笑れながら源「森こそ夏の」と見めるとて、何彼と宣も似氣なく、人や見付んと苦きを、女は然も思たらず。

内「君し來ば手馴の駒に苅飼ん、盛過たる下葉なりとも。」

と言ふ體此上なう色めきたり。

源「篠分ば人や咎ん何時となく、駒馴くめる森の木隱。

煩さに」とて立給を控て、内「未だ斯る物をこそ思寄ね。今更なる身の耻になん」とて泣く體最甚じ。源「今聞ん。思ながらぞや」とて、引放て出給を切て及て、「橋柱」と恨み懸るを、帝は御袿果て、御障子の内より覗せ給けり。似合しからぬ間かなと甚可笑う思召れて、〻竜「好色心なしと常に憂慮めるを、然は言ど過さゞりけるわ」とて笑せ給ば、内侍は生眩けれど、憎からぬ人故は、濡衣をだに着ま欲がる類も有なればにや、甚も辭ひ聞させず。人々も思の外なる事かなと扱ふめるを、頭中將聞付て、到ぬ隈なき心にて、未だ思寄ざりけるよと思に、盡せぬ好色心も見ま欲うなりにければ、語ひ付にけり。此君も人よりは甚殊なるを、彼無情き人(源氏)の御慰にと思つれど、見ま欲きは、限ありける世とや、憂ての好色や。甚う忍れば源氏の君は得知給ず。見付聞ては、先恨み聞るを、齡の程最惜ければ慰んと思せど、叶ぬ物憂さに甚久う成にけるを、夕立して名殘涼き宵の紛に、溫明殿の邊をイみ歩き給ば、此内侍琵琶を甚巧う彈居たり。御前などにても、男方の御管絃に交りなどして、殊に勝る人なき上手なれば、物の恨う覺ける折から、甚哀切に聞ゆ。内「瓜作に成や爲まし」と、聲は甚美うて謠ぞ、少し厭惡き」鄂州に在けん昔の人も斯や巧しかりけんと、耳留りて聽給ふ。彈止て最甚く思ひ亂たる樣子なり。君(源氏)東屋を忍やかに謠て寄居給るに、内「押啓て來ませ」と打添たるも例に違たる心地ぞする。

内「立濡る人しもあらじ東屋に、憂ても注る雨濺かな。」

と打嘆くを、我一人しも聞合まじけれど、疎しや何事を斯までとは覺ゆ。

男子多く我れゆかば咎むる人のあるべしとなり

橋柱「津の國の長柄の橋の橋柱ふりぬる身とそ悲しかりけれ」世の中にふりぬるものは津の國のながらの橋と我となりけりー

見まほしきは源氏を見る代りにはならぬとなり

見つけ聞えては源氏を見れば

瓜作りになり催馬樂呂(リヨ)の山城の歌に「山しろのこまのわたりの瓜作り、なよや、らいしなや、いかにせん〳〵、

はれいかにせんかにせんと懊惱の心を歌へるなり

鬪州にありけん白氏文集に「夜泊二鸚鵡州一江秋月澄微隣船有二歌者一發調堪二愁絶一歌罷繼以レ泣泣聲通復咽尋レ聲見二其人一有レ婦顏如レ雪獨倚二帆檣一立娉婷十七八、夜涙似二眞珠一雙々墮二明月一借問誰家婦歌泣何凄切一問一沾レ襟不レ眉終不レ語一」

あづまや　「あづまやのまやのあまりの雨そゝぎ我れ立ぬれぬその戸開かせ」まやは眞屋なり家の前後に簷をふきおろしたる造りなり

押ひらいて來ませ　前のうたは催馬樂の初なり二段に一かずがひも戸ざしもあらばこそその戸我鎖（さゝ）め押啓いて來ませ我れや人妻（我は人の妻にはあらぬをとなり）

すりのかみ　內侍の夫なりし人なるべし

くものふるまひ　「わがせとが

源氏物語活釋

源「人妻は噫煩し東屋の、眞屋の餘も馴じとぞ思ふ。」

とて、打過なま欲けれど、餘り蔑くやと思返して、他（內侍）に隨ば、少し輕浮なる戲言など言交て、是も珍き心地ぞ爲給ふ。頭中將は、此君の甚く眞面目立過して、常に誹き給が憾きを、平然て內々に忍び給ふ方々多んめるを、如何で見現さんとのみ思渡るに、是を見付たる心地甚嬉し。斯る折に少し威嚇し聞て、御心惑して、懲ぬやと言んと思て油斷め聞ゆ。風冷かに打吹て稍更行く程に、少し睡むにやと見る氣色なれば、徐入けるに、君は解てしも寢れ給ぬ心なれば、偶と聞付て、此中將とは思寄ず、猶忘難くする修理太夫にこそあらめと思すに、老成しき人に、斯く似氣なき擧動をして、見付られん事は耻ければ、源「噫煩し。出なんよ。蜘蛛の擧動は著りつらんものを、心憂く嫌し給けるよ」とて、直衣ばかりを取て屏風の後に入給ぬ。中將可笑きを念じて、引立給る屏風の許に寄て、ごほ〳〵と疊寄て、事大しう騷すに、內侍は老たれど、甚く風流ばみ嫋びたる人の、先々も斯樣にて心動す折々ありければ慣て、甚く心慌きにも、此君（源氏）を如何に爲做聞ぬるにかと佗さに、顫ふ〳〵衝と扣たり。誰と知れで出なばやと思せど、亂次き姿にて、冠など打曲て走ん後手思に、甚愚なるべしと思し躊躇ふ。中將如何で我と知れ聞じと思て物も言ず、唯甚う怒る氣色に擬して太刀を引拔ば、女內「吾君々〳〵」と手を摺に、殆〳〵笑ぬべし。好しう若やぎて擧止たる外面こそ然てもありけれ、五十七八の人の打解て物思騷る樣子、得成ぬ二十歲の若人達の御中にて、物怖したる甚似なし。斯う有ぬ體に持僻て、恐氣なる氣色を見すれど、却々著く見付給て、我と知て殊更に爲るなりけりと烏呼に成ぬ。其人（頭中將）なんめりと見給に甚可笑ければ、太刀拔たる肘を捉て最甚う抓給れば、憾きもの乍得堪で笑ぬ。源「眞には現心かとよ、戲れ難しや。卒彼直衣着ん」と宣ど、突と捉て更に許し聞ず。源「然ば諸共にこそ」とて、中將の帶を引解て脫せ給ば、脫じと角力を兎角引競ふ程に、綻はほろほろと絕ぬ。中將、

興「包める名や洩出ん引交し、斯く綻る中の衣に。上に取着ば着らん」と言ふ。君

源「隱なきものと知る〳〵夏衣、
着たるを薄き心とぞ見る。」

と言交て、美みなき亂次き姿に引成れて皆出給ぬ。君は甚口惜く、見付られぬる事と思て臥給り。内侍は淺しう覺ければ、落留る御指貫帶など、早朝奉り。

内「恨ても言効ぞ無き立重ね、
引て返し波の餘波に。

底も顯に」とあり。面無の體やと見給も憎れど、理なしと思りしも有繋にて、

源「荒立し波に心は騷ねど、
寄けん磯を如何恨ぬ。」

とのみなん有ける。帶は中將のなりけり。我御直衣よりは色深しと見給に、將た袖も無りけり。奇き事ども、下立て亂る人は、宜愚がましき事も多らんと、甚ど御心治められ給ふ。中將宿直所より、頭「是先づ綴付させ給へ」とて、押包て遣せたるを、如何で取つらんと心疚し。此帶を得ざらましかばと思す。其色の紙に包て、

「中絶ば喞言や負と危さに、
縹の帶は取てだに見ず。」

とて遣給ふ。立返り、

頭「君に斯く引捉れぬる帶なれば、
斯て絶ぬる中と喞ん。

得免れ給じ」とあり。日闌て各自殿上に參り給り。甚沈着に物遠き體して在するに、頭の君も甚可笑けれど、公事多く奏し下す日にて、甚莊重く毅然なるを見るも互に微笑る。人間に差寄て、頭「物隱は懲ぬらんかし」とて、甚慨げなる尻目なり。源「何てか然しもあらん。立ながら歸げん人こそ最惜けれ。實際は憂や世中よ」と言合て、「床の山なる」と互に口噤む。扨其後は兎もすれば事の序毎に言迎る種子なるを、甚ど物煩き人故と思し知べし。女は仍甚艶に恨み懸るを、困惑と思歩き給ふ。中將は妹の君(奏上)にも聞出ず、唯然べき折の威嚇種にせんとぞ思ける。高貴き御腹々の皇子達だに、帝の御待遇の此上なきに、煩がりて、甚殊に避り聞え給るを、此中將は、更に押消れ聞じと、些き事に就ても思挑み聞え給ふ。此君一人ぞ、姫君(奏上)の御同腹なり

に着ん上に取り着ば著から
んかも」
綻びたる直衣
を上にきば浮
名あらはれん
となり

うすき心
さやうにかく
れなきものと
しりつゝ斯く
來て驚かすは
夏衣の薄き心
となり

うらやみなき
うらみこなき
同じ亂れ姿に
てなり

うらみても
浦見てもにか
け効は貝にか
け、裏見も裁
ちも衣にかけ
たり

底もあらばに
「別れての後
そこひしき涙
川底もあらは
になりぬと思
へば」

理なしと
中將の來て
どせしを内侍
の當惑せしも

氣の毒にてなり

よせけん 内侍の女色心より頭中將を寄せしを恨まずには居られぬとなり

帶 直衣のきれを用ふることなり源氏は正三位なれば夏の直衣薄二藍（うすふたあゐ）頭中將は正四位にて源氏よりは位卑ければ濃き二藍なり二藍は紅藍（べにはな）と青藍（あをばな）の間色なり

はた袖も 直衣の袖も又なかりしなり帶のみならずその色の帶と同じ色の紙なり

中絶えば 頭中將と内侍との中をいふ

ける。帝の皇子といふばかりにてそあれ、我も同じ大臣と聞れど、御寵容殊なるが内親王腹にて、又なく冊れたるは、何ばかり劣るべき際と覺え給ぬなるべし。人體も有べき限り整て、何事も有まゑく足てぞ在し給ける。此御中どもの競爭こそ奇かりしか。然ど頗くてなん。七月にぞ后居給めりし。源氏の君宰相に成給ひぬ。帝讓位させ給んの御用意近なりて、此若宮を坊にと思聞させ給に、御後見し給べき人在せず、御母方皆親王達にて、源氏の公事治給ふ筋ならねば、母宮をだに動なき位置に爲置奉て、强にと思すになん有ける。弘徽殿甚ど御心動き給ふ道理なり。然ど、帝「春宮の御世甚近くなりぬれば、疑なき御位なり。思し悠よ」とぞ聞させ給ける。實に春宮の御母にて、二十餘年に成給る女御を措奉ては、引越し奉り難き事なりかしと、例の安らず世人も聞けり。入内給ふ夜の御供に、宰相の君（源氏）も仕奉り給ふ。同じ后と聞る中にも、后腹の内親王、玉の光輝て、類なき御寵遇にさへ在し給へば、人も甚殊に思冊ぞ聞たり。況て理なき御心には、御輿の中も思遣れて、甚ど及なき心地し給に、漫しきまでなん。

源「盡もせぬ心の闇に昏るかな、

とのみ獨言れつゝ、物甚哀なり。御子は成長給ふ月日に隨て、甚見奉り分難げなるを、宮甚苦しと思せど、思寄る人無きなんめりかし。實に如何樣に作り替てかは、劣ぬ御有樣は世に出ものし給まし。月日の光の、空に並立たるやうにぞ、世人も思る。

雲井に人を見に就ても。

なり 催馬樂の石河をひきたり「石河の高麗人（こまうと）に帶を取られてからき悔（くい）する如何なる帶ぞ、標（はなだ）の帶の中は絶えたる」二人の中絶えては源ゆゑとかこたれんが危くて中の絶たる帶をとりても見ぬとなり

湯きさま 俗に氣（けゝもなきさまなり

とこの山 「夫かみの床の山なるいさ中川いさ（否）と答へてわが名もらすな」天上も床の山もいさや川も皆地名なり

さり聞え 遠慮するなり

みことばら この土に殊にの意あり

后 藤壺の女御中宮に立ち給ふことなり皇后と並べ置かるゝ后の位なり一條の御時藤原道隆の女定子皇后たりしに同道長の女彰子宮に入るに及び中宮として並べ置かれしに始まる皇后の代りの時もあり

みこたちにて 臣下にて政すべき人なくさりとて源氏にて摂政の例は左大臣源能有ある外藤原氏のみなるをいふなり

まゐり給ふ夜 中宮として更に入内あるなり

玉の光 今又皇子（後に冷泉院）出生ありしをいふ

南殿　紫宸殿なり櫻は御殿の巽（たつみ）にあり左近のさくらといふ

東西　南殿の東西なり東宮は左東后は右西、宴は清涼殿に還御ありてなるべし

かくて在するを　弘徽殿女御立后を越され給ふを安からずなり

たゞならずおぼゆべかんめれど　自ら知りたれど臆しはせでなり

易き事なれど詩文を作るは何ならぬことなれどなり

例なれたる例の事にて馴れなるなり

春鶯囀　一名は天長寶壽樂といふかたゞたよりある樂なり

かざし　冠に着くる花など給はせなり

今少し打過して　源氏のけしきばかりと異り少し永く舞はるゝなり

御衣賜ひて　敕祿を賜ふなり

文など講ずるにも　詩の披講の時庭中に立てたる文臺を昇きて來て御前に立て文人ども階下に進みて講頌するなり

御をば　源氏の御作を

花宴

二月の廿日餘、南殿の櫻の宴爲させ給ふ。后（藤壺）春宮（朱雀）の御局、左右にして參上り給ふ。弘徽殿女御、中宮の斯て在るを、折節毎に安らず思せど、物見には得過し給で參り給ふ。日甚好く晴て、空の氣色鳥の聲も心地快げなるに、親王達上達部より初て、其道のは皆探韵給りて詩作り給ふ。宰相中將、源「春といふ文字給れり」と宣ふ聲さへ、例の人に殊なり。次に頭中將、人の眼移も尋常ならず覺べかんめれど、甚安易く悠揚て、聲遣など物々しく勝れたり。以下の人々は皆臆し勝に羞恥る多り。地下の文人は況て、帝春宮の御才優秀く勝て在す、斯る方に巧妙き人多く在し給ふ頃なるに恥くて、遙々と曇なき庭に立出る程恥くて、易き事なれど苦氣なり。年老たる博士們の、容體奇く窶て例慣たるも哀に、種々御覽ずるなん興かりける。樂どもなど、更にも言ず調させ給り。漸う夕陽になる程に、春鶯囀といふ舞甚面白く見るに、源氏の御紅葉賀の折思出られて、春宮簪給せて、切に促め宣するに、遁難て立て、悠揚に袖反す所を、一折氣色ばかり舞給るに、

似るべきものなく見ゆ。左大臣（葵上父の）恨さも忘て涙墮し給ふ帝「頭中將何方、遲し」とあれば、柳花苑といふ舞を、是は今少し打過て、斯る事もやと用意や爲けん、甚面白ければ、御衣賜りて甚珍き事に人思り。上達部皆亂て舞給ど、夜に入ては殊に差別も見ず。詩文など講ずるにも、源氏の君の御をば、講師も得讀やらず、句毎に誦し騷る。博士們の心にも甚う思り。斯樣の折にも先此君を光にし給れば、帝も如何でか疎に思されん。中宮御眼の注るに就て、春宮の女御（弘徽殿）の強に憎み給らんも奇う、我斯う思も心憂しと、自ら思し反されける。

藝「大方に花の姿を見ましかば、
露も心の隔れましやは。」

御心の中なりけん事如何で洩にけん。夜甚う更てなん事終ける。上達部各々退出れ后春宮歸せ給ぬれば、閑靜に成ぬるに、月甚明う差出て興趣きを、源氏の君醉心地に見過し難く覺え給ければ、上の人々も打休て、斯樣に思懸ぬ時に、萬一然ぬべき隙もやあると、藤壺邊を理なう忍て窺ひ歩ど、語べき戸口も鎖てければ打嘆て、仍有じに、弘徽殿の細殿に立寄給れば、三の口啓

たり。女御は主上の御局に即て參上り給にければ、人少なる樣子なり。奥の樞戸も啓て人音も爲ず。斯樣にて世中の過失は爲るぞかしと思て、徐上りて覗給ふ。人は皆寢たるべし。甚若う美げなる聲の、尋常の人とは聞ぬ、「朧月夜に似る物ぞ無き」と打誦して、此方に來るものか。甚嬉て、直と袖を捉へ給ふ。女恐と思る氣色にて、朧「嘘無氣味、是は誰ぞ」と宣ど、源「何か疎しきぞ」とて、

源「深き夜の哀を知も入月の、朧氣ならぬ宿緣とぞ思ふ。」

とて、徐抱下して戸は押閉つ。淺しきに呆れたる體甚懷う美げなり。

朧「戯く〳〵、朧「爰に人の」と宣ど、源「麿は皆人に免れたれば、召寄たりとも何條事かあらん。唯忍てこそ」と宣ふ聲に、此君なりけりと聞定て、些慰めけり。困惑と思るもの乍、情無く强々しうは見じと思り。醉心地や例ならざりけん、許ん事は口惜きに、女も若う撓て、强き心も知ぬなるべし。可愛しと見給に、程なく明行ば心慌し。女は況て種々に思亂たる氣色なり。源「仍名告し給へ。如何でか聞べき。斯て止なんとは然とも思されじ」など

此の後の音づれのたよりもなしとなり

文字かな詞かなといふに同じ此方のことばをわるくきかれたりとなり

爰に人の人ありと人を呼ぶさまなり

いかでか聞ゆべき

煩はしう二條の殿（右大臣）のあしく思ひ給ふことなくばなりすかい給ふか名のられぬは思はぬを思ふげにすかい給ふにかとなり

世になれぬは緣につかぬはなり

帥宮の北方氏の御弟藝兵部卿宮の北方なり頭中將の室四の君と共に右大臣の娘なり

宣ば、

朧「憂き身世に即て消なば尋ても、草の原をば問じとや思ふ。」

と言ふ態、艶に媚きたり。源「理や、聞え違たる文字かな」とて、

源「何方ぞと露の宿を判む間に、小笹が原に風もこそ吹け。」

煩う思す事ならずば、何か憚ん。若し欺瞞給か」とも得言敢ず。人々起騷ぎ、主上の御局に參り交ふ氣色ども繁く彷徨ば、甚埋なくて、扇ばかりを證に取代て出給ぬ。桐壺には人々多く侍て睡眠たるもあれば、斯るを然も撓なき御微行かなと、突合つゝ虚寢をぞ爲合る。入給て臥給れど寢入れず。美かりつる人の體かな。女御（弘徽殿）の御妹達にこそは有め。未だ情に馴ぬは、五六の君ならんかし。帥宮の北方、頭中將の愛好ぬ四の君などとこそ妍と聞しか。却々其ならましかば今少し興からまし。六は春宮に奉んと志し給るを、最惜うも有べいかな。煩しう尋ん程も紛し。然て絶なんとは思ぬ氣色なりつるを、如何なれば言通すべき樣を教ずなりぬら

紛はし　五か六か紛はしとなり

思ひ到らぬ隈なき　注意の屆くなり

いづれ五か六かなり　いかにぞやどういふ樣子かなり

櫻の三重襲の扇　檜扇の兩方の上三重づゝ薄葉（うすえふ）にて包み色々の糸にてとぢ末を鮑結びにしたるなり櫻は表白、裏紅花とも濃紫とも蘇芳（ゑび）ともあり紫は今の紫ならず紅味勝ちたると見ゆれば おなしはかりいふなるべしこゝはそれを處々淡くぼかして濃き處に月のかきあるなり

んなど、萬に思も心の注るなるべし。斯樣なるに就ても、先彼邊の有樣の此上なう奥ゆかしたりたるはやと、有難う思比べられ給ふ。其日は後宴の事ありて紛れ暮し給つ。箏の琴仕奉り給ふ。昨日の事よりも、優雅う怜し。藤壺は曉に參上り給にけり。彼有明出やしぬらんと心も空にて、思到ぬ隈なき良清惟光を蹤て窺せ給ければ、「御前より罷出給にけるほどに、只今北の陣より、隱立て侍つる車ども罷出づる、御方々の里人侍つる中に、四位少將右中辨（右大臣の息たち）など急出て、送し侍つるや、弘徽殿の御退出ならんと見給つる。惡うはあらぬ樣子ども著くて、車三つばかり侍つ」と聞るにも、胸打潰れ給ふ。如何にして孰と知ん。父大臣（右大臣）など聞て、事々しう遇されんも、如何にぞや、未だ人の有樣熟く見定ぬ間は煩しかるべし。然とて知であらん將た甚口惜かるべければ、如何に爲ましと思煩て、熟々と眺臥し給り。姫君（紫）如何に徒然ならん。日頃になれば屈してやあらんと、可愛く思し遣る。彼證の扇は、櫻の三重襲にて、濃き方に霞る月を書て、水に映したる意匠、目馴たれど趣致懷う持馴したり。「草の原をば」と言し體のみ、心に懸り給ば、

源「世に知ぬ心地こそすれ有明の、月の行方を空に紛て。」

と、書付給て指給り。大殿にも久う成にけると思せど、若君（紫）も心苦ければ慰諭んと思して、二條院へ在しぬ。見る隨に甚美し氣に生成て、愛嬌付き藹々じき性質甚殊なり。飽ぬ所なう我御心の隨に敎成んと思すに叶ぬべし。男の御敎育なれば、少し人馴たる事や交んと思こそ不安心けれ。日來の御物語御琴など敎へ暮て出給を、例のと口惜う思せど、今は甚熟う習されて、理なくは慕纏さず。大殿には、例の直とも對面し給ず。徒然と萬思廻されて、箏の御琴弄りて、源「和に寢る夜は無て」と謠ひ給ふ。左大臣渡り給て、一日の興ありし事聞え給ふ。左「許多の齡にて、明王の御代四代をなん見侍ぬれど、此度の如に、詩文ども警策に、舞、樂、物の音ども調りて、齡延る事なん侍ざりつる。道々の物の上手ども多る頃ひ、委う知召調させ給る驗なり。翁も殆々舞出ぬべき心地なんし侍し」と聞え給ば、源「殊に調へ行ふ事も侍ず。唯公事に背馳なる物の師們を、此處彼處尋ね侍しなり。萬の事よりは柳花苑眞に後代の例とも成ぬべく見給しに、況て榮行く春に立出させ給らましかば、世の面目にや侍まし」と聞え給ふ。（辨中將（左大臣の息）など參合て

とをたとへて歌はるゝなり　下に大臣わたり給ひてとあるは親さくる妻とある文句に緣あり　ひとひ前日の宴のおもしろかりしをなり　きやうざく策（むち）の馬を警むるが如しの詞より出でゝ速に氣の利きたる事轉じて秀逸なるをいふ　ましてさかゆく翁もほと〳〵とありしをうけてまして左大臣の舞ひ出で給はゞ桐壺の御代の面目なるべしとなり　春宮朱雀院に六の君參らるゝこといづれ

勾欄に背中押つゝ、交々に物の音ども調合て遊び給ふ。甚面白し。彼有明の君（朧月夜）は、儚りし夢を思し出て、玄物嘆しう眺め給ふ。春宮には、四月ばかりと思し定たれば、甚理なう思し亂たるを、男君（源氏）も、尋ね給んに跡果敢くはあらねど、孰とも知で、殊に許し給ぬ邊に係んも、外觀惡く思煩ひ給ふに、三月の二十日餘、右大臣の弓の結に、上達部親王達多く集へ給て、卽て藤の花の宴し給ふ。花盛は過にたるを、外の散なんとや敎られたりけん、後て咲く櫻二木ぞ甚面白き。新う造り給る殿を、宮達の御宴着の日、磨き裝飾れたり。花々と在し給ふ殿の樣にて、何事も時好う設備給へり。源氏の君にも、一日內裏にて御對面の序に聞え給しかど、在せねば口惜う物の榮なしと思して、御子の四位少將を奉り給ふ。

在「我宿の花し普通の色ならば、何かは更に君を待まし。」

內裏に在する時にて、帝に奏し給ふ。帝「得意顏なりや」と笑せ給て、童「殊と有めるを疾う在せよかし。女御子達なども生出る所なれば、尋常の體には思まじきを」など宣す。御裝束など引粧ひ給て、甚う暮る頃に待れてぞ渡り

五の君か六の君かなり　ことに許し給はぬ　弘徽殿の父右大臣の娘なればなり　弓の結弓を射て勝負を定むる遊びなり　外の散りなん「見る人もなき山里の櫻花ほかの散りなん後ぞ咲かまし」　宮たちの弘徽殿の御腹の姫君たちのなり　やうにて家風にてなり　からの綺唐絞なり　ゑび染紫の淺きもの　袖口簾の下より女房たちの袖口を見せたることゝしきなり　蘼壺わたり藤壺わたりを

給ふ。櫻の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾甚長く引て、皆人は袍なるに、瀟洒たる親王姿の艶たるにて、冊れ入給る御容實に甚殊なり。花の艶も消壓れて、却々興醒になん。管絃など甚面白うし給て、夜少し更行く程に、源氏の君甚う醉腦る體に擬し給ひ紛立給ぬ。寢殿に、女一宮女三宮の在します東の戶口に在して倚居給へり。藤は此方の端に當てあれば、御格子ども上渡て人々出居たり。袖口など踏歌の折覺て、殊更めき持出たるを相應からず、先藤壺邊思し出らる。源「臘きに、最甚う强られて困惑にて侍り。畏れど此御前にこそは、蔭にも隱せ給め」『とて、妻戶の御簾を引被給ば、玄「噫煩し。貴らぬ人こそ、高貴き所緣は託ち侍るなれ」といふ氣色を見給に、重々しうはあらねど、通常の若人どもにはあらず、上品に美き樣子著し。空薰物甚煙う燻て、衣の音ひ甚花かに打振舞なして、奧床く奧まりたる樣子は立後れ、時好き事を好たる邊にて、高貴き御方々物見給とて、此戶口は占給るなるべし。然もあるまじき事なれど、有繁に興う思されて、孰ならんと胸打潰て、源「扇を取れて辛き眼を見る」と、打恍けたる聲に言做て、倚居給り。玄「奇うも容變たる高麗人かな」と答るは、事情知ぬにやあら

奥床しくなり　よからぬ人こそ　賤き者こそ親類もとめはすれ　弘徽殿の御腹の女一宮女三宮などは皆源氏の御姉妹なるをと女房のいふなり

扇をとられて　催馬樂石川の歌「石河の高麗人（こまうと）に帶をとられて」とあるを扇と歌ひ代へて扇の主を知らとんれしなり石河は賀茂の名所、昔高麗人の住みしなり

梓弓　あづさの木にて造れる弓なり射るを入るにかけた枕詞、る今日は弓の結なれば尤も緣あり

得忍ばぬ　默してはあられずなりてなり

弓張の三月廿日餘なれば弓張月になる頃なり心に入りたらばまどひはすまじと恨みたるなり

ん。答は爲で唯時々打長息く樣子する方に倚懸て、几帳越に手を捉て、

源「梓弓入さの山に惑かな、
微見し月の影や見ると。
何故か」と推量に宣ふを、得忍ぬなるべし。

臘「心入方ならませば弓張の、
月なきに迷ましやは。」

と言ふ聲唯其人なり。甚嬉きもの乍。

世の中代りて　朱雀の代となりてなり

やんごとなき　源氏大將になりしことこれに見えたり

こゝもかしこも　六條の御息所の方へもぶさたの體をまづ言へり

そひおはします　院の御所に藤壺のなり

今后　弘徽殿皇太后となりしなるべし

春宮　藤壺の出、後に冷泉院なり東宮坊に在すなるべし

前坊　桐壺院の御弟

葵

世中代て後、萬事物憂く思れ、御身の貴さも添にや、輕々しき御微行も憚うて、爰も彼處も待遠さの歎を重ね給ふ報にや、仍我に難面き人（藤壺）の御心を盡せずのみ思し歎く。今は況て暇なく平人の如にて添在しますを、今后は不快う思すにや、內裏にのみ侍ひ給ば、立並ぶ人無う心安げなり。折節に隨ては、御管絃などを好しう、世の響ばかり爲させ給つゝ、今の御有樣しも愛し。唯春宮（冷泉）をぞ、甚戀う思聞え給ふ。御後見の無きを不安う思聞えて、大將（源氏）に萬事聞付け給も、傍痛きもの乍、嬉と思す。眞や彼六條の御息所の御腹の前坊の姫宮、齋宮に居給にしかば、大將（源氏）の御情意も甚賴しげなきを、斯く幼き御有樣の不安さに托て、下向や爲なましと豫てより思しけり。院にも斯る事など聞召て、院「故宮の甚貴く思し殊寵し給しものを、輕々しう普通たる體に遇すなるが最惜き事。齋宮をも此の皇子達の列になん思ば、何方に付ても、疎ならざらんこそ好らめ。心の戲に仕て斯く好色事するは、甚世の謗負ぬべき事なり」など御氣色惡ければ、我御心地にも

なり

齋宮御代始めに齋宮を定めらるるなり内親王の未だ嫁せざるる者さらずば諸王の女の中を定めらるる垂仁の皇女倭姫命に始まる代年朱雀の御代始めに卜定され今秋野の宮（城外に新宮を作る）に入り明年九月伊勢に發向なり

故宮、前坊、御息所の夫なり

けしからぬ　尋壺の事なり

似げなき　御息所は八年の年長との時廿九歳なり

もてなして　もてなしてより深うしもあらぬに續く文あり意なりいみじう思し嘆きは御息所の心なり

實にと思知るれば、畏りて侍ひ給ふ。臨「人の爲耻がましき事なく、孰をも和平に遇して、女の恨な負そ」と宣するに、怪からぬ心の畏きを、聞召付たらん時と恐ければ、畏りて罷出給ぬ。又斯く院にも聞召し宣するに、人の御名も我爲も好色がましう最惜きに、甚く貴く心苦き筋には思ひ聞え給へど、未だ顯れては殊と厚遇聞え給ず。女も似氣なき御年の程を耻う思して、心解け給ぬ氣色なれば、其に隨たる體に擬して、院に聞召入れ、世中の人も知ぬはなくなりにたるを、深しもあらぬ御心の程を、甚う思し歎けり。斯る事を聞給にも、朝顏の姫君は、如何で人に似じと深う思せば、些き體なりし御返事なども專〳〵無し。然とて外觀惡く仂く遇し給ぬ御氣色を、君（源氏）も仍殊なりと思し渡る。大殿（葵上）には、斯のみ定なき御心を、不快しと思せど、餘り憚ぬ御氣色の言効なければにやあらん、深しも怨じ聞え給ず。心苦き體の御心地に惱み給て、物心細氣に思いたり。珍う憐と思ひ聞え給て嬉きもの乍、誠も〳〵由々しう思して、種々の御慎せさせ奉り給ふ。斯樣なる間は甚ど御心の暇なくて、思し怠るとはなけれど途絶多るべし。其頃齋院も下居給て、后腹の女三宮居給ぬ。帝后甚殊に思ひ聞え給る宮なれ

ば、筋殊になり給を、甚苦う思したれど、他宮達の然べき在せず、儀式など例の神事なれど嚴う騷る。祭の時限ある公事に添ふ事多く、見所此上なし。人故と見たり。御禊の日上達部など數定りて仕う奉り給ふ事なれど、寵眷殊に容貌ある限り、下襲の色、表袴の紋、馬鞍まで皆整たり。取分たる宣旨にて、大將の君（源氏）も仕奉り給ふ。豫てより物見車用意しけり。一條の大路所無く恐きまで騷たり。所々の御棧敷、心々に爲盡たる裝飾、人の袖口さへ甚き見物なり。大殿には斯樣の御外出も專爲給ぬに、御心地さへ惱しければ、思し懸ざりけるを、若き人々、女「率や自己達引忍て見侍んこそ榮なかるべけれ。一般人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、賤き山賤さへ見奉らんとすれば、遠き國々より妻子を引具しつゝ參で來なるを、御覽ぜぬは甚餘も侍るかな」といふを、大宮（葵上の母宮）聞召て、大「御心地も好き暇なり。侍ふ人々も淋々しげなんめり」とて、俄に廻し仰せ給て見給ふ。日闌行て、氣色も殊とならぬ體にて出給り。隙も無う立渡りたるに、裝ら引續て立煩ふ。好き女房車多くて、雜々の人なき隙を思定て、皆差退さする中に、網代の少し褻たる、下簾の體など趣致ばめるに、甚う引入て、微なる袖口、裳

りゐにも御存知あり世の人も知らぬはなくなりたるを深うしもなき御心と嘆かるゝなり

朝顏の姫君　箒木の巻に人のほゝゆがめかたりし人なり桃園式部卿の女、終に源氏に隨はずよきほどに始終ありし人なり

途絶多かるべし　御息所へとだえ多くなりてうらみのつもりゆくさまなり

齋院　嵯峨天皇の時有智子内親王を始めとす齋宮と同く天皇齋宮即位の初め産神なる加茂神社の齋院を新に定めらるゝなり

きさいばら

弘徽殿の御腹なる皇女なり　筋殊に世ばなれて潔齋の人になり給ふをなり　御禊齋院を卜定して二度の禊あり初め宮城内に居所を定め時そこに臨み祓河流に入る時を行ふ三年の後四月上旬吉日をえらびて野宮の齋院に入る當日又車に駕し禊所に向ふ勅使大納言以下供奉して儀衛盛なり　こゝはそのなる度めの禊なるらし　下襲の色は形小袖の下襲の如くにて後ろの胴より續きたる裾へきよ〉あり常は表白裏紅の絹なれども時のは染裝

の裾、汗衫など、物の色甚美麗にて、殊更に微たる様子著く見る車二つあり。「是は更に然様に、差退などすべき御車にもあらず」と、口強くて手觸させず。何方にも若き者們酔過ぎ、立騒たる時の事は、得制止敢ず、老成きさ御前の人〻は、斯ななど言ど、得止め敢ず。齋宮の御母御息所、物思し亂る慰にもやと、微て出給るなりけり。不知貌れど自然見知ぬ（葵上の方）「然ばかりにては然な言せそ。大將殿をぞ豪家には思聞らん」など言を、其御方の人〻も交れば、最惜と見ながら、用意せんも煩しければ、知ず貌を作る。遂に御車ども立續つれば、群集の奥に押遣れて物も見ず。懊惱しきをば勿論にて、斯る微行を其と知れぬるが甚う憾き事限なし。榻なども皆押折れて、不覺なる車の胴に打掛たれば、二無う外觀惡く悔う、何に來つらんと思に効なし。物も見で歸んとし給ど、通り出ん隙も無きに、事成ぬと言ば、有繋に、憂き人の御前渡りの待るゝも心弱しや。笹の隅だに有ねばにや、難面く過ぎ給に就ても、却々御心盡なり。實に常よりも好み整たる車們の、我も〳〵と乘溢たる下簾の透間どもゝ、然ぬ貌なれど微笑つゝ後目に留め給もあり。大殿のは著ければ、慇懃だちて渡り給ふ。御供の人〻打畏り、會釋ありつゝ渡るを

東とていろいろにそめて用うるなり　表袴の紋表袴は束帶の時大口の上に着る袴なり紋は藤の丸　鞍和鞍又は唐鞍を用う　ノ將供奉貞觀三年四月十二日加茂の齋（とき）の内親王加茂川に御禊の時之納言正三位右近衛大將源朝臣禊事を監すと國史に見えたり大將供奉の例なり　袖口車の簾より外に出すなり　ひまもなう俄のことなれば早くより見物の車居定まりたるべし　立ち柳ふ葵上の供のよ

押消れたる有様此上なう思さる。

御「影をのみ御手洗川の難面に、身の憂き程ぞ最ど知るゝ。」

と涙の溢るを、人の見るも恥けれど、眼も絢なる御容貌の、甚どしう出映を見ざらましかばと思さる。分際に就て裝束く人の有様、甚う整たりと見る中にも、上達部は甚殊なるを、一所（氏源）の御光には押消れたんめり。大將の假の隨身に、殿上の丞などのする事は例の事にもあらず、珍き行幸などの折の事なるを、今日は右近の藏人丞仕う奉れり。然ぬ御隨身們も容貌姿眩く整て、世に厚遇れ給ふ體、木草も靡ぬは有まじげなり。壺裝束などいふ姿にて、女房の賤からぬや、又尼などの世を背けるなども、仆れ轉つゝ物見に出たるも、例は、強ちなりや噫憎と見るに、今日は道理に、口打回みて髪衣籠たる賤の者們の、合掌を作りて額に中つゝ見奉り上たるも、痴がましげなる賤夫まで、己が顔の成ん體をば知で笑榮たり。何とも見入給ぬじき卑受領の女などさへ、心の限盡たる車どもに乘り、容體殊更び心化粧したるかな、興き様〻の見物なりける。況て爰彼處に立忍て通ひ給

き女房車多くて立て處なく困却するなり　雜々の人なき車副ひの雜人なきは退けさするなり　網代網代にて張りたる輿、力者六人にて舁く　下簾車の御簾の中にかくる帷（とばり）にて白絹の裾をぼかし染めたるなどのよし　かざみ童女のきるものもとは汗とりに下に着しを後には上にきるやうになりたり尻長ともいひて後のきれ長き衣なり　斯くなさる事すなど制しいふなり　さばかりにてはその位のものにそんな事を言はするなり　その御方の人々源氏の方の人も葵上の供に交り居るなり　しぢ車の轅（ながえ）を打かくるもの　すぐろなる車の胴しぢを折られたれば他の車のどうに打かけ見ともなきなり　ことなりぬ行列のはや前を通らるゝなり　さゝのくま「さゝのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見んかげをだに見んと思へどさゝ

ふ所々は、人知ず數ならぬ悲愁増るも多りけり。式部卿宮桟數にてぞ見給ける。式「甚眩さまで成熟ゆく人の容貌かな。神などは眼もこそ注め給へ」と、由々しく思し、姫君は、年頃聞え渡り給ふ御志の世人に似ぬを、斜ならんにてだにあり、況て斯しも如何でと、御心注りけり。甚近くて見んまでは思し寄ず。若き女房は、聞憎きまで聞合り。祭の日は大殿には物見給ず。大將の君、彼御車の所諍を眞似び聞る人ありければ、甚最惜う憂と思して、仍可惜尊貴に在する人の、物に情後て强硬き所付き給る餘に、自身は然も思さゞんめれど、斯る間は情交すべきものとも思いたらぬを、御性格に隨て、次々良らぬ人の爲させたるならんかし。御息所は、性情の甚尊貴く識見ありて在するものを、如何に慍じにけんと最惜うて參で給りけれど、齋宮の未だ舊の宮に在せば、榊の憚に託けて、心易くも對面し給ず。道理とは思しながら、何や斯く互に稜々しからで在せよかしと、打呟れ給ふ。今日は二條院に離れ坐して、祭見に出給ふ。西の對に渡り給て、惟光に車の事仰たり源「女房出立や」と宣て、姫君の甚美げに粧ひ立て在するを、打笑て見奉り給ふ。君は、源「卒給へ、諸共に見んよ」とて、御髪ゝ常よりも美麗に見るを搔撫給て、源「久ゝ削ぎ給ざんめるを、今日よ吉き日ならんかし」とて、暦の博士召て時問せなどし給ふ程に、源「先女房出ぬ」とて、童の姿どもの美げなるを御覽ず。甚可愛氣なる髪どもの裾花やかに削渡して、浮紋の表の袴に被る程鮮に見ゆ。源「君の御髪は我削ん」とて、源「憂て所狹うもあるかな。如何に生やらんとすらん」と、削煩ひ給ふ。源「甚長き人も、額髪は少し短くぞ有めるを、無下に後たる筋の無きや、餘り愛嬌なからん」とて削果て、源「千尋」と祝ひ聞え給ふを、少納言あはれに畏しと見奉る。

源「限なき千尋の底の海松房の、
生ゆく末は我のみぞ見ん。」

と聞え給ば、

紫「千尋とも如何でか知ん定なく、
滿干る潮の長閑からぬに。」

と物に書付て在する體、藐々じさもの乍、若う美きを愛しと思す。今日も所も無く立込にけり。馬場の殿の邊に立煩て、上達部の車ども多て、物騒げなる邊かなと猶豫給に、華麗き女車の甚う乘溢たるより、扇を差出て

のくまならねばつれなく過ぎ給ふの意なるべし　右近の藏人の丞　右近の丞にて藏人をかねたる人なり伊與介の子、後に須磨へも御供せり　つぼ裝束　垂髪を小袖に着込み小袖の前の兩褄を折りて前にはさみ市女笠〔いちめがさ〕を被りたる裝をいふ見物旅行の時の裝　例は　常ならば余りな見ともなしと見るになり　今日はことわりに源氏を見んとてなれば今日はもつともとうなづかるゝとなり

人を招寄て、「爰にやは立せ給ぬ。所避り聞ん」と聞たり。如何なる好色ならんと思されて、所も實に好き邊なれば、引寄させ給て、遯「如何でか得給る所ぞと、憾さになん」と宣ば、趣致ある扇の端を折て、

「儚しや人の翳る葵ゆゑ、
神の驗の今日を待ける。

注連の内には」とある手蹟を思し出れば、彼源典侍なりけり。淺しう古り難くも今向くかなと、憎さに蔑う、

源「翳しける心ぞ仇に思ゆる、
八千氏人に凡て葵を。」

女耻しと思聞たり。

内「悔くも翳けるかな名のみして、
人頼なる草葉ばかりを。」

と聞ゆ。人と相乘て簾をだに上給ぬを、懊惱う思ふ人多り。「曩日の御容儀の壯重かりしに、今日は打亂て微行給かし。誰ならん乘並ぶ人惡うは有じはや」と推量り聞ゆ。挑しからぬ翳爭かなと無興しく思せど、斯樣に甚面な

式部卿宮　桃園なり朝顏の姫君の父宮　かうしもいかで　いかでかく足ひ給へることぞとなりされどの意下にともりたり　人々　朝顏の女房なり　祭の日　當日、酉の日なり　もとの宮　卜定ありて左衞門の府へつかさ〕に入り給ふべきをさはる事ありてまだもとの六條宮に在するなり　榊の齋宮　齋宮の在る所にはしめ引わたし木綿へゆふ〕を神につけて殿の四面及び内外の門に立てらるゝなりゆふは楮

からぬ人、將た、人相乘り給るに憚れて、些き御答も心易く聞んも眩しかし。御息所は、物を思し亂る事、年來よりも多く添にけり。難面き方に思果給ど、今はとて振離れ下向給なんは甚心細かりぬべく、世の外聞も胡慮にならん事と思す。然とて立留るべく思しなるには、斯く此上なき體に皆思下す可んめるも安らず、釣する海土の泛子なれやと、起臥思し煩ふ氣にや、御心地も浮たるやうに思されて、惱うし給ふ。大將殿には、下向給ん事をもてはなれて、有まじき事とも妨げ聞え給ず。源「數ならぬ身を、見ま憂く思し捨んも道理なれど、今は仍言効なきにても御覽じ果んや、淺からぬには有ん」と聞え繫ひ給ば、定め難給る御心もや慰むと、立出たりし御禊河の荒かりし瀨に、甚ど萬甚憂く思し焦れたり。大殿(葵上)には、御靈氣めきて甚く煩ひ給ば、誰も〳〵思し歎くに、御外出など便なき頃なれば、二條院にも時々ぞ渡り給ふ。然は言ど貴き方は、殊に思聞え給る人の、珍き事さへ添給る御惱なれば、心苦う思し歎て、御修法や何やなど我御方にて多く行せ給ふ。靈氣生靈などいふもの多く出來て、種々の名告する中に、人に更に移ず、唯自らの御身に直と添たる體にて、殊に事大しう煩し聞る事もなけれど、又片時

（かうぞ）の織維（あまかは）にて製せし布又は紙の名

うきもん　浮線綾（ふせんりよう）浮きの線を並べて織れるなり紋は菊花の半分したるを四つにて圓形とし唐草になしあり

うへの袴　童女晴れの時は打袴の上にうへの袴をもきるなり

あはれ　感深くなり

みる　うつぼ物語に「髪の美しきことみるを作りつけたるやうなり」とあり

のりこぼれ　女房たち多く乘り居るなり

ひきよせ　源の車を寄せ

離る折も無き物一つあり。甚き驗者們にも隨ず執拗き景色、普通の物にあらずと見たり。大將の君の御通ひ所、爰彼處と思し中るに、彼御息所、二條の君（紫）などばかりこそ、普通の體には思したらざんめれば、怨恨の心も深からめと密語て、物など問せ給ど、然して聞え中る事も無し。靈氣とても殊と深き御方と聞るも無し。逝にける御乳母だつ人、若は親の御方に就づゝ傳りたる者の、弱目に出來るなど、主しからず亂れ顯る。唯熟々と音をのみ泣給て、折々は胸を堰上つゝ、甚う堪難氣に惑ふ態を爲給ば、如何に在すべきにかと、忌々しう悲う思し慌てけり。院（桐壺）よりも御訪問暇無く、御祈禱の事まで思し寄せ給ふ體の畏きに就ても、甚ど惜氣なる人の御身なり。世中普く惜み聞るを聞き給にも、御息所は平ならず思さる。年來は甚斯しも有ざりし御競爭心を、些かりし所の車爭に、人の御心の動きにけるを、彼殿（左大臣家）には然までも思し寄ざりけり。斯る御憂悶の騷に、御心地愈例ならずのみ思さるれば、他に渡り給て御修法など爲させ給ふ。大將殿聞給て、如何なる御心地にかと、最惜う思し起して渡り給り。例ならぬ旅所なれば甚う忍び給ふ。心より外なる怠慢など、罪免れぬべく聞續け給で、惱み給

きせられてなり　人のかざせる人と同車されしをいふ葵ゆゑは葵なるものをなりあふひは逢ふ日にかけたり

しめの内には人のしめたるには詮なしとなり　はしたなう俗にづけ〳〵となり

かざしける心ぞ　一度あひしを悔しと思ふ誰にも〳〵逢ふ人になり

人だのめ　空だのめに同じ意

すだれをだに　榮花物語に彈正宮和泉式部と相乘りて祭見給ふに式部が方の簾下し紫の紙の物忌つけたりとなりとゝは

ふ人（葵上）の御有樣も、憂へ聞え給ふ。源「自身は然しも思入侍ねど、親達の、甚事大しう思惑るゝが心苦さに、斯る間を見過さんとてなん、萬を思し緩めたる御心ならば、甚嬉うなん」など語ひ聞え給ふ。平生よりも心苦げなる御氣色を、道理に哀と見奉り給ふ。打解ぬ朝朗に出給ふ。御樣子の美きにも、仍振離なん事は思し反さる。貴き方に、甚ど志添ひ給べき事も出來にたれば、一つ方に思し鎮り給なんを、斯樣に待聞つゝ在んも、心のみ嘲ぬべき事、却々物思の驚さるゝ心地し給ふに、御文ばかりぞ暮つ方有る。文「日來少し癒る體なりつる心地の、俄に甚苦氣に侍るを得引避でなん」とあるを、例の託に見給ものから、

御「袖濡る戀路と半ば知ながら、
下立つ田子のみづからぞ憂き。

山井の水も道理に」とぞある、御手蹟は仍許多の人の中に、勝れたりかしと打見給つゝ、如何にぞやもある世かな。心も容貌も交々に捨べきもなく、又思定べきも無きを苦う思さる。御返事甚暗うなりにたれど、文「袖のみ濡るや如何に、深からぬ御託言になん。

前の簾を上げたるなるべし　これは車の中に几帳の帷をかくるにより苦しからざるなり

かざしあらそひ　源内待と共にいづれの歌の中にもかざしの詞あるをいふ

面なからぬ人　源内待の如く強面ならぬ人は源氏の人と相乗られしに遠慮して一寸したる應答もせぬとなり

つりするあま　「伊勢の海につりするあまのうけなれや心一つをさだめかねつる」伊勢へ下ちんかいかにせましと迷ふにさまなり浮き

尋常にてや、此御返事を自身聞させぬ」などあり。大殿には、御靈氣甚く起て、甚う煩ひ給ふ。此御生靈、故父大臣の御靈などいふものありと、聞え給ふに就て思し續れば、身一つの憂き嘆より外に、人を惡かれなど思ふ心もなけれど、物思に浮るなる魂は、然もや有んと思し知るゝ事もあり。年來萬に思殘す事々く過しつれど、斯しも碎ぬを、些き事の折に、人の思消ち無き者に遇す體なりし御禊の後、一節に憂と思し浮れにし心、鎮り難う思さるゝ故にや、少しも睡み給ふ夢には、彼姫君と覺しき人の、甚美麗にて在る處に往て、兎角引まさぐり、現にも似ず猛く嚴き一向心出來て、打搔投るなど見え給ふ事度重りにけり。噫心憂や、實に身を捨てや往にけんと、現心ならず覺え給ふ折々もあれば、然ならぬ事だに、人の御爲には、良體の事をしも言出ぬ世なれば、況て是は甚悉く言做つべき便なりと思すに、甚名立しう、一向世に亡りて後に、怨殘すは尋常の事なり。其だに他の上にては罪深う忌々しきを、現の我身ながら、然る疎しき事を言付らるゝ宿世の憂き事、

凡て難面き人に、爭で心も懸け聞じと思し返せど、思も物をなり。齋宮は、去年内裏に入給へかりしを、種々障る事ありて、此秋入給ふ。九月には、卽て野宮に移ひ給べければ、再度の御禊の準備取重て有べきに、唯奇く恍々しうて、懵然と臥惱み給を、宮人甚き大事にて、御祈禱など種々仕う奉る。尊大しき體にはあらず、何處と無く煩て月日を過し給ふ。大將殿も常に訪ひ聞え給ど、優る方の甚う煩ひ給ば、御心の暇な氣なり。未だ然べき時にもあらずと、皆人も油斷給るに、俄に御氣色ありて惱み給ば、甚どしき御祈禱の數を盡して爲させ給れど、例の執拋き御靈氣一つ更に動ず。巧妙き驗者們、珍なりとて憂慮む有繫に甚う調ぜられて、心苦氣に泣佗て、靈「少し緩べ給や。大將に聞べき事あり」と宣ふ。「然ばよ有樣あらん」とて近き御几帳の許に入奉りたり。「無下に臨終の體に在し給を、聞え置ま欲き事も在するにや」と、大臣も宮も少し退き給り。加持の僧們聲鎭て、法華經を誦たる甚う貴し。御几帳の帷子引上て見奉り給ば、甚美げにて、御腹は甚う高て臥給る體、他人だに見奉らんに心亂ぬべし。況て惜う悲う思す道理なり。白き御衣に色合甚華麗にて、御髮甚長う多きを、引結て打添たるも、斯でこそ可

たるの下の詞　もうきに緣あり靈に出でらるゝなり

もてはなれて格外になり人に更に移らず　普通は人に乘移りて誰々と名のりするにこれはせぬなり

他に渡り給ひて　神事には佛法を禁ずる故他所に移りて御修法などさるゝなり

例ならぬ　御息所の假に移りて修法の處なればなり

心苦しげなる物思はしく氣の毒げなる御息所のさまをやんごとなき方　本臺なる葵上の方に御子など出で來てはなり

田子　農民をいふ早苗などとりて泥田に下り立つさまを自身にたとへられたり

山の井の水も「くやしくぞ汲みそめてげる淺ければ袖のみぬるゝ山の井の水」淺き契とかこたるゝなり

いかにぞやもむづかしき世かななり

おぼろけにて　非常なる折ゆゑ自身參りて返事を申さぬとなり

故父大臣六條御息所の方に緣ある事を靈のふいにかゝりて御息所の父大臣などのうはさするものあるなり

愛氣に媚たる方添て、美かりけれと見ゆ。御手を捉て、源「噫甚じ、心憂き眼を見せ給かな」とて、物も得聞え給ず泣給ば、例は甚煩しく尊貴げなる御眼を、甚倦怠氣に瞰て打目成り聞え給に、涙の零る體を見給は、如何愛憐の淺からん。餘り甚く泣給ば、心苦き達の御事を思し、又斯く見給に就て、口惜う覺え給ふにやと思して、源「何事も甚斯な思し入そ。然とも聽うは在せじ。如何なりとも必ず仰有なれば對面は有なん。大臣(大臣)宮(宮)なども、深き契ある中は、廻て絶さんなれば、相見る時ありなんと思せ」と慰め給に、靈「卒否や。身上の甚苦きを、暫時休め給へと聞んとてなん。斯く參り來んとも更に思ぬを、物思ふ人の魂は、實に遊行るものになん有ける」と懷し氣に言て、

靈「戴佗び空に亂る我魂を、
結留よ下前の端。」

と宣ふ聲樣子、其人(葵上)にもあらず變り給り。甚怪と思し廻すに、唯彼御息所なりけり。驚嘆う人の兎角言を、下賤ぬ者們の言出る事と、聞憎く思して宣ひ消つを、目に見す〳〵、世には斯る事こそは有けれと疎う成ぬ。噫心憂と思されて、源「斯く宣へど誰とこそ知ね。確に宣へ」と宣へば、唯其人なる御有樣に、淺しとは尋常なり。人々近う參るも傍痛う思さる。少し御聲も鎮り給れば、間隔在するにやとて、宮(宮)の御湯持寄せ給るに搔起され給て、間なく生れ給ぬ。嬉と思す事限なきに、人に斯う移し給る御靈氣們の、妬がり惑ふ樣子甚物騷うて、後産の事又甚不安し。言ふ限なき願ども立させ給ふ驗にや、無事に事成果ぬれば、山の座主何彼と貴き僧ども、得意顏に汗押拭つゝ急ぎ罷出ぬ。多の人の心を盡しつる日來の名殘少し打休て、今は然ともと思す。御修法などは又々始添させ給ど、先は興あり。珍き御介抱に皆人心緩り。院を初め奉りて、親王達上達部、殘なき產養どもの珍に嚴きを、夜毎に見騷る。男にてさへ在れば其程の作法賑はしく愛たし。彼御息所は、斯る御有樣を聞き給ても、虛心ならず。豫ては甚危く聞しを、無事にも將たと打思しけり。奇う我にもあらぬ御心地を思し續るに、御衣なども只芥子の香に染反りたり。奇きに御沐參り、御衣着替などし給て試み給ば、仍同じ如にのみあれば、我身ながらに疎う思さるゝに、況て人の言思ん事など、人に宜べき事ならねば、心一つに思し歎に、甚ど御心

思ひ殘すこと　なく思ひ盡すなり

思ふも物をなり　「思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじやなぞ」なぞは何ぞ思ひはなれ得ぬと自責の意なり

ふたゝびの御秡　初め諸司に入らるゝにも後に野宮に入らるゝにも御禊あるなり

きこえおかま　ほしき　葵上の臨終に遺言されたきことあるにやとなり

宮面はありなん　後世までも夫婦の契はたゆまじきなり

物思ふ人の魂

は「物思へば澤の螢も我身よりあくがれいづる魂（たま）かとぞ見る」むすびとゞめよ

「魂は見つぬしはたれともしらねども結びとゞめつ下がへのつま」見し人衣の下前の褄をむすべばあくがるゝたまもとまるよしいへり

おんゆ榮花物語に一條院の母東三條院にわかれ給へることを「いとゞ思し入らせ給ひて露御湯をだにきこしめさず」とあり御ゆとはおもゆのことなるべし

うぶやしなひ御産の後三日五日七日に産

變も增り行く。大將殿は、心地少し緩て、淺しかりし程の不問語も心憂く思し出られつゝ、甚程經にけるも心苦く、又氣近くて見奉らんには、如何にぞや憂て覺べきを、人の御爲最惜う萬に思して、御文ばかりぞ有ける。甚う煩ひ給し人の、御名殘由々しう、心緩なげに誰も思したれば、道理にて御外出も無し。猶甚惱氣にのみし給ば、例の體にても未だ對面し給ず。若君の甚忌々しきまで見え給ふ御有樣を、今から甚特殊にもて冊き聞え給ふ體疎ならず、事合たる心地して、大臣も嬉う甚じと思ひ聞え給るに、唯此御心地癒り果給ぬを不安く思せど、然ばかり甚じかりし名殘にこそはと思して、如何でかは然のみは御心をも惑し給ん。若君の御眼の美さなどの、東宮に甚う似奉り給るを見奉り給ても、先戀しう思出られさせ給に、忍難くて參り給んとて、源「内裏などにも、餘り久く參り侍ねば悒さに、今日なん初立し侍るを、少し氣近き邊にて聞させばや。餘り疎遠き御心の隔かな」と、怨み聞え給れば、實に唯偏に艶に有べき事かはとて、臥給る所に御座近う參りたれば、入て物など聞え給ふ。御答時々聞え給ふも仍甚弱氣なり。然ど無下に亡人と思ひ聞し御有樣を思し出れば夢の心地して、忌々しかりし程の事どもなど

婦の衣裳嬰兒の櫬褓屯食（どんじき）ともとじきともいふ下萠に湯ふ食なり强飯を結び固めて鳥の玉子の如く圓く少し長くしあるなり）椀飯（わうばん、饗應の食膳をいふ椀に飯を盛るをすべての稱に冠らしたるなり）等を親戚知己より贈進するなり

けし邪氣の護摩には芥子を焚くなり

いかでかはさのみも油斷の心なり

おんゆこれもおもゆなり

かたへは母宮なども子供扱ひさるゝとなり

聞え給ふ序にも、彼無下に息も絶たる樣に在せしが、引返し呟々と宣し事ども思し出るに、心憂れば、源「卒や聞ま欲き事甚多れど、未だ甚倦怠氣に思したんめればこそ」とて、源「御湯參れ」などさへ扱ひ聞え給ふを、何時習ひ給けんと、人々可憐がり聞ゆ。甚美氣なる人の、甚う弱り損れて、存かゞかの氣色にて臥給る體、甚可愛氣に苦げなり。御髮の亂たる筋も無く、散々と被る枕の邊、有難きまで見れば、年來何事を飽ぬ事ありて思つらんと、奇きまで打目戍れ給ふ。源「院などに參て、甚疾く退出なん。斯樣にて疎遠からず見奉らば嬉かるべきを、宮（母宮）の直と在するに、心なくやと憚て過しつるも苦きを、仍漸次心强く思し做て、例の御座所にこそ。餘り若く擧動し給ば、傍は斯て在し給ぞ」など聞え置き給て、甚美麗げに打裝束て出給ふを、常よりは目注て、見出して臥給り。秋の司召あるべき定日にて、大殿も參り給ば、君達も切り望み給ふ事どもありて、殿の御邊離れ給ねば、皆引續き出給ぬ。殿の内人少に肅條なる間に、俄に例の御胸を壓上て、最甚う惑ひ給ふ。内裏に御消息聞え給ふ程も無く、絶入給ぬ。足を空にて誰も〳〵退出給ぬれば、除目の夜なりけれど、斯く理なき御障なれば、皆事破たる樣なり。罵り騷ぐ

司召　在京の所司を任補する儀式をいふ

いたはりのぞむ　勞を以て官を望むなり

山とのみいふ　山いつも比叡山なり

さながらそのまゝ

悲きことに　奏上のこと六條御息所の靈になられしことなどなり

そこなはれ　生前の容の損じゆくなり

日丑になれば　奏上は十四日なり葬送は廿日餘りなり

もこよふ　足もたゝずし

てはらばひゆくさまなり

人一人か　夕顏上をいふ

法界三昧　法界は法相とも實相ともいふ實相を觀見

間に、夜半ばかりなれば、山の座主何彼の僧達も得請じ敢給ず。今は然とも、思ひ油斷たりつるに淺しければ、殿の内の人物にぞ當り惑ふ。所々の御吊問の使など立込たれど得聞え次ず、動顚滿て甚き御昏惑ども、甚恐きまで見え給ふ。御靈氣の度々取入奉しを思して、御枕なども然ながら二三日見奉り給ど、漸う變り給ふ事どものあれば、限と思し果る程、誰も誰も甚甚じ。大將殿は、悲き事に事を添て、世中を甚憂きものに思し染ぬれば、尋常ならぬ御邊の吊問どもゝ、心憂しとのみぞ凡て思さるゝ。院（桐壺）に思し嘆き吊ひ聞させ給ふ體、反りて面目しげなるを、嬉き瀨も交りて、大臣は御涙の暇無し。人の申に隨て、嚴き事どもを生や返り給と、種々殘る事なく、半損れ給ふ事どものあるを見るゝも、盡せず思し惑ど効なくて日比になれば、如何はせんとて、鳥邊野に率て奉る程、甚げなる事多り。此方彼方の御送の人ども、寺々の念佛の僧など、許多廣き野に所も無し。院をば更にも申ず、后の宮（藤壺）春宮（冷泉）などの御使、然ぬ所々のも參り交て、飽ず甚き御吊問を聞え給ふ。大臣は得立も上り給ず、斯る齡の末に、若く盛の子に後れ奉りて、透蛇ふ耳と耻泣き給を、許多の人悲う見奉る。終夜甚う騷りつる儀式なれど、甚も儚き御屍はかりを御名殘にて、曉深く歸り給ふ。例の事なれど、人一人か、數多しも見給ぬ事なればにや、類なく思し憧たり。八月廿餘日の有明なれば、空の氣色も哀少らぬに、左大臣の闇に昏惑ひ給る體を見給も、道理に甚じければ、空のみ眺られ給て、

源「上りぬる煙は其と分ねども、凡て雲井の哀なるかな。」

殿に在し着ても、露交睫れ給ず。年來の御有樣を思し出つゝ、何で終には自然見直し給てん、と悠長に思て等閑の戯に就ても憂しと覺られ奉りけん。世を經て疎く耻きものに思て逝果給ぬるなど、悔き事多く思し續られれど効なし。鈍る御衣奉るも夢の心地して、我先立ましかば深く染め給ましと思すさへ、

源「限あれば薄墨衣淺けれど、涙ぞ袖を淵と成ける。」

とて、念誦し給る容、甚ど優婉さ增りて、經忍びやかに誦み給つゝ、法界三昧普賢大士と打宣る、行ひ馴たる法師よりは勝なり。若君を見奉り給に

する三昧なり普賢菩薩の所得といふ法界のあらゆる所作を三昧とするなり觀音は慈悲三昧に住し給ふといふが如し

何にしのぶ「結びおく形見の子だになかりせば何に忍の草を摘まゝし」

さゑもんのつかさ　宮中のなりうしと思ひしみ　源氏の心なりかゝるほだし　夕霧（葵上の生みおかれし若君）なり

時しもあれ「時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだにこひしきものを」風の音

も、何に忍のと甚ど露けゝれど、斯る遺身さへ無らましかばと思し慰む。宮は沈入て其儘に起上り給ず、危氣に見え給ふを又思し騷て、御祈禱など爲させ給ふ。果敢く過行ば、御法事の支度など爲させ給も、思し懸ざりし事なれば、盡せず甚うなん。斜に偏なるをだに、人の親は如何思める。況て道理なり。又姉妹在せぬだに淋々く思しつるに、袖の上の玉の碎けたりけんよりも淺ましげなり。大將の君は、二條院にだにも、假初にも渡り給ず。切に心深く思歎て、誦經を熱心に爲給つゝ明し暮し給ふ。所々には御文ばかりぞ奉り給ふ。彼御息所は齋宮の左衞門寮に入給にければ、甚ど嚴き御潔齋に託て聞も通ひ給ず。憂しと思染にし世も、凡て厭しく成給て、斯る覊絆だに添ざらましかば、願しき姿にも成なましと思すには、先對の姫君の淋々しくて在し給らん有樣ぞ、偶と思し遣るゝ。夜は御帳の內に一人臥給ふに、宿直の人々は近う廻りて侍へど、傍淋くて、時しも有れと寢覺勝なるに、聲勝たる限選び侍せ給ふ、念佛の曉方など忍難し。深き秋の哀增り行く。風の音身に染けるかなと、慣ぬ御獨寢の明し難ね給る朝朗の霧渡るに、菊の氣色ばめる枝に、濃き靑鈍の紙なる文付て、差置て往にけ

「吹よれば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな」

菊のけしきばめる　未開なるなり開かんとせるもの

こき靑鈍　縹（はなだ）に青氣の交れるなり服者の衣の色

今めかしう　氣が利きてとなり

聞えぬほど　音無なるは齋宮の潔齋中なればとなり

さるべき御壽命ならん　となり

つゝましき　潔齋さるゝほどなればなり

思しけちて恨を思し消ちてよとなり

これにも　「覽ぜずもや

り。趣致しうもと見給ば、御息所の御手蹟なり。源「聞ぬ程は思し知らんや」

源「人の世を哀と聞くも露けきに、後る袖を思こそやれ。

唯今の空に思ひ給へ餘てなん」とあり。常よりも優にも書給るかなと、有繁に措難う見給もの乍、難面の御吊問やと心憂し。然とて搔絕え音ひ聞ざらんも最惜く、人の御名の朽ぬべき事を思し亂る。逝にし人は兎ても角ても、然べきにこそは在し給けめ。何に然る事を判然と明瞭に見聞けんと、悔きは我御心ながら、仍得思し直すまじきなんめりかし。齋宮の御潔齋も煩しくやなど、久う思煩ひ給ど、殊となる御返書なくば情なくやとて、紫の鈍める紙に、文「此上なう程經侍りにけるを思ひ給へ怠ずながら、憚しき程は更に思し知らんやとてなん。

源「留る身も消しも同じ露の世に、心隔らん程ぞ儚き。

半は思し消てよかし。御覽ぜずもやとて、是にも」と聞え給り。里に在する時なりければ忍て見給て、仄し給る氣色を、心の鬼に著く見給て、然ばよ

と是よりもぶさたに過ぎしとなり

されば夜靈に出でしを見給ひしよとなり

父のおん代り父前坊の代りにもなり

うちずみし給へど御息所にも内裏に住み給へとありしをなり

正日四十九日なり

三位中將葵上の兄頭中將なり三位になりたることゝに見えたり

かの内侍源の内侍なり

と思すも最甚じ。仍甚限なき身の憂なりけり。斯樣なる風聞ありて、院にも如何に思さん。故前坊の同き御兄弟といふ中にも、甚う思交し聞させ給て、此齋宮の御事をも、懇切に吩咐させ給しかば、其御代にも卽て見奉り扱んなど常に宣せて、卽て內裏住し給へと、度々聞させ給しをだに、甚有まじき事と思離にしを、斯く心より外に若々しき憂悶をして、遂に浮名をさへ流し果べき事と思し亂るに、仍例の體にも在せず。然は大方の世に就て、奥床く趣ある風聞ありて、昔より名高く在し給ば、野宮の御移居の時にも、風流う趣致たる事多く爲做て、殿上人們の好色きなどは、朝夕の露分歩くを、其頃の役になん爲るなど聞え給ても、大將の君(源氏)は、道理ぞかし、趣は飽まで付給るものを、若し世中に飽果て下向給なば、淋々しくも有べきかなと、有繫に思されけり。御法事など過ぬれど、正日まで仍籠り在す。慣ぬ御徒然を心苦がり給て、三位中將(頭中將)は常に參り給つゝ、世中の御物語など、眞面目なるをも、又例の戯しき事をも聞え給つゝ慰め聞え給に、彼內侍ぞ打笑ひ給ふ種には成める。大將の君は、源「噫最惜や。祖母殿の上な甚う輕蔑給そ」と諫め給もの乍、常に可笑と思したり。彼十六夜の冴なりし秋の

いざよひもろともに大內山はの歌の時のことなり

にび色薄黑き色なり十月の更衣の序に色をうすくされしなるべし

さしぬき裾に糸をさしぬきて足に括りつく平絹或は織物なり奴袴(ぬばかま)ともいふ

雨となり雲とやなりにけん文選高唐賦序云昔先王嘗遊高唐怠而晝寢夢見婦人曰妾巫山之女也爲高唐之客聞君遊高唐願薦枕席王因

事など、然ねも種々の好色事どもを、互に限なく言顯し給ふ。果々は哀なる世を言〳〵て、打泣なども爲給けり。時雨打して物哀なる暮つ方、中將の君鈍色の直衣指貫薄かに衣更して、霜枯の前栽見給ふ時なりけり。風荒らかに吹き時雨颯と爲たる程、涙も爭ふ心地して、源「雨となり雲とや成にけん、今は知ず」と打獨語て、頰杖突き給る容、女にては見捨て亡らん魂魄、必留りなんかしと、色めかしき心地に打目成れつゝ、近う突居給れば、亂次う打亂れ給る體ながら、紐ばかりをさし直し給ふ。是は今少し濃なる夏の御直衣に、紅の艶やかなる引襲て微れ給るしも、見ても飽ぬ心地ぞする。中將も甚哀なる眼に眺め給り。

頭「雨となり時雨る空の浮雲を、何の方と分て眺ん。

行方なしや」と獨語のやうなるを、

源「見し人の雨と成にし雲井さへ、甚ど時雨に搔昏す頃。」

幸レ之去而辭日妾在二巫山之陽高丘岨一且爲二朝雲一暮爲二行雨一

細直衣のなり　こまやかなる嬪妻の服も同じ姉妹の服も同じく三月の輕服なり中將は更衣の序に色を薄くしたれども源氏の同じく色濃きは志の深き故なり

居たちて立てもにて常になり　おんかたざま葵上の母宮は源の伯母なり

りんだう　莖二三尺葉は笹の如く對生秋の半に莖の間毎に三五花を開く青碧色又は白花

と宣ふ御氣色も、淺からぬ程著く見れば、奇う、年頃は甚しもあらぬ御志を、院など居起て宣せ、大臣の御待遇も心苦う、大宮の御方方にもて離なじきなど方々に差合たれば、得しも振捨給で、物憂氣なる御氣色ながら、有へ經給ふなんめりかしと、最惜う見る折々ありつるを、眞に貴く重き方は、殊に思ひ聞え給けるなんめりと見知には、愈口惜う思さる。萬に就て、光失ぬる心地して屈し痛かりけり。枯たる下草の中に、龍膽瞿麥などの咲出たるを折せ給て、中將の立給ぬる後に、若君の御乳母宰相の君して、

源「草枯の籬に殘る撫子を、
別し秋の遺身とぞ見る。
匂劣てや御覽ぜらるらん」と聞え給り。實に何心なき御笑顏ぞ甚う美き。宮(母宮)は吹く風に就てだに、木の葉より勝に脆き御涙は、況て取敢給ず、

宮「今も見て却々袖を腐すかな、
垣ほ荒にし大和撫子。」

仍甚う徒然なれば、朝顏の宮に、今日の哀は然とも見知給らんと、推量るゝ御性情なれば、暗き時刻なれど聞え給ふ。絕間遠ければ、然るものと成にたる御文なれば、咎なくて御覽ぜさす。空の色したる唐紙に、

源「分て此暮こそ袖は露けゝれ、
物思ふ秋は數多經ぬれど。

何時も時雨は」とあり。御手蹟などの心注て書き給る、常よりも見所ありて過し難き程なりと、人々も聞え自身も思はれければ、朝「大內山を思遣り聞えながら、得やは」とて、

朝「秋霧に立後ぬと聞しより、
時雨る空も如何とぞ思ふ。」

とのみ微なる墨付にて所體奧床し。何事に就ても、見勝は難き世なんめるを、難面き人しもこそは、切に覺え給ふ人の御性質なり。難面ながら然べき折々の情味を過し給ぬ、是こそ互に情も見果べき事なれ。仍才能過て人目に見ゆばかりなるは、餘の難も出來けり。對の姫君を然は生し立じと思す。徒然にて戀しと思ら一んかしと忘る折なけれど、唯女親無き子を置たらん心地して見ぬ間不安く、如何思らんと覺えぬぞ心易き事なりける、暮果ぬれば、大殿油近く參せて、然べき限の人々、御前にて物語など爲させ給ふ。中

にほひおとり　源氏自身の子を謙遜されて大宮に葵上よりは形なるを劣りてや御覽んぜられんとなり

物思ふ秋　朝顏の姫君のつれなくて程ふる物思はしさをいへり

いつも時雨は　「神無月いつも時雨はふりしかどかたなかりきーひづるは濡るゝなり

人々も姫君の女房たちなり

大內山　大內の事なり大將の直廬をもいふ、こゝはたゞこもりおはしますありたりをさして

いひたるべし　亭子院仁和寺の大内山といふ所に在しまいす時堤中納言兼輔勅使に参りて白雲の九重に立つ峯なれば大内山とむべもいひけり　よみしと同じく源氏の物淋しくこもり在しますなるべしひしなる處をい

納言の君といふは、年來忍び思しゝかど、此御愁思の程は却々然樣なる筋にも懸給ず、切なる御心かなと見奉るに、大方には懷く打語ひ給て、源「斯う此日來有しより勝に、誰も〳〵紛る方なく見馴々々て、得しも常に斯ずば戀しからじや。甚き事をば然ものにて、唯打思廻すこそ堪難き事多りけれ」と宣ば、甚ど皆泣て、「言効なき御事は、唯搔昏す心地し侍れば勿論にて、名殘なき體に離れ果させ給ん程、思ひ給にこそ」と聞もやらず。哀と見渡し給て、源「名殘無くは如何にか。甚心淺くも取做給ふかな。心長き人だにあらば見果給なんものを、命こそ儚けれ」とて、灯を打眺め給る眼の中、濡給る程ぞ愛たき。取分て可愛し給し小き童の、親們も無く甚心細氣に思る、道理に見給て、源「あてきは今は我をこそ思べき人なんめれ」と宣ば、甚く泣く。程なき袖、人よりは黑く染て、黑き汗衫、萱草色の袴など着たるも可愛き姿なり。源「昔を忘ざらん人は、徒然を忍ても、幼き人(若君)を見捨ず在し給へ。見し世の名殘なく人々さへ離なば、便宜無さも增りぬべくなん」など、皆心長かるべき事どもを宣ど、率や甚ど待遠にぞ成給んと思に、甚ど心細し。大殿(左大臣)は、人々に、分際年齡を置つゝ、些き甑弄物ども、又眞

かくは約しても命こそ定めなければとなり　あてきあて君なり　葵に仕へなる童女なり　上東門院の上童に此の名あり　ほどなきあこめ小さき袖なり　人よりは愛されし主の喪とて服の色を濃くしたるなり　ひきはなち眼より放さぬなり

に彼御遺物なるべき物など、殊とならぬ體に取做つゝ皆配せ給けり。君は斯てのみも如何でかは徒然と過し給んとて、院へ參り給ふ。御車差出て御前驅など參集る程、折知顏なる時雨打濺て、木葉誘ふ風慌う吹拂たるに、御前に侍ふ人々物甚ど心細くて、少し間ありつる袖ども濕ひ渡ぬ。夜さりは卽て二條院に泊り給べしとて、侍の人々も彼處にて待聞んとなるべし。各自立出るに、今日にしも終むみじき事なれど、又なく物悲し。左大臣も宮も今日の氣色に、又悲さ改めて思さる。宮の御前に御消息聞え給り。源「院に待遠り宣するにより、今日なん參り侍る。假初に立出侍るに就て、今日まで生存侍りにけるよと、漫心地のみ動てなん。聞させんも却々に侍るべければ、其方にも參り侍らぬ」とあれば、甚どしく宮(母宮)は目も見え給ず、沈入て御返事も得聞え給ず。左大臣ぞ卽て渡り給る。甚堪難げに思して、御袖も引放ち給ず。見奉る人々も甚悲し。大將の君は、世を思し續る事甚種々にて、泣給ふ體哀に情深きもの乍、甚體好く優雅給り。左大臣久う躊躇給て、左「齡の積には、然しも有まじき事に就てだに、涙脆なる事に侍るを、況て乾る世なう思給へ惑ひ侍る心を、得鎭め侍らねば人目も甚亂がはしく、心弱

き體に侍べければ、院などにも得參り侍ぬなり。事の序には然樣に趣け奏し給へ。幾許も侍らじき老の末に打捨られたるが、憂くも侍るかな」と、切て思鎭て宣ふ氣色甚理無し。君も度々洟打拭て、源「後れ先立つ程の定なさは、世の性と見給へ知ながら、當面て覺え侍る昏惑は、類あるまじき事になん。院にも有樣奏し侍んに、推量せ給てん」と聞え給ふ。左「然ば時雨も隙なく侍るめるを、暮ぬ程に」と勸し聞え給ふ。打見廻し給に、御几帳の後、障子の彼方などの啓通りたるなどに、女房三十人許押凝て、濃き淡き鈍色どもを着つゝ、皆甚う心細氣にて、打萎つゝ居集りたるを、甚哀と見給ふ。左「思し捨まじき人も留り給ればとも物の序には立寄せ給じやなど慰め侍るを、偏に遣悶なき女房などは、今日を限に思し捨る故郷と思屈して、永く別ぬる悲哀よりも、唯時々馴れ仕う奉る年月の名殘なかるべきを、歎き侍るめるなん道理なる。打解け在す事は侍らざりつれど、然とも遂には人と聯な賴し侍つるを、實にこそ心細き夕に侍れ」とても、又泣給ぬ。源「甚淺慮なる人々の歎にも侍るなるかな。眞に如何なりともと悠閑に思ひ給つる間は、自然御眼離る折も侍りつらんを、却々今は何を賴てか忘り侍ん。今御覽じて

ながく別れぬる葵上の死別よりもなり

古き枕　古註に白氏文集長恨歌に瓦冷霜花白舊枕故衾誰與ニカセン共ト一と ある由ひきあれど長恨歌には「鴛鴦瓦冷霜華重翡翠衾寒誰與共ニセン」とありて長恨歌傳にも本文にある句はなしもしは作者の詩の意をとりて書きくづせるか

ひとひの花　人宮に奉られしなでしこなり

ちぎり長から　で親子の緣長からでなり

ん」とて出給ふを、左大臣見送り聞え給て入給るに、御裝置より始め、在しに變る事もなけれど、空蟬の空き心地ぞし給ふ。御帳の前に御硯など打散して、手習捨て給るを取て、目を搾りつゝ見給を、若き人々は悲き中にも微笑も有べし。哀なる故事ども唐のも倭のも書汚しつゝ、草にも眞字にも種々珍き體に書交給り。優秀の御手蹟やと空を仰て眺め給ふ。他人に見奉り成んが惜きなるべし。「古き枕古き衾、誰と共にか」と有る處に、

源「亡魂ぞ甚ど悲き寢し床の、
離れ難き心慣に。」

又「霜の花白し」と有る所に、

源「君なくて塵積りぬる床夏の、
露打拂ひ幾夜寢ぬらん。」

曩日の花なるべし、枯て交り。宮(大宮)に御覽ぜさせ給て、左「言効なき事をば勿論にて、斯る悲き儔、世に無くやはと思做つゝ、契長からで斯く心を惑すべくてこそは有けめと、反て難面く前世を思遣つゝなん斷念し侍るを、唯日來に添て戀しさの堪難きと、此大將の君の今はと他に成給んなん、飽す

ひごろにそひて　無常の習ひとあきらめても凡情にて又こひしさの堪へがたきなり

櫻卷き　櫻卷は服者の常なり冠も無文なり常は有文の羅（うすもの）

甚く思給らるゝ。一日二日も見え給ず、離々に在せしをだに、飽ず胸痛く思ひ侍しを、朝夕の光失ては、爭か生存べからん」と、御聲も得忍び敢給ず泣給ふに、御前なる年長しき人など甚悲くて颯と打泣たる、漫寒き夕の氣色なり。若き人々は所々に群居つゝ、各自同志哀なる事ども打語て、「殿の思し宣する如に、若君を見奉りてこそは、慰むべかんめれと思も、甚些さ程の御遺身にこそ」と、各自假初に罷出て參んと言もあれば、互に別惜む程各自哀なる事ども多り。院へ參り給れば、院「最甚く面痩にけり。精進にて日を經る氣にや」と心苦げに思召て、御前にて膳など參せ給て、兎や角やと思し扱ひ聞させ給る體、切に畏し。中宮の御方に參り給れば、人々珍がり見奉る。命婦の君して、藝思盡せぬ事ども、程經るに就ても如何に」と御消息聞え給り。源「常なき世は、大方にも思ふ給へ知にしを、目に近く見侍りつるに、厭しき事多く思給へ亂しも、度々の御消息に慰め侍てなん、今日までも」とて、然ぬ折だにある御氣色、取添て甚心苦げなり。無紋の袍の御衣に、鈍色の御下襲、櫻卷き給る窶姿、華美なる御裝よりも、優婉しさ增り給り。春宮にも久う參覲無さなど聞え給て、夜更てぞ罷出給ふ。二條院には、方々拂ひ磨きて、男女待聞えたり。十鶴們皆參上りて、我も〳〵と裝束き、化粧したるを見るに就ても、彼居並み屈じたりつる氣色どもぞ、哀に思出られ給ふ。御裝束奉り替て、西の對に渡り給り。更衣の御裝飾、曇なく鮮麗に見て、好き若人童、形姿見易く整て、少納言が周旋心詞なき所なく、奥床しと見給ふ。姫君甚美う引粧て在す。源「久しかりつる間に、甚此上なうこそ大人び給にけれ」とて、小き御几帳引上て見奉り給ば、打側みて耻ひ給る御容飽ぬ所なし。灯影の御側目、頭容など、唯彼心盡し聞る人（藤壺）の御容、違ふ所なくも成行くかなと見給に、甚嬉し。近く寄居て、疎遠かりつる間の事どもなど聞え給て、源「日來の物語、長閑に聞えま欲けれど、忌々しう侍ば、暫時は他方に休息て參り來ん。今は途絶なく見奉るべければ、厭しうさへや思されん」と、語ひ聞え給を、少納言は嬉と聞もの乍、仍危く思ひ聞ゆ。貴き御微行處多う係ひ給れば、又煩しきや立代り給んと思ぞ、憎き心なるや。我御方に渡り給て、中將の君といふに御足按摩など參り休て、大殿籠ぬ。朝には若君（夕霧）の御許に御文奉り給ふ。哀なる御返事を見給にも、盡せぬ事どものみなん。甚徒然に眺勝なれど、何と無き御外出も懶

偏突き　詩句などの中の字の偏をかくしつくりのみを見せ何偏と推しあてしむるあそび

く思しなりて、思しも立れず。姫君の何事も有まゝ欲う整ひ果て、甚愛たうのみ見え給を、似氣なからぬ程に將た見做給れば、氣色向たる事など折々聞え試み給ど、見も知給ぬ氣色なり。徒然なる隨に、唯此方にて碁打ち偏突など爲給つゝ、日を暮し給に、性質の藹々じう愛嬌付き、些き戯事の中にも、美き趣向を爲出給ば、思し放たる年月こそ、唯然る方の可愛さのみは有つれ、忍難くなりて、心苦けれど如何ありけん、人の境界見奉り分べき御中にもあらぬに、男君は疾く起給て、女君は更に起給ぬ朝あり。人々如何なれば斯く在すならん、御心地の例ならず思さるゝにやと見奉り歎くに、君は渡り給とて、御硯の箱を御帳の内に差入て在しにけり。人間に辛じて頭擡げ給るに、引結たる文御枕の許に在り。何心も無く引披て見給ば、

源「理なくも隔けるかな夜を重ね、
有繋に馴し中の衣を。」

と書遊び給る樣なり。斯る御心在すらんとは、掛ても思し寄ざりしかば、仰て斯う心憂かりける御心を、二心なく頼しき物に思ひ聞けんと淺しう思さる。畫つ方渡り給て、源「惱げに爲給らんは、如何なる御心地ぞ。今日は碁も

御衾　衾は色紅なり紅衾ともいふ四角四方なり

ねのこのもち　十月亥の日餅を作り食へば病なしといふ

いろ〳〵にて　亥子餅七種大豆（まめ）小豆（あづき）大角豆（さゝぎ）胡麻栗柿糖（あめ）

ところせきさま　澤山なるさま

ねの子　當座におもし

打で淋々しや」とて覗き給ば、愈々御衣引被て臥給り。人々退きつゝ侍へば寄給て、源「何ど斯く悒き御待遇ぞ。思の外に心憂くこそ在しけれな。人も如何に怪しと思らん」とて、御衾を引遣給れば、汗に押浸して、額髪も甚う濡給り。源「噫憂て、是は甚忌々しき事よ」とて、萬に嗛へ聞え給ど、眞に甚憂しと思ひ給て、露の御答も爲給ず。源「縦し〳〵更に見え奉じ。甚恥し」など怨じ給て、御硯啓て見給ど物もなければ、若の御心有樣やと、可愛く見奉り給て、日一日入居て慰め聞え給ど、解難き御氣色甚ど可愛氣なり。其夜さり亥猪の餅參せたゝ。斯る御忌中の程なれば、事々しき體にはあらで、此方ばかりに、美げなる檜割籠などばかりを、色々にて參るを見給て、君南の方に出給て、惟光を召て、源「此餅、斯う數々に所狹き體にはあらで、明日の暮に參せよ。今日は忌々しき日なりけれ」と、打微笑て宣ふ御氣色を、心敏き者にて偶と思寄ぬ。惟光確にも承らで、推「實に愛嬌の初は、日選して食召すべき事にこそ。扨も子の子は幾個か仕奉らすべう侍ん」と、眞面目立て申ば、源「三個か一個にても有んかし」と宣に、心得果て立ぬ。物馴の體やと君は思す。人にも言で手からと言ふ程、里にてぞ作り居たりける。君は嗛へ

ろくいひたるなり亥の日の次は子なればべにして枕上に食物を置くは死者になりは一生家に歸らぬやうとて嫁すひるを歸ると白衣なるべし三日の餅（みかの餅）といふ女の辨少納言の女なり

三つか一つ古來秘事などいひてあれどわれざとなれば少數にてよきなる上に死食すること嫁娶の儀は且嫁したる家に歸りて嫁すひるを歸ると白衣なるべし三日の餅（みかの餅）といふ女の辨少納言の女なり

かうごの箱たきものを入れおくつぼを入るゝ箱めだゝぬやうにそれにもちひを入れたるなりあだになりたづらに人にもらすなりまことにほんになり自身も言ひしを心づきてなりまじりあだなどいふことよもまじるまじと緣起を祝ふなるべしけそく臺の足に花など彫刻しあるものいとかうしもいつとはなくてあらんと思ひしに嫁娶の儀をされしをなり内々に内々自身に仰せ下されかしなりにひたまくら「若草の新手枕をまき初めて夜をや隔てん憎からなく」に一紫を前に若草によせて

陀給て、今初て盜み持來らん女の心地するも甚興くて、年來憐と思ひ聞つるは、片端にもあらざりけり。人の心こそ憂てあるものはあれ。今は一夜も隔ん事の理なかるべき事と思さる。宣し餅、忍て甚う夜更して持參り。少納言は大人しくて、恥うや思さんと思慮深く用意て、女の辨といふを呼出て、「これ忍て參せ給へ」とて、香壺の箱を一つ差入たり。確に御枕上に參すべき祝の品に侍る。あなかしこ徒に勿」と言ば、訝しと思ど、辨「徒なる事は慣ぬものを」とて取ば惟「眞に今は然る文字忌せ給へ。豈夫交り侍じ」と言ふ。若き人にて氣色も得深く思寄ねば、持參りて御枕上の御几帳より差入たるを、君ぞ例の聞知せ給らんかし。人は得知ぬに、翌朝此箱を退出させ給るにぞ、親き限の人々思合する事ども有ける。御皿どもなど何時の間に爲出けん、華足甚美麗にして、餅の體も殊更び、甚趣致う調へたり。少納言は甚斯しもやはとこそ思ひ聞させつれ、切に畏く、思し到ぬ隈なき御懇情を、先打泣れぬ。「扨も内々に宣せよかしな、彼人（惟光）も如何に思つらん」と密語き合り。斯て後は、院にも假初に參り給る間だに、靜心なく面影に戀しければ、奇しの心やと我ながら思さる。通ひ給し所々よりは、恨し氣に驚し聞え給などすれば、最惜と思すもあれど、新手枕の心苦くて、夜をや隔んと思し煩るれば甚懶くて、源惱げに擬し給て源「世中の甚憂く覺る程過してなん、人にも見え奉るべき」とのみ、答へ給つゝ過し給ふ。今后は、御櫛匣殿の、仍此大將（源氏）にのみ執着け給るを、右「實に將た、斯く無止事かりつる方（葵上）も亡給ぬるを、然ても有んに、何か口惜からん」など右大臣の宣に、甚憎しと思聞え給て、后「宮仕も專しくだに爲なし給らば、何か惡からん」と入内せ奉らん事を思し勵む。君（源氏）も普通の體には覺ざりしを口惜と思せど、只今は他方に分る御心も無て、何かは斯ばかり短かんめる世に、斯て思ひ定りなん。人の恨も負まじかりけりと、甚ど危く思し懲にたり。彼の御息所は、甚最惜けれど、眞の妻と賴み聞んには、必ず心置れぬべし。年來の如にて見過し給ば、然べき折節に物聞え合する人にてはあらんなど、有繋に殊の外には思し放ず。此姫君（葵上）を、今まで世人も其人とも知聞ぬ、物氣なきやうなり。父宮に知せ聞てんと思し成て、御裳着の事、人に普く宣せねど、尋常ならぬ體に思し設る御用意など甚有難けれど、女君（葵上）は此上なう疎み聞え給て、年來萬事に賴み聞て纏し聞けるこそ、淺しき心なりけれと悔うのみ思して、正

面にも見合せ奉り給ず。聞え戯れ給も苦う、理なきものに思し結ほれて、往しにもあらず成給る御有様を、興うも最惜うも思されて、年來思ひ聞し本意なく、馴は増らぬ御氣色の心憂き事と、怨み聞え給ふ程に、年も復りぬ。朔日の日は例の院に參り給てぞ、内裏東宮などにも參り給ふ。其より大殿（左大臣家）に罷出給り。大臣新き年とも言ず、昔の御事ども聞え出給て、淋々しく悲と思すに、甚斯さへ渡り給るに就て、念じ反し給ど堪難く思したり。御年の加る氣にや、物々しき氣さへ添給ひて、往しより勝に美麗に見え給ふ。立出て御方に入給れば、人々も珍う見奉り、忍敢ず。若君見奉り給ば、此上なく成長て、笑勝に在するも哀なり。眼口容、唯春宮の同容なれば、人もこそ見奉り咎れと見給ふ。御裝置なども變ず、御衣桁の御裝束など、例の如に爲掛られたるに、女のが並ぬこそ凡て淋々しく映なけれ。宮（大宮）の御消息にて、宮「今日は甚う思給へ偲るを、斯く渡せ給るになん、却々」など聞え給て。宮「昔に慣ひ侍にける御裝束も、月比は甚ど涙に霧塞て、色合なく御覽ぜられ侍らんと思給れど、今日ばかりは仍裏れさせ給へ」とて、甚く爲盡し給る衣ども、又襲て奉れ給り。必ず今日奉るべきと思しける御下襲は、色も織目も普通ならず意匠殊なるを、効なくやはとて着換給ふ。氷ざらましかば口惜う思されましと心苦し。御返事には、源「春や來ぬるとも、先御覽ぜられになん參り侍つれど、思給出らるゝ事ども多て、得聞させ侍ず。」

源「數多年今日更し色衣、
着ては涙ぞふる心地する。
得こそ思給へ鎮ね」と聞え給り。御返事、
宮「新き年とも言ずふるものは、
古ぬる人の涙なりけり。」
尋常なるべき數にぞあらぬや。

みくしげ殿　朧月夜の尚侍（ないしのかみ）のことなり　みくしげ殿は内藏寮の外御服など裁縫する所にて然るべき大臣の女のする職なれはまさらぬ

一みかりする交野（かたの）の小野の楢柴（ならしば）のなれはまさらで戀ぞまさる一

立出でて大臣の前を去りてなり

御方　葵上とおはしたる方なり

かひなくやは　大宮の心を盡されしを無效にしてはとてなり

ふる涙の降るに古るをかけたり

賢木

齋宮の御下向近う成行く隨に、御息所物心細く思す。此上なく煩さものに覺え給りし大殿の君（葵上）も亡給て後、然ともと世人も聞え扱ひ、宮の中にも期待せしを、其後しも搔絶え淺しき御待遇を見給に、眞に憂しと思す事こそ有けめと知果給ぬれば、萬の情を思し捨て、直道に出立給ふ。親添て下向給ふ例も殊になけれど、甚見放ち難き御有樣なるに托けて、憂世を行離なんと思すに、大將の君有繫に今はと距れ給なんも口惜う思されて、御消息ばかりは切なる體にて度々通ふ。對面し給ん事をば、今更に有まじき事と女君も思す。人（源氏）は厭しと思ひ隔き給ふ事も有んに、我は今少し思亂る事の增るべきを、効無しと心强く思すなるべし。舊の殿には假初に渡り給ふ折々あれど、甚う忍び給ば大將殿御知給ず、容易く御心に任て參で給べき御住處に將た有ねば、疎遠くて月日も隔りぬるに、院の上重體き御惱にはあらで、例ならず時々惱せ給ば、甚ど御心の暇なけれど、難面き者に思ひ果給んも最惜く、外聞情なくやと思し起して、野宮に參で給ふ。九月七日ばかりなれば、

院の上桐壺の院なり

こと事を琴にかけたり

物の音ども管弦あるなり

物はかなげなる小柴野宮の御所のさまなり太神宮も柴を以て垣とするは不淨を通さゞる故なり

黑木けづらぬまゝの木なり

火燒屋炬屋（ひたきやゝなり）ひたき童二人山城の葛野郡秦（はた）氏の童女を取るのよ

無下に今日明日と思すに、女方も心慌しけれど、立ながらと度々御消息ありければ、卒やとは思し煩なが甚餘り埋れ痛きを、物越ばかりの對面はと人知ず待聞え給けり。遙き野邊を分入給より甚物哀なり。秋の花皆衰へつゝ淺茅原も枯々なる蟲の音に、松風凄く吹合て、其ことゝも聞分れぬ程に、物の音ども絶々聞たる甚艶なり。昵近き徂前十餘人ばかり、御隨身事々しき姿ならで、甚う忍び給れど殊に引粧ひ給る御用意、甚愛たく見え給ば、御供なる好色者們、所がらさへ身に泌て思り。御心にも、何て今まで立馴さゞりつらんと過ぬる方悔う思さる。物はかなげなる小柴を大垣にて、板屋ども邊々甚假初なんめり。黑木の鳥居どもは、有繫に神々しく見渡されて煩しき氣色なるに、神官の者ども此處彼處に打咳きて、各自達物言たる樣子なども、他には體異りて見ゆ。火燒屋幽に光て人氣少く肅條として、此處に物思しき人の月日を隔て給らん間を思し遣に、最甚う心苦し。北の對の然べき所に立隱れ給て御消息聞え給に、管弦は皆罷て奥床き樣子數多聞ゆ。何彼の人傳の御消息ばかりにて、自身は對面し給べき體にも有ねば、甚不快と思して、源「斯樣の微行も、今は似なき地位に成にて侍るを思し知ば、斯う注連

し神供などしたゝむる所なるべし

の外には追し給で、悒う侍る事をも明め侍にしがな」と、切に聞え給ば、人々實にと甚傍痛う、「立煩せ給に、最惜し」など扱ひ聞れば、否や此處の人目も見苦う、彼(宮齋)思さん事も若々しう出居んが、今更に憚き事と思すに甚物憂れど、情なう遇んにも强からねば、兎角打嘆き躊躇て、膝行出給る御樣子甚奥床し。此方は、源「簀子ばかりの許れは侍るや」とて、上り居給り。花やかにさし出たる夕月夜に打擧止給る體、艶容似るものなく愛たし。月比の積を似々しう聞え給んも映き程に成にければ、榊を些折て持給へりけるを差入て、源「變ぬ色を嚮導にてこそ、忌垣をも越侍にけれ。然も心憂く」と聞え給ば、

御「神垣は標の杉も無きものを、
如何に紛て折る榊ぞ。」

と聞え給ば、

源「少女子が邊と思ば榊葉の、
香をなつかしみ尋てこそ折れ。」

大方の樣子煩しけれど、御簾ばかりは引被て、長押に押倚りて居給り。心に

いがき

「ちはやぶる神の忌垣もこえぬべし大宮人の見まくほしさに」

やぶるはいちはやぶるにていちはやきをいふなり忌垣は神社の周圍に設けたる垣の稱なりその外構へを玉垣と

神威のいちはしるしの杉

「我が庵は三輪の山本戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門」の心なり

紛へて思召したがへてとなり

をとめ子がいかに思したがへてとある歌の返しに御息所の在するをよくしりてこそ來りたれとなり

をとめ子は神に仕ふる少女をいふ

なげし敷居の下に別に横に長く渡せる材なり

いかにぞや奏上のもとに靈になりて現はれしことなり

やう〳〵今は下向を治定あるなり

さればよと

任て見奉りつべく、人(御息所)も慕ひ體に思したりつる年月は、悠長なりつる御心傲に然しも思されざりき。又心の中には、如何にぞや疵ありて思し聞え給にし後、將た愛情も穉つゝ斯く御中も隔りぬるを、珍き御對面の昔覺たるに、哀と思し亂る事限なし。過去將來思し續られて心弱く泣給ぬ。女は然しも見じと思し包めれど、得忍び給ぬ御氣色を愈心苦う、仍思し止るべき樣をぞ聞え給める。月も入ぬるにや、哀なる空を眺つゝ怨み聞え給ふに、許多思給る憂さも消ぬべし。辛う今はと思離れ給るに、然ばよと却々心動て思し亂る。殿上の若公達などに艶なる方に確保たる有樣なり。思し殘す事なき御間に、聞え交し給ふ事ども眞似びやらん方なし。漸う明行く空の氣色、殊更に作り出たらんやうなり。

源「曉の別は何時も露けきを、
此は世に知ぬ秋の空かな。」

出難に御手を捉て猶豫給る、甚う懷し。風甚冷に吹て、松蟲の鳴嗄したる聲も折知顔なるを、然して思ふ事無きだに聞過し難げなるに、況て理なき御

源に逢ひたらば下向の心も亂れんと思ひし通りになり

ともゆかぬにやかへりて秀逸もなきにやとなり

おんいでたち母御息所の共に下向あるをなり

昏惑どもに、却々事も適ぬにや、

御「大力の秋の別も悲きに、鳴音な添そ野邊の松蟲。」

悔き事多れど効なければ、明行く空も顯露て出給ふ、道の程甚露けし。女も得心強からず名殘哀切にて眺め給ふ。微見奉り給る月影の御容貌、猶留る香など、若き人々は身に染て、過失も爲つべく愛で聞ゆ。如何許の道にてか、斯る御有樣を見棄ては別れ聞んと、効無く涙含み合り。御文常よりも細なるは思し靡くばかりなれど、又打返し定難ね給べき事ならねば甚効なし。男は然しも思さぬ事をだに、情の爲には好く言續け給べかめれば、況て普通の列には思ひ聞え給ざりし御中の、斯て背き給なんとするを、口惜うも最惜うも思し惱べし。旅の御裝束より初め人々のまで、何彼の御調度など嚴しき體に贈進ひ聞え給ど、何とも思されず、輕々しう心憂き名をのみ流して淺しき身の有樣を、今始たらんやうに程近くなる隨に起臥嘆き給ふ。齋宮(秋好)は、若き御心に、不定なりつる御出立の斯く定り行を、嬉とのみ思したり。世人は例なき事と、批判も哀にも種々に聞べし。何事も人に批判扱れぬ問題にされぬなり

かつら川齋宮群行(伊勢へ下向)の時は西河にて御禊とありかつら川は西河なり(東にある加茂川に對して)

長奉送使伊勢まで供奉して上洛と時弓場殿にて事故なく御下着の由を奏す中納言參議の間にて定めらるゝ由

さらぬ上達部河原まで送る上達部なり

なる神だにこそ「天の原ふみとゞろかしなる神も思ふ中をばさくるものかは」の心なり

國つ神地祇なり齋宮をそれに比し

分際は安氣なり。却々世に傑出ぬる人の御邊は、窮屈き事多くなん。十六日桂川にて御禊し給ふ。常の儀式に勝て長奉送使など、然ぬ上達部も貴く門地あるを選せ給り。院の御最負もあればなるべし。出給ふ程、大將殿(源氏)より、例の盡せぬ事ども聞え給り。源「掛まくも畏き御前に」とて、木綿に付て文「鳴神だにこそ、

源「八洲守る國つ御神も心あらば、飽ぬ別の中を判れ。

思給るに、飽ぬ心地し侍るかな」とあり。甚騷き時なれど御返事あり。

宮の御をば女別當して書せ給り。

秋「國つ神空に判る中ならば、等閑事を先や紛ん。」

大將は御有樣可懷て、內裏にも參まゝ欲う思せど、打棄られて見送んも外觀惡き心地し給ば、思し止て徒然に眺め居給り。宮の御返事の成人しきを微笑て見居給り。御年の程よりは興趣うも在すべきかなと虛心ならず、斯樣に例に違る煩さに、必心懸る御癖にて、甚熟う視奉りつべかりし幼き程を、見

てわが飽かぬ別れを了簡あれとなり

御返事なり

女別當　齋宮の事を司る女官なり

なほざりごと　大將の僞を先づたゞさんとなり

御輿に齋宮十四歳なれども御息所添ひて下向なるにより同輿にて内へ參り給ふなり　葱花輦（そうくわれん）と（一もじ（ねぎ））のたうを金にて打ちたる輿なり主上も神事の時はこの輿に召さる　限なき筋后にもと思ひ給ひしものを齋宮の同輿にて内に參らるゝこと無念のことなるべし

ず成ぬるこそ憾けれ。世中定なければ、對面するやうも有なんかしなど思す。奥床く趣ある御樣子なれば、物見車多る日なり。申の時に内裏に參り給ふ。御息所御輿に乘給るに就ても、父大臣の限なき筋に思し志て、齋き奉り給し有樣變て、末の世に内裏を見給も、物のみ盡せず哀に思さる。十六にて故宮に參り給て、二十にて後れ奉り給ふ。三十にてぞ、今日又九重を見給ける。

御「往昔を今日は念じと忍れど、心の中に物ぞ悲き。」

齋宮は十四にゞ成給ける。甚美う在する體を、麗しう爲立て奉り給るぞ甚忌々しきまで見え給を、帝（朱雀）御心動て、別の御櫛奉り給ふ。甚哀にて潮垂させ給ぬ。出給ふを待奉るとて、八省に立續たる出車どもの袖口色合も、目慣ぬ體に奥床き氣色なれば、殿上人們も私の別惜む多り。闇う出給て二條より洞院の大路を折給ふ程、二條院の前なれば、大將の君甚切に思されて、榊に挿て、

源「振捨て今日は往とも鈴鹿川、八十瀨の波に袖は濡じゃ。」

御「鈴鹿川八十瀨の浪に濡々ず、伊勢まで誰か思越ん。」

と聞え給れど、甚闇う物騒き程なれば、次の日關の彼方よりぞ御返事ある。省略て書給るしも、御手甚巧緻しく優雅たるに、哀なる氣を少し添給らまし かばと思す。霧甚う降て只ならぬ朝氣に、打眺て獨言在す。

源「行く方を眺もやらん此秋は、逢坂山を霧な隔そ。」

西の對にも渡り給で、人爲ならず物淋氣に眺暮し給ふ。況て旅の空は如何に御憂悶なる事多りけん。院の御惱、神無月に成ては甚重く在ます。世中に惜み聞ぬ人なし。内裏にも思し嘆て行幸あり。衰弱き御心地にも、東宮（冷泉）の御事を返す〳〵聞させ給て、次には大將（源氏）の御事院「侍つる世に變ず、大小の事を隔ず何事も御後見と思せ。齡の程よりも、世を政んにも一向憚ある まじうなん見給る。必世中保つべき相ある人なり。然に依て煩さに親王に も成ず臣下にて、朝廷の御後見を爲させんと思給しなり。其用意違させ給な」

けふは祝の日なればなり

忌々しき神など魅入れんかとまでなり

別の御櫛　齋王の額に主上櫛をさゝせ給ふ儀なり宮中を出づるまで更にあとをかへり見ぬ例なり櫛は藏人作物所（つくもどころ）に仰せて作らせる黄楊（つげ）の木にて長さ二寸ばかりなり

八省　大極殿の惣構へをいふ八省院ともいふなれば

出し車　供奉の女房のり裝飾に中なる人の袖口を車の御簾の下より出すなり

ぬれぬれずぬるとも濡れずともなり

と切なる御遺言ども多りけれど、女の眞似ぶべき事にしあらねば、此片端だに傍痛し。帝も甚悲と思して、更に違へ聞さすまじき由を　返す〳〵聞させ給ふ。御容貌も甚美麗に成熟増せ給るを、嬉く頼しく見奉らせ給ふ。限あれば急ぎ還せ給に、却々なる事多くなん。春宮も一度にと思召けれど、物騒きにより日を更て渡せ給り。御年の程よりは大人び美き御容にて、戀しと思聞させ給ける積に、何心も無く嬉と思して見奉り給ふ御氣色甚哀なり。中宮は(藤壺)涙に沈み給るを、見奉せ給にも、種々御心亂て思召る。萬の事を聞知せ給ど、甚幼稚き御齡なれば、不安く悲う見奉せ給ふ。大將にも朝廷に仕奉り給べき御用意、此宮の御後見し給べき事を、返す〳〵宣す。夜更てぞ歸せ給ふ。殘る人なく仕奉りて騒る體、行幸に劣る差別なし。飽ぬ程にて還せ給を甚う思召す。大后も參り給んとするを、中宮の斯く添ひ在するに御心隔れて思し猶豫ふ程に、重體しき體にも在さで崩れさせ給ぬ。足を空に思惑ふ人多り。御位を去せ給といふばかりにこそあれ、世の政を統めさせ給る事も、我御代の同事にて在いつるを、帝は甚若う在ます。祖父大臣(右大臣)甚急に思慮無う在して。其御任意になりなん世を如何

みゆきに朱雀の行幸になり

去年今年葵上と父の院となり

ならんと、上達部殿上人皆思歎く。中宮大將殿などは、況て勝て物も思分ず、後々の御法事など孝じ仕奉り給ふ體も、許多の皇子達の中に勝れ給るを、道理ながら甚哀に世人も見奉る。葛の御衣に寠れ給るに就ても、限なく美麗に心苦げなり。去年今年と打續き、斯る事を見給に、世も甚味氣なう思さるれば、斯る序に先思し立るゝ事はあれど、又種々の御羈絆多り。御四十九日までは、女御御息所達、皆院に集ひ給りつるを、過ぬれば散々に罷出給ふ。十二月の二十日なれば、人方の世中終る空の氣色に就ても、況て晴る世なき中宮の御心の中なり。大后の御心をも知給れば、心に任せ給らん世の凌辱く住憂らんを思ふすよりも、馴聞え給る年來の御有樣を、思出聞え給ぬ時の間なきに、斯ても在すまじう、皆外々へと出給ふ程に、悲き事限なし。宮は三條宮に渡り給ふ。御迎に兵部卿宮參り給り。雪打散り風烈うて、院の中漸次人眼離行て肅條なるに、大將殿此方に參り給て、舊き御物語聞え給ふ。御前の五葉の、雪に萎て下枝枯たるを見給て、親王、

兵「蔭廣み賴し松や枯にけん、
下葉散行く年の暮かな。」

何ばかりの事にもあらぬに、折から物哀にて、大將の御袖甚う濡ぬ。池の隙なう氷るに、

源「冴渡る池の鏡の冴きに、
見馴し影を見ぬぞ悲き。」

と思す隨に餘り若々しうぞあるや。王命婦、

王「年暮て岩井の水も氷閉ぢ、
見し人影の干も行かな。」

其序に甚多れど、然のみ書續べき事かは。渡せ給ふ儀式變ねど思做に哀にて、故き宮は反て旅の心地し給にも、御里住絶なる年月の程思し廻すべし。年復りぬれど、世中風流しき事なく靜なり。大將殿は物憂くて籠居給へり。除目の頃など、院の御時をば更にも言ず、年來劣る差別なくて、御門の邊所無く立込たりし馬車薄ぎて、宿直物の袋一向見ず。親き家司ばかり殊に急ぐ事なげにて在るを見給にも、今よりは新こそはと想像れて物荒涼くなん。御匣殿（朧月夜）は、二月に尙侍に成給ぬ。院の御愁に卽て尼に成給る代なりけり。高貴く持して容姿も甚妍く在すれば、數多參り集り給ふ中にも

渡らせ給ふ三條の宮へ行啓は儀式昔にかはる事なけれどなり

除目縣召（あがためし）の除目なり國々の司を望む者源に追從して門前に多く集りしなり

とのゐもの　とのゐに用うる衣服夜具なり

優て時めき給ふ。后（弘徽殿）は里勝に在しまいて、參り給ふ時の御局には梅壺を爲たれば、弘徽殿には尙侍の君住み給ふ。登花殿の埋れたりつるに、晴々しうなりて、女房なども數知ず集參て、今向しう花やぎ給ど、御心の中は意の外なりし事どもを忘れ難う嘆き給ふ。甚忍て通し給ふ事は、仍同じ體なるべし。風聞もあらば如何ならんと思しながら、例の御癖なれば今しも御志優るべかんめり。院の在しつる世こそ憚り給つれ。后の御心峻烈くて、彼此思し詰たる事どもの報せんと思すべかんめり。事に觸て凌辱き事のみ出來ば、斯るべき事とは思しゝかど、見知給ぬ世の憂に擧止ふべくも思されず。左の大殿も荒涼き心地し給て、殊に內裏にも參り給ず。故姫君を引避て、此大將の君に許婚け給し御心を、后は思し置て好うも思聞え給ず。大臣の御交情も、元來稜々しう在するに、故院の御世には、我任意に在せしを、時移て得意顏に在するを、味氣なしと思したるも道理なり。大將は往しに變ず渡り通ひ給て、侍し人々をも却々に細に思し掟て、若君を冊き思ひ聞え給る事限なければ、深切に有難き御心と、甚ど勞き聞え給ふ事ども同體なり。限なき御寵眷の、余り物騷きまで暇な氣に見え給しを、通

優て　時めき給ふ

登花殿　弘徽殿より北にて奥まりたりしなり

例の御癖　あやにくに無理なることをせらるゝなり

追從　來る人各自に衣服夜具などを入れたる袋をもてるなり

尼になり給へる　尙侍にて尼になりたる人の闕に朧月夜尙侍になりたるなり

したり顏　右大臣のなり

御服　院の崩御によりてなり葵卷に后腹の女三の宮居給ふとありし齋院なり

五壇　中央不動、降三世（かうさんぜ）軍荼利（ぐんだり）、大威德、金剛、夜叉、禁中にて行はるゝなり

昔おぼえたる　最初に逢はれし處なり

あく　夜の明くるを飽くにかけたり

じやうきやう　でんの御兄

ひ給し所々も、方々に絶給ふ事どもあり、輕々しき御微行も、効なう思し成て殊に爲給ねば、甚長閑に今しも有まゝ欲き御有樣なり。西の對の姫君の御幸福を、世人も感で聞ゆ。少納言なども人知ず、故尼上の御祈禱の効驗と見奉る。父親王も思ふ體に聞え交し給ふ。嫡腹の限なくと思すは捗々しうも得有ぬに、憾氣なる事多くて、繼母の北方は安からず思すべし。物語に、殊更に作出たるやうなる御有樣なり。齋院は御服にて下居給にしかば、朝顏の姫君は代に居給にき。加茂の齋には、孫王の居給ふ例多くもあらざりけれど、然べき女御子や在せざりけん。大將の君、年月經れど仍御心離れ給ざりつるを、斯う筋異に成給ぬれば口惜と思す。中將（朝顏女房）に音れ給ふ事も同事にて、御文などは絶ざるべし。昔に變る御有樣などをば、殊に何とも思したらず。斯樣の些し事ども、紛る事なきまゝに此方彼方と思し惱り。帝は院の御遺言違ず懇切に思したれど、御年若う在す中にも、御心柔たる方に過て、强き處在さぬなるべし。母后大政大臣交々に爲給ふ事をば得背き給ず、代の政御心に叶ぬやうなり。煩しさのみ增れど、尙侍の君は人知ぬ御志通ば、理なくても疎遠くはあらず、五壇の御修法の初に

慎み在す隙を窺て、例の夢の如に聞え給ふ。彼昔臆えたる細殿の局に、中納言の君紛して入奉りたり。人眼も繁き頃なれば、常よりも端近なるを空恐しう覺ゆ。朝夕に見奉る人だに飽ぬ御容なれば、況て珍き程にのみある御對面の、爭かは疎ならん。女の御容も實にぞ愛たき御盛なる。重りかなる方は如何あらん、興趣う艶き若びたる心地して、見まゝ欲き御樣子なり。程なく明行くにやと覺るに、唯爰にしも宿直申し侍ふと聲作るなり。又此邊に隱ひたる近衞司ぞ有べき。腹穢き一方の敎へ越するぞかしと大將は聞き給ふ。此處彼處尋歩きて、近「寅一刻」と申すなり。女君、

朧心から方々袖を濡すかな、
　　あくと敎る聲に就ても。」

と宣ふ體、儚立て甚愛し。

源「嘆きつゝ我身は斯て過せとや、
　　胸の明べき時ぞともなく。」

靜心なくて出給ぬ。夜深き曉月夜の得も言ず霧渡るに、最痛う微れて擧止做し給へるしも、似る者なき御有樣にて、承香殿の御兄の頭中將、藤

承香殿女御（誰ともなし）の御兄なり　もてはなれ藤壺なり

壺より出て、月の少く隈ある立蔀の許に立りけるを、知で過ぎ給けんこそ最惜けれ。批判聞る樣も有なんかし。斯樣の事に就ても、距れ難面き人の御心を、半は愛しと思聞え給ふもの乍、我心の牽く方にては、仍辛う心憂しと覺え給ふ折多り。内に參り給ん事は初々しく窮屈く思し成て、春宮を見奉り給ぬを、覺束なく思え給ふ。又頼しき人も在し給ねば、唯此大將の君をぞ萬に頼み聞え給るに、仍彼憎き御戀の止ぬに、兎もすれば御胸を潰し給つゝ、聊も氣色を御覽じ知ずなりにしを思だに甚恐きに、今更に又然る事の風聞ありて、我身は勿論にて、春宮の御爲に必良らぬ事出來なんと思すに甚恐ければ、御祈禱をさへ爲させ給て、此事思止せ奉んと、思し到ぬ事なく遁れ給ふを、如何なる折にかありけん、淺しうて近き參り給り。心深く工夫り給けん事を、知る人なかりければ、夢の如にぞ有ける。眞似ぶべきやうも無く聞え續け給ど、宮甚此上なく拒絶れ聞え給て、果々は御胸を痛う惱み給ば、近う侍つる命婦、辨などぞ、淺しう見奉り介抱ふ。男は憂し難面しと思ひ聞え給ふ事限なきに過去將來搔昏す心地して、現心も失にければ、明果にけれど出給ずなりぬ。御惱に驚て、人々近う參りて繁う交錯ば、

宮の太夫中宮太夫なり　中宮職の事を司る長官

珍しく昨夜は御顏は見給はざりしなり

我にもあらで塗籠に押入られて在す。御衣ども隱し持る人の心なども甚煩し。宮は物を甚困惑と思しけるに、御氣上りて仍惱う爲させ給ふ。兵部卿、宮大夫など參て、僧召せなど騷ぐを、大將甚佗う聞き在す。辛じて暮行く程にぞ癒り給る。斯く籠り居給つらんとは思しも掛ず、人々も又御心困惑さじとて、斯なんとも申ぬなるべし。晝の御座に膝行出て在します。快う思召るゝなんめりとて、宮（兵部卿）も罷出給ひなどして、御前人少になりぬ。例も氣近く馴させ給ふ人少ければ、此處彼處の物の後などにぞ侍ふ。命婦の君などは、如何に謀りて出し奉らん、今宵さへ御氣上せ給ん最惜うなど打密語き扱ふ。君は塗籠の戸の細目に啓たるを、徐押啓て御屏風の間に傳入給ぬ。

珍く嬉きにも涙は落て見奉り給ふ。藤「仍甚苦うこそあれ、世や盡ぬらん」とて、外の方を見出し給る傍目、言知ず優雅う見ゆ。御菓をだにとて參り据たり。箱ゝ蓋などにも懷き體にてあれど見入給ず。世中を甚う思し惱る氣色にて、閑に眺入給る、甚う可愛氣なり。髮容頭容、御髮の垂りたる體、限なき艶麗さなど、唯彼の對の姫君（紫上）に違ふ所なし。年來少し思忘れ給りつるを、驚異きまで肖え給るかなと見給ふまゝに、少し憂悶の晴け處あ

る心地し給ふ。氣高く尊貴げなる容なども、更に他人と思分き難きを、仍限なく昔より思染め聞てし心の所爲にや、特殊に甚う成熟増り給にけるかなと類なく覺え給ふに、悶々して徐御帳の内に掲ひ寄て、御衣の褄を引鳴し給ふ、樣子著く颯と香ひたるに、驚駭う恐怖う思されて、卽て平臥給り。見だに向き給かしと、懊惱う憂くて引寄せ給るに、御衣を滑し置て膝行退き給に、心にもあらず御髮の捉添られたりければ、甚心憂く宿世の程思し知れて甚じと思したり。男も多年世を鎭護め給ふ御心皆亂て、正體にもあらず、萬の事を泣々恨み聞え給ど、眞に厭しと思して御答も聞え給ず。唯、藤「心地の甚惱きを、斯らぬ折もあらば聞てん」と宣へど、盡せぬ御心の程を言續け給ふ。有繫に甚じと聽給しも交るらん。有ざりし事にはあらねど、更めて甚口惜う思さるれば、懷きもの乍、甚好う宣ひ遁れて今宵も明行く。切て隨ひ聞ざらんも畏く、尊貴き御樣子なれば、源唯斯許にても、時々甚き憂をだに晴け侍ぬべくは、何の勿體なき心も侍じなど、撓め聞え給ふべし。斜なる事だに、斯樣なる間は切なる事も添なるを、況て類無氣なり。明果れば兩人（命婦辨）して、甚き嘆顔どもを聞え、宮は半亡き如なる御氣色の心

御ほだし　來世までも思ひはなれ申さずは藤の來世の姉げとならんとなり

かつは心を自身の心を仇としられよとなり

いふよしなき言ん方なき風情となり

世にふれば　一世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてんかけ道は岨道なり

苦ければ、源「世中に在と聞召れんも甚耻ければ、卽て亡せ侍なんも、又此世ならぬ罪と成侍ぬべき事」など聞え給も、恐きまで思し入り。

源「逢ふ事の難きを今日に限ずば、
今幾代をか歎つゝ經ん。

御絆にもこそ」と聞え給ば、有繫に打嘆息給て、

藤「長き世の恨を人に殘ても、
半は心を仇と知なん。」

些く言做せ給る體の言ふ由なき心地すれど、人の思さん所も我御爲も苦ければ、我にもあらで出給ぬ。何處を面目にか又も見え奉ん。最惜と思し知ばかりと思して御文も聞え給ず、打絶て內裏春宮にも參り給ず籠り在して、起臥甚じかりける人の御無情かなと、外觀惡く戀しう悲きに、心魂も失にけるにや惱うさへ思さる。物心細く、何や世に經れば憂こそ增れと思し立には、此女君（紫上）の甚可愛氣にて、切に打賴み聞え給るを、振捨ん事甚難し。宮も其名殘例にも在さず、斯う故意めきて籠り居、訪れ給ぬを、命婦などは最惜がり聞ゆ。宮も春宮の御爲を思すには、御心隔き給ん事最惜

戚夫人漢の高祖の妾なり惠帝の太子なり時自身の生子如意と代へんとせしかども事成らずして高祖崩ぜし後、呂后太后その報いとて戚夫人の眼をぬき厠におしこめしことなり

はしたなく極りわるくなり

式部老女なるべし

く、世を味氣なきものに思成給ば、直道に思し立つ事もやと、有繋に苦う思さるべし。斯る事絶ずば甚どしき世に浮名さへ洩出なん、大后の潛上き事に宣なる位をも去なんと漸次思し成る。院の思し宣せし體の斜ならざりしを思し出るにも、萬の事往しにもあらず變り行く世にこそあんめれ。戚夫人の見けん眼の如にこそあらずとも、必胡盧なる事は有ぬべき身にこそあんめれと、疎う過し難う思さるれば、背きなん事を思し取に、春宮見奉で面變せん事哀に思さるれば、忍やかにて參り給り。大將の君は、然ぬ事だに思し寄ぬ事なく仕奉り給ふを、御心地惱きに託て御奉送にも參り給ず。大方の御見舞は怠じやうなれど、無下に思し屈しにけると、事情知る同志は最惜がり聞ゆ。宮(東宮)は甚う成人び給て、珍う嬉しと思して睦れ聞え給ふを、愛しと見奉り給にも、思し立つ筋は甚難氣なれど、内裏邊を見給ふに就ても、世の有樣哀に儚く移り替る事多り。大后の御心も甚煩くて、出入給にも不合く事に觸て苦ければ、宮(東宮)の御爲にも危く忌々しう萬に就て思し亂て、藝「御覽ぜで久からん間に、形容の異樣にて憂て氣に變て侍ば、如何思さるべき」と聞え給ば、御顏を打目戍給て、東「式部が如にや、爭か然

夜居の僧内裏の二間(夜御殿に隣れり)に侍ひて夜もすがら加持參る僧なり

雲林院紫野にあり

うき人しもぞ「天の戸をおしあけ方の月見れば憂き人しもぞこひしかりける」藤壺を思はるゝなり

閼伽奉る時に花皿をすゝぎ重ねてからかからとならす作

は成給ん」と笑て宣ふ。言効なく哀にて、藤「其は老て侍ば醜きぞ。然はあらで髮は其よりも短くて、黑き衣などを着て、夜居の僧の如に成侍んとすれば、見奉らん事も甚ど久かるべきぞ」とて泣給ば、眞面目立て、東「久う在せねば戀しきものを」とて涙の落れば、耻と思して有繋に背き給る、御髮は搖々と美麗にて、眼の懷げに匂ひ給る容、成人び給ふまゝに唯彼の御顏を脫滑給り。御齒の少し朽て、口の中黑みて笑給る薰美きは、女にて見奉まゝ欲う美麗なり。甚斯しも肖似給るこそ心憂けれと、玉の瑕に思さるゝも、世の煩さの空恐う覺え給ふなりけり。大將の君は、宮(東宮)を甚戀しう思ひ聞え給へど、淺しき御心の程を、時々は思知る體にも見せ奉んと念じつゝ過し給ふに、外觀惡く徒然に思さるれば、秋の野も見給ひがてら雲林院に詣で給り。故御息所(桐壺更衣)の御兄の律師の籠り給る坊にて、法文など讀み勤行せんと思して、二三日在するに哀なる事多り。紅葉の漸う色付渡りて、秋の野の甚優雅たるなど見給つゝ、故鄕も忘ぬべく思さる。法師們の才ある限召出て、論議せさせて聞召せ給ふ。所がらに甚ど世中の常なきを思し明しても、仍憂き人しもぞと思し出らるゝ。押明方の月影に、法師們の閼

法ありとぞ白く厚くして上品なるもの、表面に皺のあるを高檀紙（たかたんし）といふ　のづからなる音にはあらず　念佛衆生念佛する衆生はいづれも捨てず極樂へ攝取するとなり　觀無量壽經の文なり

なぞやなぞやかゝる世をすてかぬるとなり　ゆきはなれぬべしや此世をのがれんかとなり　色かはるともすればかはるべき源氏の心となりさゝがにの糸なり　先づぞ亂るゝの詞に糸ならではあはず自身をたとへたるなり　みちのくに紙陸奥にて產す昔は檀（まゆみ）の木にて製せり

思し知るにもいづれの本にもかくあれど「知らぬにも」のうつしあやまりなるべし　ゆふだすき神社の人のかくるものにてゆふを襷にするなりかけて申すも恐れありにかけたり　昔を今に「いにしへのしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな」心を交したることならねば效なきをとなりとりかへすものにも「とりかへすものにもがなや世中をありしながらの我

仰奉るとて戛々と鳴しつゝ、菊の花濃き淡き紅葉など折散したるも儚けれど、此方の營は此世も徒然ならず、後の世は賴しげなり。然も味氣なき身を煩惱むかななど思し續け給ふ。律師の甚尊き聲にて、念佛衆生攝取不捨」と打延て、看經給るが甚美ければ、何やと思し成に、先姫君の心に懸りて思出られ給ぞ、甚惡き御心なるや。例ならぬ日數も覺束なくのみ思さるれば、御文ばかりぞ繁う聞え給める。文「行離ぬべしやと試み侍る道なれど、徒然も慰め難う心細さ增りてなん。聽止たる事ありて猶豫侍る間を如何に」など、檀紙に打解け書給るさへぞ愛たき。

源「淺芽生の露の宿に君を置て、四方の嵐ぞ靜心なき。」

など細かなるに、女君（紫上）も打泣給ぬ。御返事白き式紙に、

紫「風吹ば先ぞ亂る色變る、淺茅が露にかゝる蜘蛛。」

とあり。御手蹟は甚美うのみ成增るものかなと獨語て、愛しと微笑給ふ。常に書交し給ば、我御手蹟に甚熟く似て今少し優雅う、女しき所書添給り。何事に就ても惡うはあらず生し立たりかしと思す。吹交ふ風も近き程にて、齋院（朝顏）にも聞え給り。中將の君（朝顏の女房）に、文斯く旅の空になん憂悶に在處離にけるを、思し知にもあらじかし」など恨み給て、御前（朝顏）には、

源「掛まくは畏れども往昔の、
秋思ゆる木綿襷かな。」

昔を今にと思給るにも効なく、取返されんものゝやうに」と、馴々しげに唐の淺綠の紙に、榊に木綿着けなど神々しう爲なして參せ給ふ。御返事、中將、中「紛る方なくて、過去の事を思給へ出る徒然のまゝには、思遣聞さする事多く侍ど効なくのみなん」と、少し心留て多り。御前のは、木綿の片端に、

朝「往昔や如何はありし木綿襷、
心に懸て偲ぶらん故。」

近き世に」とぞある。御手蹟細緻にはあらねど、蔦々じう草など美う成にけり。況て朝顏も成人增り給らんかしと、思遣も虛心ならず恐しや。噫此頃ぞかし、野宮の哀なりし事思し出て、奇う樣のものと神恨う思さるゝ御癖

身と思はんに齋院に立ち給はぬ前はさりともと頼みしとなり

なれ〳〵しげに事ありしがほに書かるゝをいふ

からの唐紙なり

しのぶらんゆゑ　お思ひ出しになるわけはなきに何ぞとなり

近き世に近き世にそのおぼえはなきにとなり

朝顔の御額なり　この頃ぞかしの下に「と」の字ある文意なり

あやしうやうのもの　齋宮齋院ともに心づくしなるは神うらめしとなり

六十卷天台の六十卷なり、法華玄義、文句、止觀各十卷、尺籤（しやくせん）疏記（しよき）弘決（ぐけつ）の末書各十卷本書卅卷は智者大師の作末書卅卷は妙樂（みやうらく）大師の作なり

黑き御車　諒闇の中、ことに父の院の御事なれば重服なり裝束の黑き御車

藤の御袂　藤葛（ふぢかづら）にて製せり喪服なり

入らせ給へるに　春宮のもとに入らせ給へるをいふ

宮の間のこと　中宮春宮の方の御ことなり

心ならずや

のみ苦きぞかし。理無う思さば、然も有ぬべかりし年來は閑に過し給し、今は悔う思さるべかんめるも奇き御心なりや。院（朝顔齋院）も斯く普通ならぬ御性質を見知聞え給れば、稀なる御返事などは、得しもとて離れ聞え給まじかんめり。少し驗なき事なりかし。六十卷といふ經文誦み給ひ、不可解き所々解せなどして在しますを、山寺には甚き光行ひ出し奉りと、佛の御面目ありと、賤の法師們まで喜び合り。靜寂にて世中を思し續るに、歸ん事物憂かりぬべけれど、人一人（紫上）の御事思し遣るが羈絆なれば、久うも得在しまさで、寺にも御誦經嚴う爲させ給ふ。有べき限上下の僧ども、其邊の山賤まで物賜び、尊き事の無上を盡して出給ふ。見奉り送るとて、此面彼面に賤き咳る人們集り居て、涙を落しつゝ見奉る。黑き御車の內にて藤の御袂に窶れ給れば、殊に見え給ねど仄なる御有樣を、世に無く思聞ゆべかんめり。女君（紫上）は、日來の程に成人增り給る心地して、甚甚う沈着給て、世中如何あらんと思る氣色の、心苦う哀に覺え給ば、驗なき心の種々亂るや著からん、色變るとありしも可愛う覺て、常より殊に語ひ聞え給ふ。山苞に持せ給りし紅葉、御前のに御覽じ比れば、殊に染增ける露の心も過し難う、覺束なさも外觀思

さまで覺え給ば、唯尋常にて宮（藤壺）に參せ給ふ。命婦の許に、文「入せ給にけるを珍き事と承るに、宮の間の事疎遠く成侍りにければ、靜心なく思給なから、誦經も勤んと思立侍し日數を、心ならずやとてなん日來に成侍りける。紅葉は一人見侍るに、錦闇う思給ればなん、折好て御覽ぜさせ給へ」などあり。實に甚き枝どもなれば御眼留るに、例の細小なる物ありけり。人々見奉るに、御顏の色も映て、仍斯る心の絕給ぬこそ甚疎しけれ。可惜思慮深う在し給ふ人の、不圖斯樣なる事折々交ぜ給ふを、人も奇しと見らんかしと厭う思されて、瓶に挿せて廂の柱の下に押遣せ給つ。大方の事ども、宮（東宮）の御事に觸たる事などは打賴る樣に、すくよかなる御返事ばかり聞え給るを、然も心賢く盡せずもと恨しう見給ど、何事も後見聞え慣にたれば、人奇しと咎もこそすれと思して、罷出給べき日參り給り。先主上の御方に參り給れば、長閑に在す程にて、昔今の御物語聞え給ふ。御容貌も院に甚酷う似奉り給て、今少し優雅き氣添て可懷う溫和にぞ在す。互にあはれと見奉り給ふ。尙侍の君の御事も、仍絕ぬ體に聞召し、氣色御覽ずる折もあれど、何かは今始たる事ならばこそあらめ。有初にける事なれば、

定めたる日數を破りて出るは心ならずやとてなり

錦闇う「見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜のにしきなりけり」

すくよかなる艶氣なきなり

春宮の御ゆかりあながち中宮への心よせならぬと言ひなさるゝなり

今の皇子當代朱雀の御子になり

頭の辨藏人頭にて辨官なるなり

白虹日を貫けり

然も心交さんに似氣なかるまじき人の間なりかしとぞ思し做て、咎めさせ給ざりける。萬の御物語、文の道の覺束なく思召るゝ事どもなど問せ給て、又好色しき歌語なども互に聞え交させ給ふ序に、彼齋宮の下向給し日の事、容貌の美う在せしなど語せ給に、我も打解て、野宮の哀なりし曙も、皆聞え出給てけり。二十日の月漸う差出て興き程なるに、帝「管絃なども爲まほしき程かな」と宣す。源「中宮の今宵罷出給ふなる見舞に物し侍ん。院の宣せ置く事侍しかば、又後見仕う奉る人も侍ざんめるに、春宮の御由緣最惜う思給られ侍て」と奏し給ふ。帝「春宮をば今の皇子に成てなど宣せ置しかば、取分て志し在すれど、殊に差分たる體にも何事をかはとてこそ。年の程よりも、御手蹟などの特と巧うこそ在し給べけれ。何事にも捗々しからぬ自身の面目起しになん」と宣すれば、源「大體爲給ふ業など、甚敏く大人びたる體に在し給ど、未だ甚片生になん」と其御有樣など奏し給ひて罷出給ふに、大宮(弘徽殿)の御兄の藤大納言の子の、頭辨といふが、世に合ひ花やかなる若人にて思ふ事なきなるべし。妹の麗景殿(今上の女御)の御方に行くに、大將の御前驅を忍やかに追ば、暫し佇立て、頭「白虹日を貫り。太子懼たり」

燕の太子丹秦の始皇を窺はんとして荆軻を遣して後白虹の日を貫いて徹せざるを見て事成らじと言へるを太子畏ぢたりといふなり今源氏を荆軻に東宮(冷泉)を太子によそへたるか

御前に侍ひて中宮の御前になり

雲の上の月桐壺院を偲ばるゝ意なり

へだつる霧の中宮の歌をうけて月のことと見せつゝ下には源氏の思ひをよまれたるなり

霞も人の

と、甚絃かに打誦したるを、大將甚映しと聞給て、咎べき事かは。后(弘徽殿)の御氣色は、甚恐う煩げにのみ聞ゆるを、斯う親き人々も氣色立ち言べかんめる事どもゝあるに、煩う思されれど、平靜のみ擬し給り。御前に侍て、源「今まで更し侍にけり」と聞え給ふ。月の花やかなるに、昔斯樣なる折は御管絃せさせ給て、風流う起居せ給しなど思し出るに、同御垣の中なから變る事多く悲し。

蘆「九重に霧や隔る雲の上の、
隔る霧の難面もあるかな。
月を遙に思ひやるかな。」

と命婦して聞え傳へ給ふ御樣子も、微なれど懷う聞るに、憂さも忘れて先涙ぞ落る。

源「月影は見し世の秋に變ぬを、
霞も人のとか、昔も侍ける事にや」など聞え給ふ。宮(中宮)は春宮を飽ず思聞え給て、萬の事を聞えさせ給ど、深うも思し入たらぬを、甚不安く思聞え給ふ。例は甚疾く大殿籠るを、出給までは起たらんと思すなるべし。恨しげに

「山櫻見にゆく道をへだつれば霞も人の心なりけり」

思したれど、有繋に得慕ひ聞え給ぬを、甚哀と見奉り給ふ。大將は頭辨の誦じつる事を思に、御心の鬼に世中煩う覺え給て、尙侍の君にも音信れ聞え給で久う成にけり。初時雨何時しかと氣色立つに、如何思しけん彼より、

臘「木枯の吹に就つゝ待し間に、
覺束なさの頃も經にけり。」

と聞え給り。折も哀に、强ちに忍び書き給らん御苦心も憎からねば、御使留めさせ給て、唐紙ども入させ給る御厨子披させ給て、凡ならぬを撰出つゝ、筆なども特殊に引擇ひ給る氣色艶なるを、御前なる人々、誰程ならんと突合ふ。源「聞えさせても効無き物懲にこそ、無下に屈頽にけれ。身のみ物憂き程に、

源「逢見ずて忍る頃の涙をも、
一般の秋の時雨とや見る。

心の通ふならば、如何に長雨の空も遣悶し侍ん」など細に成にけり。斯樣に驚し聞る類多んめれど、情なからず打返言給て、御心には深う染さるべし。中宮は、院の御周忌の事に打續き、御八講の準備を種々に用意せさせ給ひけり。十一月の朔日頃御國忌なるに、雪甚う降たり。大將殿より宮に聞え給ふ。

源「別にし今日は來ども見し人に、
行逢ふ程を何時と頼ん。」

何處にも今日は物悲う思さるゝ程にて、御返事あり。

藤「生存る程は憂れど行廻り、
今日は其世に逢ふ心地して。」

殊に粧ひてもあらぬ御書體なれど、貴に氣高きは思做なるべし。筋異り趣致しうはあらねど、人には殊に書せ給り。今日は此御事も思消ちて、哀なる雪の雫に濡々行ひ給ふ。十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。甚う貴し。日々に供養せさせ給ふ。御經より初め、玉の軸、羅の表紙、帙簀の飾も、世に無き體に整させ給り。然ぬ事の裝飾だに尋常ならず在せば、況て道理なり。佛の御裝飾、花机の被などまで、眞の極樂思遣る。初の日は先帝（藤壺の父帝）の御料、次の日は母后の御爲、翌日は院の御料、五卷の日なれば上達部など

御八講　法華經八卷を八人に分ちて八座に讀誦供養する法會をいふ中宮形かへらるべき志なり

御國忌　皇考（天子の御父）皇祖及び母后の御忌日

ゆきあふ雪にかけたり

今めかしうは　あらねど　萬のこと常のやうにてよろしきを本とす藤壺の手蹟極上といへるなり

この御事　藤壺の懸想のこともなりうすもの　ちす竹を簀にあみたる文卷（ふき）經を包

も、世の憚しさを得しも憚り給で、甚數多參り給へり。今日の講師は特殊に選せ給ば、薪樵る程より打初め、同う言ふ言葉も甚う貴し。親王達種々の棒物捧て廻り給に、大將殿の御用意など仍似る者なし。常に同事の如なれども、見奉る度毎に、珍からんをば如何はせん。終の日は我御事を結願にて、世を背き給よし佛に申せ給に、皆人々驚き給ぬ。兵部卿宮、大將（源氏）の御心も動て、淺しと思す。親王（兵部卿）は半の程に立て入給ぬ。心強う思し立つ樣を宣て、果る程に山の座主召て、忌む事受給べき由宣ず。御叔父の横川の僧都、近う參り給て御髮剃し給ふ程に、宮の中動りて忌々しう泣滿たり。何と無き老衰たる人だに、今はと世を背く程は奇う哀なる事を、況て豫て御氣色にも出し給ざりつる事なれば、親王も甚う泣給ふ。參り給る人々も、大方の事態も哀に尊ければ、皆袖濡して歸り給ける。故院の皇子達は、昔の御有樣を思し出るに、甚ど哀に悲う思されて皆見舞聞え給を、大將は立留り給て、聞え出給べき方も無く昏惑て思されど、何か然もと人見奉るべければ、皇子など出給ぬる後にぞ御前に參り給る。漸う人鎭りて、女房們など鼻打拭つゝ所々に群居たり。月は隈なきに、雪の光合たる庭の

むものなり
おほひ打敷なり
五卷の日第三日なり提婆品（法華經第五の最初の品名）をよむ日一經中もつとも功德勝れたる經文とす
薪こり行基の歌「法華經をわが得しことは薪こり菜つみ水汲みしてぞ得ひつゝ大行道」これを歌一定の所をめぐりつゝ經を誦む）あるなり
ほうもち金銀の打枝にさまゝのさゝげものをつくるなり
山比叡山なり
いむ事戒を受くるなり

などかさしもなぜあれほどにもとなり
物さわがしき人々物さわがしくせしほどにかへりて心亂れぬべかりしとなりしたり顏ならでありはれなり
くろばう薰物の名
名香佛に奉る香
宣ひしさま式部がかやうにやなど仰せしことなり
この世此の世と子の世とかけたり
春宮の事には御心迷ふべしとなり

有樣も、昔の事思遣るゝに、甚堪難う思さるれば甚好う思し鎭て、源「如何樣に思し立せ給て、斯う俄には」と聞え給ふ。蕈「今始て思給る事にも有ぬを、物騷さやうなりつれば、心亂ぬべく」など、例の命婦して聞え給ふ。御簾の中の氣息、許多集ひ給ふ人の衣の音ひ、靜寂に擧止なして打身動つゝ、悲げさの慰め難げに洩聞る氣色、道理に甚じと聞給ふ。嵐烈う吹亂吹て、御簾の中の香甚物深き黑方に染て、名香の煙も微なり。大將の御薰さへ香り合ひ愛たく、極樂思遣るゝ夜の體なり。春宮の御使も參り。宣し體思出聞させ給にぞ、御心强さも堪難うて、御返事も聞させ爲せ給ねば、大將ぞ言加へ聞させ給ける。誰も〳〵有る限心鎭らぬ程なれば、思す事どもゝ打出給ず、

源「月の住む雲井を翔て慕とも、
この夜の闇に仍や惑ん。
と思給らるゝこそ効なく、思し立せ給る義さは限なう」とばかり聞え給て、人々近う侍へば、種々亂る心の中をだに得聞え現し給ず悒し。

蕈「大方の憂に就ては厭ども、

御使の命婦の宜しく申しなすなるべしとなり

もとの御位中宮の位なり

御供剃髪の御供したるなり

御念誦堂持佛堂なり

西の南西の對の南にあたりてなり

宮司ども中宮太夫、中宮亮、大進小進等なり

半濁つゝ」など、一半は御使(命婦)の用意なるべし。哀のみ盡せねば、胸苦うて罷出給ぬ。殿にても、我御方に一人打臥て御目も合ず、世中厭しう思さるゝにも、春宮の御事のみぞ心苦き。母宮をだに公體にと思し掟しを、世の憂に堪ず斯く成給にたれば、元の御位にても得在せじ。我さへ見奉り捨ては など、思し明す事限なし。今は斯る方體の、御調度どもをこそはと思せば、年の内にと急せ給ふ。命婦の君も御供になりにければ、其も心深う訪ひ給ふ。委う言續んに、事々しき體なれば漏してげるなんめり。然は斯樣の折こそ興き歌など出來るやうもあれ、淋々しや。參り給ふも今は憚しさ薄きて、御自身聞え給ふ折もありけり。思染てし事は、更に御心に離ねど、況て有まじき事なりかし。年も更りぬれば、内裏邊花美に、内宴踏歌など聞給ふにも物のみ哀にて、御誦經深沈に爲給つゝ、後の世の事をのみ思すに賴しく、煩しかりし事離れて思さる。常の御念誦堂をば勿論にて、別に建られたる御堂の、西の南に當りて少し離たるに渡せ給て、取分たる誦經せさせ給ふ。大將參り給へり。改る證も無く、宮の中長閑に人眼稀にて、宮司們の昵さばかり、打

あをうま正月七日なり中宮へもひくなり馬は陽の獸なれば年の始に先づ御覽あるなり

ひきかへぬ馬をひくにかけたり

あいなくそゞろになり

青鈍出家の用ふる色なり青みがゝれる薄墨色

くちなし表うらすべて黄なるかさねなり

うべも心ある尼といはんためなり一音にきく松がうらしま今日ぞ見るうべ心あるあまはすみけり」

ながめかる眺めにわかるみるめなどのめをかけたり

奥深うも頂垂て、見做にやあらん屈し痛げに思り。白馬ばかりぞ仍引更ぬものにて、女房などの見ける。所狹う參集ひ給し上達部なども、道を避つゝ曳過て、向の大殿(二條大后)に集ひ給を、斯るべき事なれば哀に思さるゝに、千人にも代つべき御態にて、深う尋ね參り給るを見るに、あいなく涙含る。客人も甚物哀なる氣色に打見廻し給て、頓に物も宣ず。樣子變る御住居に、御簾の端御几帳も青鈍にて、隙々より微見たる薄鈍山梔子の袖口など、却々優雅う奥床しう思遣れ給ふ。解渡る池の薄氷、岸の柳の氣色ばかりは時を忘ぬなど、種々眺昏れ給て、宜も心あると忍やかに打誦じ給る、二無う優雅し。

源「ながめかる海士の住處と見る故に、
先潮垂る松が浦島。」

と聞え給ば、奥深うもあらず、皆佛に讓り聞え給る御座所なれば、少し氣近き心地して、

藤「在し世の名殘だになき浦島に、
立寄る浪の　珍きかな。」

と宣ふも微聞れば、忍れど浪潛然と零れ給ぬ。世を思澄したる尼君達の見

奥の方には佛を据ゑ給へれば中宮の御座いさゝか端近なりおもしろきかきざまなり

うらしまたぐひなく珍しと見らるゝよしなり浦しまの子の心に用ゐかへたり松がうらしまといふべきをさるひとつもの

たぐひなき御一人にてなり

あいなう何となく

司召春秋にある除目をいふ

大方の道理一般の例として宮の年爵もなり諸國の椽（じやう）目（さくわん）等の官位を給はりその爵祿を得て

るらんも恥ければ、言寡にて出給ひぬ。老女「然も類なく成熟勝り給ふかな。不充分き處なく、世に榮え時に遭ひ給し時は、然る一つものにて、何に就てか世を思し知んと推量れ給しを、今は最甚う思し鎮て、些き事に就ても、物哀なる氣色さへ添せ給るは、あいなう心苦うもあるかな」など老しらへる人々、打泣つゝ愛で聞ゆ。宮（藤壺）も思し出る事多かり。司召の頃、此宮の人は賜るべき官も得ず、大方の道理にても、宮の御給にても、必有べき加階などをだに爲ずなどして、歎く儔甚多かり。斯ても早晩と御位を去り、御封などの止るべきにもあらぬを、許けて變る事多かり。皆豫て思し捨てし世なれど、宮人們も頼所なげに悲と思る氣色どもに就てぞ、御心動く折々あれど、我身を無きに爲しても、東宮の御代を平安に在さばとのみ思しつゝ、御勤行にも、撓なく勤めさせ給ふ。人知ず危く由々しう思聞え給ふ事しあれば、我に其罪を輕めて免し給へと、佛を念じ聞え給ふに萬を慰め給ふ。大將も然見奉り給て道理と思す。此殿の人々們も、又同體に憂き事のみあれば、世中依違く思されて籠り在す。左大臣も、公私引更たる世の有樣に物憂く思して、致仕の表奉り給を、帝は故院の此上なく重き御後見と思して、長

院、中宮に仕ふるを年給とも年爵ともいふ椽二人目三人とあり

御封太上天皇二千戸三宮（太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮）は各一千五百戸の民戸をよせらるゝなり封戸ともいふ

御位を去り中宮出家さるゝとも御封なども改むべからざるなりそれを御出家に託けて朝廷よりの心むけさまゞ〳〵かはる事あるとなり

人しれず東宮の御身に疵あることなり

一族弘徽殿の一族なり

四の君右大臣の女

き世の守護と聞え置給し御遺言を思召に、捨難きものに思聞え給るに、効なき事と度々用させ給ねど、切て反さひ申給て籠り居給ぬ。今は如何、一族のみ返々第え給ふ事限なし。世の柱石と在し給る左大臣の斯く世を遁れ給ば、公も心細う思され、世人も心ある限は歎けり。御子どもは孰ともなく人柄眼易く世に用られて、心地快げに在し給しを、此上なう沈りて、三位中將（葵上の兄）なども、世を思沈る體此上なし。彼四の君をも、仍離々に打通つゝ目醒う待遇れたれば、心解たる御聟の中にも入給ず、思知とや此度の司召にも漏ぬれど、甚しも思入ず、大將殿（源氏）斯う閑寂にて在するに、世は儚きものと見ぬるを、況て道理と思し做て、常に參り通ひ給つゝ、學問をし管絃をも諸共にし給ふ。往昔も物狂きまで、挑み聞え給しを思し出て、互に今も些き事に就つゝ、有難に挑み給り。春秋の御誦經をば勿論にて、臨時にも種々尊き事どもを爲させ給などして、又徒に暇ありげなる博士們召集て、詩文作り韻塞などやうの、遊戯事どもをも爲など悶を遣て、宮仕をも一向爲給ず、御心に任て打遊びて在するを、世中には煩き事ども漸う言出る人々あるべし。夏の雨長閑に降て徒然なる頃、中將然べき集ども數多持せて參り給り。殿に

ましてとわり源氏さへなればまして自身などは道理と思ひてなり

殿上人　儒學に志ある殿上人なり

大學　大學寮の儒者

こまどり　相手の座次を一を左にし二を右にし三を左にして四を右にするがごとく入れちがひに列ぬることなり小間取の義か

まけわざ　歌合せ、碁、相撲などに負けたる方より饗應すること

御子次郎君　後に紅梅右大臣なり

すき給へる羅の直衣の下に生絹（すゞし）の單衣などを着られたるが肌のすきて見ゆるなるべし

も文殿披させ給て、未だ披ぬ御厨子どもの珍き古集の趣なからぬ、少し選出させ給て、其道の人々特とはあらねど數多召たり。殿上人も大學のも甚多う集て、左右に細取に方分せ給ひ。賭物どもなど、甚二なくて挑合り。塞ぎゆく隨に、難き韻の文字ども甚多くて、名譽ある博士どもなどの惑ふ所々を、時々打宣ふ體甚此上なき御才の程なり。如何で斯しも足ひ給けん、仍然べきにて、萬の事人に勝れ給るなりけりと愛で聞ゆ。遂に右負にけり。二日許ありて、中將負業し給へり。事々しうはあらで、優雅たる檜割籠ども、賭物など種々にて、今日も例の人々多く召て詩文など作せ給ふ。階の許の薔薇氣色ばかり咲て、春秋の花盛よりも靜寂に奥き程なるに、打解け遊び給ふ。中將の御子の今年始て殿上するを、八歳九歳ばかりにて聲甚面白く、笙の笛吹などするを愛み翫び給ふ。四の君腹の次郎なりけり。世人の思る贔負重て、寵愛殊に冊り。性質も才々しう容貌も美くて、御管絃の少し亂れゆく程に、高砂を出して謠ふ。例よりは打亂れ給る御顔の匂似るもの無く見ゆ。羅の直衣、單衣を着給るに、透き給る肌容況て甚う見るを、年老たる博士們など、遠く見奉りて、涙落しつゝ居たり。「逢ましものをさゆりばの」と謠ふ終に、

高砂　催馬樂「たかさごのたかさごの尾上に立てる白玉椿玉柳」出してはえらみてなり

さゆりばの　催馬樂には「けさ開けたる初花にあはましものをさゆりばなの」とあり歌ふによりてかやうにつめていひしか

まゐり御酌さるゝなり

それもがと　これも高砂の謂なり「それもがとさんまし　もがとまし　もがと一前に階のもとのさうびといふこと」とあり古今物中將（三位中將）御土器献り給ふ。

中「其もがと今朝開たる初花に、
　劣ぬ君が匂をぞ見る。」

微笑て取給ふ。

源「時ならで今朝咲く花は夏の雨に、
　萎にけらし匂ふ程なく。」

衰にたるものを」と打驚さて、亂がはしく食召做すを、咎出つゝ、强聞え給ふ。多んめりし事ども、斯樣なる折の眞面目ならぬ事數々に書付る、心なき事とか貫之が戒めたうるゝ方にて、煩ければ止つ。皆此御事を譽たる筋にのみ倭のも唐のも作續たり。我御心地にも甚う思し傲りて、源「文王の子、武王の弟」と、打誦じ給る御名告さへぞ實に愛たき。成王の何とか宣んとすらん、其ばかりや又不安らん。兵部卿宮（紫上の父）も常に渡り給つゝ、御管絃なども巧う在する宮なれば、風流き御間どもなり。其頃尚侍の君罷出給り。瘧病に久う惱み給て、禁厭なども心易くせんとてなりけり。修法など始て癒り給ぬれば、誰も〳〵嬉う思すに、例の珍き歌なるをと聞え交し給て、理無き

名部にきうびを「われはけさうひにぞ見つる花の色をあだなるものと思ひけるかな」の心にてよめるなるべし

らうがはしく きこしめす 酔ひたるさまにもてなさるゝをなり

いさめたうる方 強く戒めたるとなり出所は明らかならず紛れの歌などかきつくるなと戒しめあるなるべ

この御事源の御事なり 文王の子文王を桐壺帝に比し武王を朱雀院に比し源自身を周公旦に比して宣

體にて夜々對面し給ふ。甚盛に賑はしき様子し給る人の、少し打悩て痩々に成給る程甚美げなり。后の宮（弘徽殿）も一所に在る程なれば、様子甚恐けれど、斯る事しも増る御癖なれば、甚忍て度重りゆけば、氣色見る人々も有べかんめれど、煩うて宮（后）には然なんとは啓せず。大臣（右大臣）將た思掛け給ぬに、雨俄に驚々しう降て、雷甚う鳴騒ぐ曉に、殿（右大臣）の君達、宮司（皇太后宮職）など立騒て、此方彼方の人眼繁く、女房們も怖惑て近う集參るに、甚理なく出給ん方なくて明果ぬ。御帳の周圍にも人々繁く並居たれば、甚胸潰はしく思さるゝ事情知の人二人ばかり心を惑す。雷鳴止み雨少し小歇ぬる程に、大臣渡り給て、先宮（后）の方に在しけるを、村雨の紛にて得知給ぬに、輕率に偶と這入給て御簾引上げ給ふまゝに、右「如何にぞ甚憂てありつる夜の體に、思遣り聞えながら參來でなん。中將、宮の亮（右大臣の子息）など侍ひつや」など宣ふ様子の舌敏に慌きを、大將（源氏）は物の混雑にも、左大臣の御有様偶と思し比べられて、比較なうど微笑れ給ふ。實に入果ても宣へかしな。尚侍の君甚佗う思されて、徐膝行出給ふに、面の赧みたるを仍悩う思さるゝにやと見給て、右「何ど御氣色の例ならぬ。靈氣などの煩きを、修法延さすべか

ふなり史記に「周公戒二伯禽一曰、我、文王子、武王弟、成王叔父、我於二天下一不レ賤矣、然、我一沐時三握髮一、一飯三吐レ哺、起以待レ士、猶恐失二天下賢人一云々」成王の何とか周公旦の詞には成王の叔父とあれどこゝは成王を冷泉に比して下に密通の事あれば何とか名のらんとなり

村雨のまぎれ にて村雨のさわがしさに右大臣の參られたりしを心づかれ

りけり」と宣ふに、薄藍なる帶の、御衣に纏れて引出られたるを、見付給て奇しと思すに、又疊紙の手習などしたる、御几帳の許に落たりけり。是は如何なる物どもぞと、御心驚れて、右「誰がぞ、氣色殊なる物の體かな。賜へ、其取て誰がぞと見侍ん」と宣ふにぞ、打見返て我も見付給る、紛すべき方もなければ如何は答へ聞え給ん。我にもあらで在するを、子ながらも恥と思すらんかしと、然許の人は思し憚るべきぞかし。然ど甚性急に悠めたる所在せぬ大臣の、思しも廻さずなりて、疊紙を取給ふまゝに几帳より見入給へるに、最甚う嫋て憚しからず添臥たる男あり。今ぞ徐顔引隱て兎角紛す。淺しう眼覺しう不快しけれど、直面には如何でか顯し給ん。眼も眩る心地すれば、其疊紙を取て寢殿へ渡り給ぬ。尚侍の君は、自失の心地して死べく思さる。大將殿も最惜う、遂に要なき擧動の積て、人の誹謗を負んとする事と思せど、女君の心苦き御氣色を兎角慰め聞え給ふ。大臣は思の儘に秘たる所在せぬ本性に、甚ど老の御僻さへ添にたれば、何事にかは滯り給ん、巨細と宮（后）にも愁へ聞え給ふ。右「斯々の事なん侍るを、此疊紙は右大將（源氏）の御手なり。昔も油斷されて有初にける事なれど、人體に萬の罪を負して、

ざりしなり
たゝう紙　源氏のふところ紙なり書きすさびなどあるなり
我も打見かへりて尙侍なり
さばかりの人　貴人などは子にも遠慮あるべきとなり
さても見んとして見んとなり

たれも〳〵たれもとがめずなり
みなかの源氏にと皆思ひしに領狀な

然ても見んと言侍し折は心も留ず、侮蔑げに遇されにしかば、安からず思給しかど、然べきにこそはとて、世に穢たりとも思し棄まじきを賴にて、斯く本意の如く奉りながら、仍其忌憚ありて、確保たる女御なども言せ侍ぬをだに、飽ず口惜う思給るに、又斯る事さへ侍ければ、更に甚心憂くなん思成り侍ぬる。男の例とは言ながら、大將も甚怪からぬ御心なりけり。齋院(朝顔)をも仍聞え犯しつゝ、忍に御文通しなどして氣色ある事など、人の語り侍しをも、世の爲のみにもあらず、我爲にも好るまじき事なれば、豈夫然る思慮なき事爲出られじとなん、時の有職と天下を靡し給る體殊なんめれば、大將の御心を疑ひ侍ざりつる」など宣ふに、宮は甚どしき御心なれば、甚心外き御氣色にて、后「帝と聞れど昔より皆人輕侮し聞て、致仕大臣も、二無く册く一女(葵上)を、兄(雀)の坊(東宮)にて在るには奉で、弟の源氏にて雅きが元服の添臥に取分き、又此君(朧月夜)をも、宮仕にと志し侍しに、愚がましかりし有樣なりしを、誰も〳〵奇とや思したりし、皆彼の御方にこそ最負せ侍るめりしを、其本意違ふ體にてこそは斯ても侍ひ給めれど、最惜さに、如何で然る方にても人に劣る體に遇し聞ん、然ばかり憾げなりし人の見る所もありなどこ

かりしとなり
かくても侍ひ宮中に奉仕あるとなり
なびき給ふ　かんの君の心のひく方へ源氏〳〵になびかるゝよとなり
東宮の御代　東宮の御代をいそぐ源の謀反の心のやうに言ひなさるゝなり
思しすつまじき　主上、太后のなり朧月夜のそれにあまへての所爲なるべしとなり

そは思ひ侍つれど、強て我心の入る方に靡き給にこそは侍らめ。齋院の御事は況て然もあらん。何事に就ても、朝廷の御方に不安らず見るは、春宮(冷泉)の御世最負殊なる人なれば、道理になん有める」と慥しう宣ひ續るに、有繋に最惜う何ど聞えつる事ぞと思さるれば、有「然ばれ、暫時此事洩し侍らじ。主上にも奏せさせ給な。斯の如罪侍りとも、思し捨まじきを賴にて甘て侍るなるべし。内々に制し宣んに肯き侍ずば、其罪には自身當り侍ん」など聞え正し給ど、殊に御氣色も直らず。斯く一所に在して隙も無きに、憚ひ所なう然て入り在せらるらんは、殊に輕め弄ぜらるゝにこそはと思し做に、甚ど甚う眼醒しく、此序に然べき事ども構成へ出んに、好き便なりと思し圖すべし。

麗景殿　桐壺の御時の女御にて花散里の姉なり

御弟妹をもおとゝといふこの頃のならひなり

中川　京極中川なり

あづま和琴（わごん）の調にしてなり

祭　加茂祭なり

たゞ一目　この家誰ともなし時の余情

花散里

人知ぬ御自業の物思しさは、何時となき事なんめれど、斯く大方の世に就てさへ、煩う思し亂る事のみ増れば、物心細く世中凡て厭しう思し成るゝに、有繋なる事多り。麗景殿と聞しは、宮達も在せず、院崩れさせ給て後愈哀なる御有様を、唯此大將殿（源氏）の御心に扶持されて、過し給なるべし。御弟の三の君、内事邊にて些く微き給し名殘、例の御心なれば有繋に忘も果給ず、特とも眷遇給ぬに、一方（花散里）の御心をのみ盡し果給べかんめるを、此頃殘る事なく思し亂る世の哀の種には思出給ふに、忍難くて、五月雨の空珍う晴たる雲間に渡り給ふ。何許の御裝飾なく打窶して、御前驅なども殊に無く忍び給り。中川の程在するに、些小なる家の木立など趣致ばめるに、好く鳴る琴を東に調て搔合せ、賑はしく彈鳴すなり。御耳留りて、門近なる所なれば、少し差出て見入給ば、大なる桂の木の追風に、祭の頃思し出られて、其處果處となく樣子興きを、唯一目見給し宿なりと思出給に無心ならず、程經にけるを不審くやと憚しけれど、過難に猶豫給ふ折しも、郭公鳴

催し聞え顔　此の宿りを訪ひ給へと郭公の促す顔なるとなり

寢殿と思しき屋　小屋は全き寢殿作りにはあらねばそれらしき屋といふなり寢殿は正殿なり中央にあり傍に對の屋あるなり

きゝしる聲　前に通はれし頃惟光も内の女も互に聞知りたる聲となり

うゑし垣根も　仕ちりし庭の梢もしげり合ひて植ゑし垣根も得とそ見分かねー女の歌にあなおぼつかなとありたれば惟光

て渡る。催し聞え顔なれば、御車押返させ給て、例の惟光を入給ふ。

源「遠返り得ぞ忍れぬ郭公、
微語し宿の垣根に。」

寢殿と思しき屋の西の端に人々居たり。先々も聞知る聲なりければ、聲作り氣色取て御消息聞ゆ。若やかなる氣色ども數多して不審くなるべし。

女「郭公言問ふ聲は其なれど、
噫不審な五月雨の空。」

故意に不審ると見れば、惟「縱し〳〵、植し垣根も」とて出るを、人知ぬ心には憾うも哀にも思けり。然も憚べき事ぞかし。道理にもあれば有繋なり。斯樣の際に、筑紫の五節こそ可愛氣なりしはやと先思し出づ。如何なるに就ても御心の暇なく、年月を經ても苦氣なり。仍斯樣に見し邊の情は過し給ぬにしも、却々數多の人の憂悶種なり。扨彼本意（花散里）の所は、思し遣つるも著く、人眼なく靜にて在する有樣を見給ふも甚哀なり。先女御の御方にて、昔の御物語など聞え給に、夜更にけり。二十日の月差出る程に、甚ど木高き蔭ども小闇う見え渡りて、近き橘の薫懷しく香て、女御の御樣子、陳に

もとの垣根やらん見分かずとおぼめきて歸り出づるなり

人しれぬ心内の女の心なり今少し懇にも尋ねよかしと思ふなり

さもつゝむべき源氏の長く途絶ありし間にもし主定まりたらば憚るべきこともつゝもきこともなればおぼめきしれば不快なながらさすがにしひてかこつべきやうもなしとなり

筑紫の五節大貳の娘なり是も源の逢ひし人なり五節の舞姫になりしの人なるべしらうたげなりしはやは感嘆詞なり

たれど飽まで用意あり、貴に可愛氣なり。勝れて花やかなる御寵愛こそなかりしかど、睦う懐きには思したりしものをなど、思出聞え給に就ても、昔の事搔連ね思されて打泣給ふ。郭公往つる垣根のにや、同聲に打啼く。慕ひ來にけるよと、思さるゝ程も艶なりかし。如何に知てかなど忍やかに打誦じ給ふ。

源　橘の香を懐み郭公、
　花散る里を尋てぞ訪ふ。

往時の忘れ難き慰には、先參り侍ぬべかりけり。此上なうこそ紛る事も數添ふ事も侍けれ。大方の世に隨ふものなれば、昔語も搔崩すべき人少う成行を、況て如何に徒然も紛る事なく思さるらん」と聞え給に、甚更なる世なれど、物を甚哀と思し續たる御氣色の淺からぬも、人の御體がらにや多く哀ぞ添にける。

女御「人目なく荒たる宿は橘の、
　花こそ軒の緣となりけれ。」

とばかり宣るも、然は言ど人には甚殊なりけりと思し比べらる。西面には、特となく忍やかに打擧動給て、覗き給るも珍きに添て、他所に眼馴ぬ御體なれば憂さも忘ぬべし。何や彼やと例の懐く語ひ給も、思さぬ事にはあらざるべし。假にも見給ふ限は、普通の際にはあらねばにや、種々に就て言効なしと思さるゝはなければにや、憎氣なく、我も人も情を交しつゝ過し給なりけり。其を効なしと思ふ人は、兎角に變るも道理の世の性と思做し給ふ。往つる垣根も、然樣にて有樣變りにたる邊なりけり。

ありつる垣根
先刻のなり

いかに知りて
「いにしへの事かたらへば郭公いかに知りてかなく聲のする」

橘の
「橘の香をなつかしみ時鳥語らひしつゝ啼かぬ日ぞなき」「橘の花ちる里に通ひなば山時鳥とよませんかも」（とよむは轟き響くなり）この二首の意にてよみたる歌なり卷の名これより出でたり又萬葉八に「橘の花ちる里の時鳥片戀しつゝ啼く日しぞ多き」ともあり

大方の世に隨ふ世なれば今は二條の右大臣（弘徽殿の父）方にのみ人の阿附するなり

いとさらなるハつの世もさる事なれどもなり

西面
女御を訪ひの序のやうにしてわざとはなく花散里をとはるゝなり

さま〳〵につけてどの品かにつけて長所はある人のみなればなり

あいなし
はりあひなしとなり

さがならひなり

ありつる垣根
先刻の中川の宿もなり

世の中いと花散里の巻に大方の世に隨ひてとかける詞につゞきたる文意なり

これより増る

籠居しあられてもこの上遠流になりては思せられなり重罪は遠島輕罪は近島なりいづくへも自ら遠慮して隱居あらんとなり

かの須磨は源氏の隱居の浦に行平卿かの浦にもしほたれし事、又周公叔の管叔蔡叔の讒により東征せしにかたどりて文王の弟との源子の武王の弟との自稱したるは周公旦になぞらへたる證なり

あふを限り「我が戀は行方もしらず果もなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」

やがて別るべき「かりそめの往きかひぢとぞ思ひこし今は限りの門出なりけり」の心なるべし

あじろ車女の乗用する車にて人に忍ぶ時のもの路次にて人に禮などもなきなり

御方

須磨

世中甚煩く凌辱き事のみ増れば、切て知ず顔に在經ても、是より増る事もやと思し成ぬ。彼須磨は、昔こそ人の住處なども有けれ。今は甚里離れ心凄くて、海士の家だに稀になど聞給へど、人稠く雜闘たらん住居は甚本意なかるべし。然とて都を遠からんも、故里不安かるべきを、外觀惡くぞ思し亂る。萬の事過去將來思續け給に、悲しき事甚種々なり。憂きものと思捨つる世も、今際と仆離なん事を思すには、甚捨難き事多る中にも、姫君(紫上)の明暮に添ても思歎き給る體の心苦さは、何事にも勝れて哀なるを、往廻ても又逢見ん事を必ずと思さんにてだに、仍一二日の間他處に明し暮す折々だに不安きものに覺え、女君も心細うのみ思う給るを、幾年其程と限度ある道にもあらず、逢を限に隔り行んも、定なき世に卽て別べき門出にもやと甚う覺え給ば、忍て諸共にもやと思し寄る折あれど、然る心細からん海面の、波風より外に立ち交る人も無からんに、斯く可愛き御容にて引具し給らんも甚似なく、我心にも却々憂悶の端なるべきをなど思し返すを、女君は、甚じからん道にも後れ聞ずだにあらばと意向けて、恨しげに思いたり。彼花散里にも、在し通ふ事こそ稀なれ、心細く哀なる御有樣を此御蔭に隱て在し給は、甚う歎き思したる體甚道理なり。等閑にても微に見奉り通ひ給し所々、人知ぬ心を碎き給ふ人ぞ多りける。入道宮(藤壺)よりも、物の風聞や又如何取做れんと我御爲憚しけれど、忍つゝ御慰問常にあり。昔斯樣に相思し、愛情をも見せ給ましかばと打思出給に、然も種々に心をのみ盡すべかりける人の御宿緣かなと、憂う思ひ聞え給ふ。三月二十日餘の程になん、都離れ給ける。人に今としも知せ給ず、唯甚近う仕う奉り馴たる限七八人ばかり御供にて、甚微にて出立給ふ。然べき所々に御文ばかり打忍び給しにも、哀と偲るばかり書盡し給るは見所も有ぬべかりしかど、其折の心地の混雜に確くも聞置ず成にけり。二三日豫て大殿(左大臣家)に夜に隱て渡り給り。網代車の打窶れたるに、女の如にて憚へ入給も、甚哀に夢とのみ覺ゆ。御方甚淋げに打荒たる心地して、若君の御乳母ども、昔侍し人の中に罷出散ぬ限、斯く渡り給るを珍がり聞て、參上り集て見奉るに就ても、殊に物深からぬ若き人々さへ、世の常なさ思知れて涙に昏たり。若君は甚美うて、戯走り在し

源氏と葵上の住はれし方なり

つれ〴〵にこもらせ　源の除名せられて出仕なきなり去年の夏より此の三月のことと物語のおもてになけれども聞えたり

たり。源「久濶き間に忘ぬこそ哀なれ」とて、膝に居ゑ給る御氣色忍難氣なり。大臣此方に渡り給て對面し給へり。左「徒然に籠せ給らん程、何と侍ぬ昔物語も參り來て聞させんと思給れど、身の病重きに因り朝廷にも仕う奉らず、位をも返し奉りて侍るに、私用には腰延てなど物の風聞歪々しかるべきを、今は世中憚るべき身にも侍ねど、嚴密き世の甚恐う侍るなり。斯る御事を見給るに就て、命長きは心憂く思給へらるゝ世の末にも侍るかな。天の下を逆に爲ても、思給へ寄ざりし御有樣を見給れば、萬甚味氣なくなん」と聞え給て、甚う悄れ給ふ。源「兎ある事も角る事も、前の世の報にこそ侍るなれば、言もて往ば唯自身の怠慢になん侍る。然して斯く官職を褫れず、些細なる事に關ひてだに、公の勘當なる人の、現狀にて世中に在經るは、科重き事に他の國にも爲侍るなるを、遠く放ち遣すべき評定なども侍るなるは、特殊なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁なき心に任せて平然過し侍らんも、甚憚多く、是より大なる耻に臨ぬ先に、世を遁なんと思給へ立ぬる」など、委細に聞え給ふ。昔の御物語、院（桐壺帝）の御事、思し宣せし御殊遇など聞出で給て、御直衣の袖も引放ち給ぬに、君も得心强くも擬し給ず。若君（夕霧）

なづさひ聞えぬ　源氏に馴れず成長することなり

さるべきにて定まりたる宿業にてなり

いひ出づるふし　他の譏言ありてなり

中納言の君　源のひそかに語らはれし葵上の女房なり

の何心なく紛歩きて、是彼に馴聞え給ふを甚じと思したり。左「逝ぎ侍りにし人を、世に思給へ忘る世なくのみ今に悲び侍るを、此御事になん、若し侍る世ならましかば如何樣に思歎き侍らまし。好ぞ短くて斯る夢を見ず成にけると、思ふ給へ慰め侍る。幼く在し給が、斯く齡過ぬる中に留り給て、馴ひ聞ぬ月日や隔り給んと思給るをなん、萬の事よりも悲う侍る。往昔の人も、眞に犯罪あるにしても、斯る事に當らざりけり。仍然べきにて、他國の朝廷にも斯る類多く侍りけり。然ど言出る節ありてこそ然る事も侍りけれ。兎ざま角ざまに思給へ寄ん方なくなん」など、多くの御物語聞え給ふ。三位中將（葵の兄）も參り給て、大御酒など献り給に、夜更ぬれば泊り給て、人々御前に侍せ給て、物語など爲させ給ふ。他よりは勝に此上なう忍び思す中納言の君、言ば得に悲う思る體を人知ず哀と思す。人皆靜りぬるに取分て語ひ給ふ。是に依り泊り給るなるべし。明ぬれば夜深う出給に、有明の月甚興しう、花の木ども漸う盛過て、僅なる木蔭の甚面白き庭に薄く霧渡たる、其處果處と無く霞合て、秋の夜の哀に多く立勝れり。隅の間の勾欄に押倚て、暫ばかり眺め給ふ。中納言の君見送り奉らんとにや、妻戸押啓て居たり。源「又

うらみ　浦見に恨みをかけたり

對面あらん事こそ思へば甚難けれ。斯りける世を知で、心易くも有ぬべかりし月比を、然も急で隔てけるよ」など宣へば、物も聞ず泣く。若君の御乳母宰相の君して、宮(大宮)の御前より御消息聞え給り。宮「自身も聞まゝ欲きを、搔昏す亂心地猶豫侍る程に、甚夜深う出させ給ふなるも、體變たる心地のみし侍るかな。心苦き人(夕霧)の寢汚き間は、暫時も猶豫せ給で」と聞え給れば、打泣給て、

源「鳥邊山燃し煙も紛やと、
　蜑の鹽燒くうらみにぞ往く。」

御返事ともなく打誦じ給て、源「曉の別は斯のみやは心盡なる、思知り給る人も有んかし」と宣へば、宰「何時となく別といふ文字こそ憂て侍るなる中にも、今朝は仍、比儔あるまじう思給らるゝ程かな」と、鼻聲にて實に淺からず思へり。源「聞させまゝ欲きゝ事も返すゝ思給ながら、唯鬱結れ侍る程、推量せ給へ。寢汚き人は、見給んに就て却々浮世遁難う思給られぬべければ、心强く思ふ給なして急ぎ罷出侍り」と聞え給ふ。出給ふ程を人々覗て見奉る。入方の月甚明きに、甚ど優雅う美麗にて物を思いたる體、虎狼だにも泣ぬべし。況て幼く在せし程より、甚じと思ふ。眞や御返し、

まことやほんになり

大宮「亡人の別や甚ど隔らん、
　煙と成し雲井ならでは。」

取添て哀のみ盡せず出給ぬる名殘、忌々しきまで泣合り。殿に在したれば、我御方の人々も交睫ざりける氣色にて、所々に群居て、淺しとのみ世を思る氣色なり。侍には親う仕う奉る限は、御供に參べき準備して、私の別惜む程にや人目も無し。然ぬ人は、訪ひ參るも重き咎あり煩しき事增れば、所狹く集し馬車の形も無く淋きに、世は憂きものなりけりと思し知る。臺盤なども一半は塵ばみて、疊所々に引反したり。見る程だに斯り、況て如何に荒行んと思す。西の對に渡り給れば、御格子も鎖で眺め明し給ければ、簀子などに若き童所々に臥て今ぞ起騷ぐ。宿直姿ども美うて出入を見給にも心細う、年月經ば斯る人々も得しも在果で行散んなど、然しもある まじき事さへ御目のみ留りけり。源「昨夜は然々して夜更にしかばなん、例の意外なる樣にや思し做つる。斯て侍る程だに御眼離ずと思を、斯く世を離る際には心

臺盤　食物をもりたる盤(皿)にて丸盆の如きものを載するのを臺をいふ盤はすみてよむが故實のよし長さ八尺二人以上、四尺は一人の料、臣下一人などの集り食する臺なり

疊　不用の時は敷きたるを上げ

て裏をあらはし壁などにたてかけおくなり

思ふ人々紫上の母にわかれ祖母にわかれ今又源に別るゝをいふ

苦き事の自然多りけるを、直家籠にてやは。常なき世に、人にも情なき者と心隔れ果んも、最惜うてなん」と聞え給ば、紫「斯る世を見るより外に、意外なる事は何事にか」とばかり宣て、甚じと思し入たる體人より殊なるを、道理ぞかし、父親は甚疎遠にて、元來思し馴にけるに、況て世の風聞を煩がりて音信聞え給ず、御訪問にだに渡り給ぬを、人の見らん事も恥く、却々知れ奉で止なましを、繼母の北方などの、北「世に俄なりし幸福の慌さ、噫忌々しや、思ふ人々方々に就て別れ給ふ人かな」と宣けるを、然る便ありて漏聞給にも甚う心苦ければ、是よりも絶て音信聞え給ず。源「又頼しき人も無く、實にぞ哀なる御有樣なる。仍世に免れ難うて年月を經ば、巖の中にも迎へ奉ん。只今は外聞の甚似なかるべきなり。朝廷に畏り聞る人は、明なる月日の影をだに見ず、容易に身を擧止ふ事も甚罪重かんなり。過失なけれど、然べきにこそ斯る事も有めれと思に、況て思ふ人具するは例なき事なるを、一向に物狂しき世にて、立勝る事も有なん」など聞え知せ給ふ。日闌るまで大殿籠り。帥宮、三位中將など在したり。對面し給んとて御直衣など奉る。位無き人はとて無文の御直衣、却々甚懷きを

帥宮源の弟宮にて太宰帥に任ぜられたる人、親王ならでは任ぜられぬ官なり

無文平絹なり

一眼うけて涙の眼に滿ちたるをいへり

着給て、打寢れ給る甚愛たし。御鬢搔給とて鏡臺に寄給るに、面痩給る影の自身ながら甚貴に美麗なれば、源「此上無うこそ衰にけれ、此影の如にや痩て侍る。哀なる事かな」と宣へば、女君涙を一眼受て見越せ給る、甚忍難し。

源「身は斯て流浪ぬとも君が邊、
去ぬ鏡の影は離じ。」

と聞え給ば、

紫「別ても影だに留るものならば、
鏡を見ても慰てまし。」

言ともなくて柱隱に居隱て、涙を紛し給る體、仍許多見る中に、比儔なかりけりと思し知るゝ人の御有樣なり。親王は多感なる御物語聞え給て、暮る程に歸り給ぬ。花散里の心細氣に思して、常に聞え給も道理にて、彼人も今一度見ずば難面とや思んと思せば、其夜又出給ものから甚心憂くて、甚う更して在したれば、女御、（麗景殿）女「斯く數へ給て、立寄せ給る事」と、喜び聞え給ふ體書續んも煩し。最甚う心細き御有樣、唯此御蔭に隱て過い給る年月、甚ど荒增ん程思し遣れて、殿の内甚微なり。月朧に差出て、池廣く山木

西面花散里なり

よそへられて月の入り果つるに源氏の君の別れてかへらるゝをよそへられてなり

濃き御衣たゞ濃き薄きとあるはいづれも紫なり

ぬるゝがほなれば―あひにあひてものおもふ頃の君袖にやどる月さへぬるゝ顔なる―

心苦しいつも氣の毒といふ意味の處に用ゐたり

すむべき住むに澄むをかけたり

ただしらぬ涙こそ―行先をしらぬ涙のかなし

深き邊心細氣に見るにも、住離たらん巖の中思し遣る。西面には斯しも渡り給ずやと打屈して思しけるに、哀添たる月影の優婉う深沈なるに、打擧止給る匂似るものなくて甚忍やかに入給ば、少し膝行出て卽て月を見て在す。又爰に御物語の程に明方近う成にけり。源「短夜の頃や、斯許の對面も又は得しもやと思こそ、無事にて過しつる年來も悔う、過去將來の例に成ぬべき身にて、何となく心の留る世なくこそありけれ」と、過にし方の事ども宣て、鳥も數次啼ば世に憚て急ぎ出給ふ。例の月の入果る程擬られて哀なり。女君の濃き御衣に映りて實に濡る顏なれば、

花―月影の宿る袖は狹くとも、
　留ても見ばや飽ぬ光を。」

甚じと思いたるが心苦しければ、半は慰め聞え給ふ。

源―行廻り終にすむべき月影の、
　暫し曇ん空だに眺めそ。

思へば果敢しや。唯知ぬ涙のみこそ、心を昏すものなれ」など宣て、曉闇の程に出給ぬ。萬の事ども用意させ給ふ。親う仕う奉り、世に靡ぬ限の人々、

きは只眼の前におつるなり―

得去らず必要のこと

文集白樂天の詩賦を集めたるもの七十二卷あり長慶集といへり

みくら町くらの並び居るをいふ

あふせなき實事なきやう

殿の事執行ふべき上下定め置せ給ふ。御供に隨ひ聞る限は又選出給へり。彼山里の御住處の具は、得去ず取用ひ給べき物ども、殊更に裝も無く省略て、又然べき書ども文集など入たる箱、扨は琴一つぞ持せ給ふ。所狹き御調度、華美なる御裝束など更に具し給ず、賤の山賤めきてもてなし給ふ。侍ふ人々より始め萬の事、皆西の對に聞え渡し給ふ。領じ給ふ御庄御牧より初て、然べき所々の券など皆奉り給ふ。其より外の御藏町納殿などいふ事まで、少納言(紫上の乳母)を捗々しき者に見置給れば、親き家司們具して領すべき體ども宣ひ預く。我御方の中務、中將などやうの女房、難面き御待遇ながら、見奉る間こそ慰めつれ。何事に就てかと思ども、源「命ありて此世に又歸るやうもあらんを、待付んと思人は此方に侍へ」と宣て、上下皆參上せ給て、然べき物ども品々配せ給ふ。若君(夕霧)の御乳母達、花散里などにも、風流き體のは勿論にて、實用しき筋に思し寄ぬ事なし。尙侍の御許に無理して聞え給ふ。文―訪せ給ぬも道理に思給へながら、今際と世を思給へ侍る程の、憂さも辛さも類なき事にてこそ侍けれ。

源―逢瀨なき涙の河に沈しや、

に認むるが用意なり後に柏若木文菜の卷に右衞門督の文を用意なきかき方と思はれしもかやうの處なり

みをは海川の中にて一條の深みの船路となる處をつくしなふをらばそのみをを示す爲に立てたる標木なりこゝは只「流るゝ身」といふ爲に用ゐたるなればいづれにてもあるべし

みなわも消えぬべし身も消ゆる源の歸意なり源ゆるの洛をも待たずやがて思ひに消えぬべしとなり

うしと思しなす朧月夜の緣成

流る澪の始なりけん。」

と、思給へ出るのみなん、罪遁れ難う侍りける。路次の程も危ければ細には聞え給ず。女最甚う覺え給て、忍給ど御袖より餘るも所狹くなん。

朧「涙河浮ぶ水沫も消ぬべし、流て後の瀨をも待ずて。」

泣々亂書き給る御手蹟甚趣致げなり。今一度對面なくてやと思すは仍口惜けれど、思し返して憂しと思做す由緣多くて、朧氣ならず忍び給ば、甚强にも聞え給ずなりぬ。明日とての暮には、院の御墓拜み奉り給とて、北山へ詣で給ふ。曉兼て月出る頃なれば、先入道宮(壺藤)に詣で給ふ。近き御簾の前に御座奉りて、御自身聞えさせ給ふ。春宮の御事を、甚く不安きものに思ひ聞え給ふ。互に心深き同志の御物語、將た萬の哀勝りけんかし。懷う愛たき御樣子の昔に變ぬに、難面りし御氣質も微め聞えさせ欲けれど、今更に憂てと思さるべし。我御心にも、却々今一際煩悶增りぬべければ念じ反して、唯源「斯く思掛ぬ罪に當り侍るも、思給へ合する一節になん空恐う侍る。惜氣なき身は無きに爲しても、宮(東宮)の御世だに事なく在さば」とのみ、聞え給ふぞ道理なるや。宮も皆思し知るゝ事にしあれば、御心のみ動て聞え爲り給ず。大將(源氏)萬の事搔集め思し續て泣給る氣色、甚盡せず優雅たり。源一御山に參り侍るを、御言傳や」と聞え給ふに、頓に物も聞え給ず、理なく躊躇給ふ御氣色なり。

藤「見しは亡く存るは悲き世の果を、背し効も泣々ぞ經る。」

甚き御憂悶どもに、思し集る事ども得ぞ續させ給ぬ。

源「別しに悲き事は終しを、又ぞ此世の憂は增れる。」

月待出て出給ふ。御供に唯五六人ばかり、下人も昵き限して御馬にてぞ在する。勿論なる事なれど往し世の御外出に異り、皆甚悲う思ふ中に、彼御禊の日、假の御隨身にて仕奉りし右近丞の藏人、得べき爵位も程過つるを、終に御籍削れて官も奪れて恥ければ、御供に參る中なり。賀茂の下の御社を彼と見渡す程、偶と思出られて下て御馬の口を取る。

右「引連て葵翳し往昔を、

弘徽殿、右大臣などの一類なり

御みづから侍女にてはなく藤壺自身にてなり

御山桐壺院の山陵なり

見しはなく一の句は故院二の句は源氏なり世を背きたれどその效もなく悲きことはなしとなり

わかれしに桐壺の院になり

この世のうさはうらに子の意もふくめたるべし

右近丞の藏人右近衞府の丞にて藏人なるなり

うべきかうぶり

叙爵なり　みふだけづられ除籍とて殿上人の籍を削らるゝなり籍とは日給簡にて清涼殿に置き殿上人の名を錄するに用ふるもの罪ありて昇殿を停めらるゝ時はその名の簡を除きて下の御祖今の糺なり

思ば難面し加茂の瑞籬。」

といふを實に如何思らん、他より勝に華美なりしものをと思すも心苦し。君も御馬より下給ひて、御社の方を拜み給とて神に暇乞申し給ふ。

源「浮世をば今ぞ別る留らん、
名をば糺の神に任せて。」

と宣ふ體、物愛する若き人にて、身に泌て哀に愛たしと見奉る。御山陵に詣で給て、在し〳〵御有樣唯眼前の如に思し出らる。限なきにても、世に無くなりぬる人ぞ、言ん方なく口惜き事なりける。萬の事を泣々申給ても、其道理を現に得承り給ねば、然ばかり思し宣せし種々の御遺言は、何方へか消失にけんと言効なし。御墓は道の草繁くなりて、分入給ふ程甚ど露けきに、月も雲隱て森の木立木深く心凄し。歸り出ん方も無き心地して拜み給に、往し御面影分明に見え給る、不覺寒き程なり。

源「亡影や如何見るらん擬つゝ、
眺る月も雲隱ぬる。」

明果る程に歸り給て、春宮にも御消息聞え給ふ。王命婦を御名代とて宿せ

心と心づからなり　我が心一つに自身が媒せしばかりにと思ふなり

給ば、其局にとて、文「今日なん都離れ侍る。又參り侍ず成ぬるなん、數多の憂に增りて思給られ侍る。萬推量りて啓し給へ。

源「何時か又春の都の花を見ん、
時失る山賤にして。」

櫻の散過たる枝に付給り。斯なんと御覽ぜさすれば、幼き御心地にも眞面目立て在す。命「御返事如何物し侍ん」と啓すれば、東「暫し見ぬだに戀しきものを、遠くは況て如何にと言かし」と宣す。もの果敢の御返事やと哀に見奉る。味氣なき事に御心を碎き給し昔の事、折々の御有樣思續らるゝにも、憂悶なくて我も他も過し給つべかりける世を、心と思し歎けるを悔う、我心一つに關ん事の如にぞ覺る。命「御返事は更に聞えさせやり侍ず。御前には啓し侍りぬ。心細氣に思召たる御氣色も甚うなん」と、其處果處と無く心の亂けるなるべし。

命「咲て疾く散は憂れど行く春は、
花の都を立歸り見よ。」

時しあらば」と聞えて、名殘も哀なる物語をしつゝ、一宮の內忍て泣合り。

をさめ下司の老女の稱
みかはやうど禁中にて不淨を扱ふ女房
辨官太政官内の事を判紀する官
才名ある人ならでは任ぜられぬなり

一眼も見奉れる人は、斯く思し屈れぬる御有様を歎き惜み聞ぬ人なし。況て常に參り馴たりしは、知及び給まじき長女御厠人までも、有難き御眷顧の下なりつるを、暫時にても見奉らぬ程や經んと思歎たり。大方の世人も、誰かは普通く思ひ聞ん。七歳に成給しより以來、帝の御前に晝夜侍ひ給て、奏し給ふ事の成ぬはなかりしかば、此御恩惠に繫ぬ人なく、御徳を悦ばぬやはありし。貴き上達部辨官などの中にも多り。其より下は數知ず思知ぬにはあらねど、差當ては峻烈き世を思憚りて、參り寄る人も無し。世動りて惜み聞え、下には朝廷を譏り恨み奉れど、身を捨て訪ひ參んにも、何の効かはと思にや、斯る折は外觀惡く恨しき人多く、世中は味氣なきものかなとのみ萬に就て思す。其日は女君(紫上)に御物語長閑に聞え暮し給て、例の夜深く出給ふ。狩の御衣など旅の御裝束甚く寠し給て、源「月出にけりな。仍少し出て見だに送り給かし。如何に聞べき事多く積にけりとのみ覺んとすらん。一日二日稀に隔る折だに奇う悒き心地するものを」とて、御簾捲上て端の方に誘ひ聞え給ば、女君泣沈み給る、猶豫て膝行出給る月影、甚う美げにて居給り。我身斯て果敢き世を別なば、如何なる體に漂浪給んと、不安く悲しけれど、

生ける世の生別あるをしらで命限りと契りけるはかなきことゝなり
申の時難波より舟出されし日の申の時なるべし
大江殿齋宮歸路の時の旅館となり
からくに楚の屈原が放たれたりし事など思ひよせてよまれたるなるべし
羨しくも一いとどしく過ぎゆく方の戀しきに羨し

思し入たるが甚どしかるべければ、

源「生る世の別を知で契つゝ、命を人に限りけるかな。果敢し」など、淺薄に聞え做し給ば、

紫「惜からぬ命に代て眼前の、別を暫し留てしがな。」

實に然ぞ思さるらんと甚見捨難けれど、明果なば顯露るべきにより急出給ひぬ。途次面影に直と添て胸も塞りながら、御船に乘給ひぬ。日永き頃なれば追風さへ添て、未だ申の刻許に彼浦に着給ぬ。假初の道にても、斯る旅を慣ひ給ぬ心地に、心細さも興さも珍なり。大江殿と言ける所は甚く荒て、松ばかりぞ證なりける。

源「唐國に名を殘しける人よりも、行方知れぬ家居をやせん。」

渚に寄る浪の半返るを見給て、美しくもと打誦じ給る體、然る世の故事なれども珍く聞做れ、悲とのみ御供の人々思り。打顧み給るに、來し方の山

くも返る浪かな」

ながむる空は霞も思ふ心を隔て果つまじきなり

かゝる折ならずは罪なくて配所の月を見ばやの心なり

とのびと源の家人なりしなり

は霞遙にて、眞に三千里の外の心地するに、楫の雫堪難し。

源「故里を峯の霞は隔れど、
　眺る空は同じ雲井か。」

憂からぬものなくなん。在すべき所は、行平中納言の藻鹽垂つゝ侘給ける家居近き邊なりけり。海面は稍入て、哀に心凄げなる山中なり。垣の體より初て珍かに見給ふ萱屋ども、葦葺る廊めく屋など趣致う設ひなしたり。所に就たる御住居樣變りて、斯る折ならずば興うも有なましと、昔の御心の戯思し出づ。近き所々の御庄の司召て、然べき事どもなど、良清朝臣など親き家司にて仰せ行ふも哀なり。時の間に甚見所ありて爲做せ給ふ。水深う遣做し植木どもなどして、今はと鎭坐給ふ心地現ならず。國の守も親き殿人なれば、忍て心寄仕奉る。斯る旅處ともなく人騷しけれども、捗々しく物をも宣ひ合すべき人しなければ、知ぬ國の心地して甚鬱結く、如何で年月を過さましと思しやらる。漸う事鎭りゆくに、長雨の頃になりて、京の事ども思しやらるゝに戀しき人多く、女君(紫上)の思したりし體、春宮の御事、若君の何心も無く紛れ給しなどを始め、此處彼處思遣り聞え給ふ。京へ人出し立給ふ。

宮藤壺出家して薄雲女院といへり

私事のやうにて朧月夜の女房の中納言への文のやうにしてなり

仕うまつるべき若君を大切になどなり

二方源氏と紫上とになり

二條院へ奉り給ふと、入道宮(藤壺)とは、書も爲給ず暮され給り。宮には、

源「松島の蜑の苫屋も如何ならん、
　須磨の浦人潮垂る頃。」

何時と待ぬ中にも、過ノ將來搔暮し水際增りてなん。」尙侍の御許に、例の中納言の君の私事の如にて、中なるに、源「倩々と過にし方の思給へ出らるゝに就ても、

源「戀ずまの浦のみるめも懷きを、
　鹽燒く蜑や如何思ん。」

種々書盡し給ふ言の葉思遣べし。大殿(左大臣)にも、宰相乳母にも仕奉るべき事なども書遣す。京には此御文所々に見給つゝ、御心亂れ給ふ人々のみ多かり。二條院の君は、其儘に起も上り給ず、盡せぬ體に思し慣れば、侍ふ人々も嗛へ佗つゝ心細う思合り。持憎し給し御調度ども、彈鳴し給し御琴、脫捨給る御衣の薰などに就ても、今はと世に亡りたらん人のやうにのみ思したれば、半は忌々しうて、少納言は僧都に御祈禱の事など聞ゆ。二方に御修法などせさせ給ふ。半は斯く思し歎く御心を鎭め給て慰め、又舊の如くに歸

かとり　平絹なり　無文なるなり

り給へき體になど、心苦き隨に祈り申し給ふ。旅の御殿居衣など調じて奉り給ふ。縑の御直衣指貫、體變りたる心地するも甚きに、去ぬ鏡と宣し面影の實に身に添給るも効無し。出入り給し方、寄居給し眞木柱などを見給にも胸のみ塞りて、物を兎角思廻し、世に潮染ぬる齡の人だにあり、況て馴睦び聞え、父母に成つゝ扱ひ聞え育し立て馴し給れば、俄に引別て戀しう思ひ聞え給る道理なり。一向世に亡りたらんは言ん方なくて、言効なきにても漸次忘草も生やすらん。聞く程は近けれど、何時までと限ある御別にもあらぬを思すに、盡せずなん。入道宮にも、春宮の御事により思し歎く體甚勿論なり。御宿世の程を思すには、如何淺くは思されん。年來は唯物の風聞などの憚しさに、少し情ある氣色せば、其に就て人の咎め出る事もこそとのみ偏に思し忍つゝ、哀をも多く御覽し過し、すく〳〵しう遇し給し、斯許に憂世の人言なれど、決ても此方には言出る事なくて止ぬるばかりの人の御待遇も、强なりし心の引く方に任せず、半は眼易く秘しつるぞかしと、哀に戀しうも如何思し出ざらん。御返事も少し細かにて文「此頃は甚ど、

しほたるゝ　海女が鹽くみて袖ぬらす如く涙に袖ぬらすをいふ

なげき　嘆きに流れ木の意をかけたるなるべし

いひたり　臘月夜のなげくさまを中納言のいへるなり

なか〳〵この道　人の親の心は

薄「潮垂る事を役にて松島に、
年經る蜑もなげきをぞ摘む。

尙侍の君の御返事には、

臘「浦に燒く蜑だに憚む戀なれば、
煙る煙よ行方ぞ無き。

更なる事どもは得なん」とばかり些にて、中納言の君の中に有り。思し歎く體など甚く言たり。哀と思聞え給ふ節々もあれば打嘆れ給ぬ。姫君の御文は、特殊に細かなりし御返事なれば切なる事多くて、

紫「浦人の潮汲む袖に比べ見よ、
浪路隔る夜の衣を。」

衣の染色し給る體など甚美麗なり。何事も蔦々じう在し給ふを、思ふ體にて今は殊に心慌しう行き闕ふ方もなく、靜にてあるべき物をと思すに甚う口惜う、晝夜面影に憶て堪難く思出られ給ば、仍忍てや迎ましと思す。又打返し何や斯く憂き世に罪をだに失んと思せば、卽て御精進にて、明暮誦經て在す。大殿の若君(夕霧)の御事などあるにも甚ど悲けれど、自然逢見て

やみにあらねどもといふにはかはれるにやとなり夕霧には祖父母伯父父などあり紫上には頼むべき人なしは恩愛の中には夫婦の中に一段深きなるよし

ふりはへわざ〳〵なりあけぬ夜のこゝろまどひ夢かとなりうきめは悔草のわかめみるめなどのめにかけたり

いせを「を」は添へことばなり

これも御息所のなりいふかひは貝によせたり源は歸洛もあるべしこなたは果しなきよしなり

ん。頼しき人々在し給ば不安うはあらずと思し做るゝは、却〳〵子の道は惑れ給ぬにやあらん。眞や騒しかりし程の紛に洩してけり。彼伊勢の宮（六條御息所）へも御使ありけり。彼よりも振延へ尋ね參れり。淺からぬ事ども書き給へり。言の葉筆法などは人より殊に優雅う、巧深く見えたり。文「仍現とは思ひ給られぬ御住居を承るも、明ぬ夜の心惑かとなん、然とも年月は隔て給じと思遣聞えさするにも、罪深き身のみこそ又聞させん事も遙なるべけれ。

御「憂きめ刈る伊勢をの蜑を思遣れ、
藻汐垂てふ須磨の浦にて。

萬に思給へ亂る世の有様も、仍如何に成果べきにか」と多かり。又、

御伊勢島や潮干の潟に漁りても、
言ふかひ無きは我身なりけり。」

物を哀と思しけるまゝに、打置さ〳〵書給る、白き唐紙四五枚ばかりを卷續て、墨付など見所あり。憐に思聞し入を、一節憂しと思聞させし過誤に、此御息所も思慍じて別れ給にしと思せば、今に最惜う畏きものに思聞え給ふ折からの御文甚哀なれば、御使さへ睦うて二三日居させ給て、彼處の物語など爲させて聞召す。若やかに氣色ある近侍の人なりけり。斯く哀なる御住居なれば、斯樣の人も自然物遠からで、微見奉る御容貌を甚う愛たしと涙墮しけり。御返事書給ふ言葉思遣べし。文「斯く世を離るべき身と思給られましかば、同うは慕ひ聞ましものをなどなん、徒然に心細きまゝに、

源「伊勢人の浪の上漕ぐ小舟にも、
憂めは刈で乘ましものを。」

又、

源「蜑が摘む歎の中に潮垂て、
何時まで須磨の浦と眺ん。

聞させん事の、何時とも侍ぬこそ書せぬ心地し侍れ」などぞ有ける。斯樣に何處にも、疊束なからず聞え交し給ふ。花散里も悲と思しけるまゝに、書集め給ける御心々見給に、情趣も眼馴ぬ心地して孰も打見つゝ慰め給ひ、半は憂悶の催し種なんめり。

花「荒増る軒の葱を眺つゝ、

なげき　投木にかけたり流れ來る木なり

すま　すむにかけたり

聞えさせんことの　御息所より聞えさせんこともはるかなるべけれといふを引けて再會し難しの意なり

御庄の者など課役なり、領地の民に力役を命ずること

倚侍の君は同じく出仕を止められしと見えたり

限ある定まりたる女御といふにてもなしとなり

おほやけざまの女官にて其の職あるなり

心にしみにし朧月夜の源のことを忘れ得ぬとなり

いける世に古註には「戀しなん後は何せん生ける身の爲めこそ人は見まくほしけれ」のうたをひきあれどやゝかなはぬ心地す

繁くも露の注る袖かな。」

とあるを、實に葎より外の後見も無き體にて在すらんと思し遣て、霖雨に築土所々崩てなど聞給ば、京の家司の許に仰せ遣して、近き國々の御庄の者など催させて仕奉るべき由宣す。倚侍の君は胡盧に甚く思し屈るゝを、右大臣甚可愛うし給ふ君にて、切に宮(后)にも申し、主上にも奏し給ければ、限ある女御御息所にも在せず、公體の宮仕と思し做り。又彼憎かりし事件こそ嚴しき罰も出來しか。赦され給て參り給ふべきに就ても、仍心に染にし事のみぞ哀に覺え給ける。七月に成て參り給ふ。甚じかりし御寵の名殘なれば、人の誹謗も知召れず、例の上局に直と侍はせ給て、萬に恨み半は契せ給ふ。御容貌も甚優雅う美麗なれど、思出る事のみ多かる心の中ぞ畏き。御管絃の序に、朱「其人(源氏)なきこそ甚淋々しけれ。如何に況て然思ふ人多からん。何事にも光なき心地するかな」と宣せて、朱「院の思し宣せし御遺志を違つるかな。罪得らんかし」とて涙含せ給に得念じ給ず。朱「世中こそ有に就ても味氣なきものなりけれと思知るまゝに、久く世に在んものとなん更に思ぬ。然も有なんに如何思さるべき。近き邊の別に思劣れんこそ憾けれ。生る世にとは實

に好らぬ人の言置けん」と甚懷き御容にて、物を眞に哀と思し入て宣するに就て、ほろ〳〵と零れ出れば、朱「然や孰に落るにか」と宣す。朱「今まで皇子達無きこそ淋々しけれ、春宮(冷泉)を院(桐壺帝)の宣せし體に思ど、好らぬ事も出來めれば心苦う」など、世を御心の外に政ち做し給ふ人々のあるに、若き御心の强き所無き程にて、最惜と思したる事も多かり。須磨には甚ど心盡の秋風に、海は少し遠けれど、行平中納言の關吹越ると言けん浦波夜々は實に最近く聞て、又なく哀なるものは斯る處の秋なりけり。御前に最人寡にて打寢み渡るに、一人眼を覺して枕を欹て四方の嵐を聞給ふに、浪たゞ爰許に立來る心地して、涙墮つとも覺ぬに枕浮くばかりに成にけり。琴を少し搔鳴し給るが我ながら甚凄う聞れば、彈止給て、

源「戀佗て泣く音に紛ふ浦波は、
思ふ方より風や吹らん。」

と歌ひ給るに、人々眼覺て愛たう覺るに忍れで、あいなう起居つゝ鼻を忍やかに拭渡す。實に如何に思らん、我身一つに因り、親兄弟片時立離れ難く、際に就つゝ思らん家を別て、斯く彷徨合ると思すに甚くて、甚斯く思沈む體

いづれにおつるにか我がためにか源の爲にかとなり

よからぬこと東宮を除きて八の宮をたて給ふべきとなり弘徽殿の造意なり宇治にいたりて見えたり

心づくしの秋風

「木の間より もり來る月の 影見れば心づくしの秋は來にけり」

關吹こゆる

「旅人の袂すゞしくなりにけり關吹こゆる須磨の浦風」

涙うくばかり

「涙川水かさまされば敷妙の枕のうきてとまらざるらん」

あいなら

そゞろになり

千枝常則 共に八月頃の繪師なり

四五人 惟光、良清、右近丞などなり

白綾に紫苑色（表薄紫、裏朽黄）などかさねられてなり

こまやかなる色こきなり紫苑花四年齢により用ひる花四ならば色のこきをこまやかなるといふべし

を心細しと思らんと思せば、晝は何彼と戯言打宣ひ紛し」、徒然なる隨に色々の紙を繼つゝ手習を爲給ふ。珍さ體なる唐の綾などに、種々め繪どもを書遊び給る屏風の表どもなど、甚愛たく見所あり。人々の語り聞し海山の有様を遙に思し遣しを、御眼に近くては、實に及ぬ磯の有様二なく書集め給り。此頃の上手に爲める千枝常則など召て、彩色を仕奉せばやと焦躁り合懷う愛たき御有様に世い憂悶忘て、近う馴れ仕奉るを嬉き事にて、四五人許ぞ直と待ける。前栽の花色々咲亂れ興趣き夕暮に、海見遣るゝ廊に出給て佇み給ふ御體の、由々しう美麗なる事、所がらは況て此世の物とも見え給ず、白き綾の柔軟なる、紫苑色など奉りて、濃なる御直衣、帶亂次く打亂れ給る御體にて、釋迦牟尼佛弟子と名乘て緩に誦給る、又世に知ず聞ゆ。沖より船どもの唄ひ騷りて漕行くなども聞ゆ。微に唯小さき鳥の浮ると見遣るゝも心細氣なるに、鴈の連て鳴く聲、梶の音に紛るを打眺め給て、御涙の零るを搔拂ひ給る御手容、黑木の御數珠に映給るは、故郷に女戀しき人々の心地皆思にけり。

源「初鴈は戀しき人の列なれや、

旅の空飛ぶ聲の悲さ。」

と宣へば、良清、

良「搔列ね昔の事ぞ恩ゆる、

鴈は其世の友ならねども。」

民部大輔（惟光）

惟「心から常世を捨て鳴く鴈を、

雲の外にも思ける哉。」

前の右近丞、

右「常世出て旅の空なる鴈がねも、

列に遲ぬ程ぞ慰む。

友惑しては如何に侍らまし」と言ふ。釋の常陸守に成て下向しにも誘れで參るなりけり、下心には思ひ碎くべかんめれど、傲顏に擬して平然き態に爲歩く。月の甚花やかに差出たるに、今夜は十五夜なりけりと思し出て、殿上の御管絃戀しく、所々眺め給らんかしと思遣り給に就ても、月の顏のみ目戍れ給ふ。源「二千里外故人心」と誦し給る、例の涙も止られず。入道宮の霧や

とこよ
仙境なり
くものよそにも
今は我身の上なりけるよとなり

二千里外
「三五夜中新

月色、二千里外故人心」と白樂天の詩集にあり

入道宮の薫壺の九重の霧や隔つるの歌なり

恩賜の御衣は菅公が筑紫に去て年恩賜の御衣を捧げて作られし詩なり「去年今夜侍二清涼一、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在レ此、捧持毎日拜二余香一」

左右にもかゝる身になりしをひとへに恨めしとは思はずに御衣を身にはそへてなつかしさにも袖をぬらすとなり

大節五貳の父なり

隔ると宣せし程、言ん方なく戀しく、折々の事思出給によゝと泣れ給ふ。

侍「夜更侍りぬ」と聞れど、仍入給ず。

源「見る程ぞ暫し慰む廻り逢ん、

月の都は遙なれども。」

其夜主上の甚懷う、昔物語など爲給し御容の、院に似奉り給りしも戀しく、思出聞え給て、恩賜の御衣は今爰に在りと誦じつゝ入給ぬ。御衣は眞に身放ず傍に置給り。

源「憂しとのみ一重に物は思ほえで、

左右にも濡る袖かな。」

其頃大貳は上りける。嚴う類廣く、女勝にて所狹かりければ、北方は船にて上る。浦傳に逍遙しつゝ來るに、他より面白き邊なれば心留るに、大將斯て在すと聞ば、漫然好たる若き女達は、船の中さへ耻う心化粧せらる。況て五節の君は、綱手引過るも口惜きに、琴の聲風に隨て遙に聞るに、偏地の體人の御境遇物の音の心細さ取集め、心ある限皆泣にけり。帥御消息聞たり。大「甚遙なる邊より舷上りては、先早速侍て、都の御物語もとこそ思給へ侍

花散里の卷に五節に源氏あふ事見えたり

あいなう何となくそゞろになり

琴の聲上手の彈くはかすかなるやうにても遠くに聞ゆるなり

帥大宰帥は親王の任ずる官なり權帥に吏務を沙汰せさす權帥もなき時は大貳司るなりさる故に爰には大らかに帥といへるなり

所狹き人眼多く窮屈なるなり

と更に又別になり

御かへり大貳への御返事も同樣なるなり

むかへの人々

りつれ。思の外に斯て在しける御宿を罷過侍る、畏く悲うも侍るかな。相識て侍る人々然べき、是彼まで來迎て數多侍れば所狹きを、思給へ憚り侍る事ども侍りて得侍はぬ事、殊更に參り侍ん」など聞たり。子の筑前守ぞ參る。此殿(源氏)の藏人に爲し顧み給し人なれば、甚も悲し甚じと思ども　又見る人々のあれば風評を思て暫時も立留らず。源「都離て後、昔親かりし人々逢見る事難うのみ成にたるに、斯く特と立寄り參したる事」と宣ふ。御返事も然樣になん。守泣々歸て在する御有樣語るに、帥より初め迎の人々禍々しう泣滿たり。五節は兎角して聞たり。

「琴の音に彈留らるゝ綱手繩、猶豫ふ心君知らめや。

好色しさも人な咎そ」と聞たり。微笑て見給ふ。甚尊貴げなり。

源「心ありて引手の綱の撓はゞ、

打過ましや須磨の浦波。

漁せんとは思ざりしはや」とあり。驛の長に句詩取する人もありけるを、況て落留りぬべくなん覺ける。都には月日過る隨に、帝を初め奉りて、戀

大貳を迎へに來し都の人々なり

とかくして大貳の使とは少し程ありてなり

すき〳〵しさし過したるすき〳〵しさもかゝる折のあはれをしのばれてなれば人もとがむなり「いで我を人な咎めそ大船のゆたのたゆたに物思ふ頃」

いさりせんとは「思ひきや鄙の別れに衰へて蜑の繩たぎいさり(漁)せんとは」たぎは手繰るなり

驛の長に菅公左遷の時播磨の明石の驛長のいみじく思へる氣色を御覽じて作られし詩に「驛長驚時變改、一聲腸是春秋」とありしをいへり

おちとまるべく自他の別混じたるやうなれど落ち留るべくは五節の心なり

鹿を馬と「史記に「趙高欲レ爲レ亂、恐二群臣不レ聽、乃先設二驗持一レ鹿獻二二世一曰レ馬也二世笑曰丞相誤耶、謂レ鹿言レ馬問二左右一左右以默或言レ馬以阿二順趙高一或言レ鹿高因

聞る折節多かり。春宮は況て常に思し出つゝ忍て泣給ふを、見奉る御乳母、況て命婦の君は甚う哀に見奉る。入道宮は春宮の御事を由々しう思しゝに、大將も斯く漂浪給ぬるを甚う思し歎る。御兄弟の親王達、睦う聞え給し上達部など、初つ方は訪ひ聞え給ふなどありき。哀なる詩を作り交し、其に就ても世中にのみ愛られ給ば、后の宮(大后)聞召て、甚く宣けり。后「朝廷の勘事なる人は、心に任せて此世の味ひをだに知る事難うあんなれ。趣致き家居して、世中を誹り批判て、彼鹿を馬と言けん人の邪曲るやうに追從する」など、惡き事も聞えければ、煩しとて、絶て消息聞え給ふ人なし。二條院の姫君(紫上)は、程經る隨に思し慰む折なし。東の對に侍し人ども皆渡り參りし初は、何か然しもあらんと思しかど、見奉り馴る隨に、懷う美き御有樣『懇篤なる御性質も憐愍深う深切なれば、罷出散るも無し。一般ならぬ際の人々には微見えなどし給ふ。許多の中に勝れたる御寵遇も道理なりけりと見奉る。彼御住居には久うなるまゝに、得念じ過すまじう覺え給ど、我身だに驚嘆き宿世と覺る住居に、如何でかは打具しては似なからん體を思返し給ふ。所に就ては萬の事態變り、見給へ知ぬ下人の上をも見給ふ習ぬ御心地に、驚嘆う畏う自ら思さる。煙の甚近く時々立來るを、是や海土の鹽燒くならんと思し渡るは、在す後の山に柴といふもの燻るなりけり。珍にて、

源「山賤の庵に燒るしば〳〵も、
言問來なん戀る里人。」

冬に成て雪降荒たる頃、空の景色も殊に凄く眺め給て、琴を彈遊び給ひて、良清に歌唄せ、大輔横笛吹て遊び給ふ。心留めて哀なる曲など彈給るに、他器の聲どもは止て涙を拭合り。昔朔の國に遣しけん女を思し遣て、況て如何ばかりなりけん、此世に我思聞る人などを、然樣に放ち遣たらん事など思ふも、有ん事の如に忌々しくて、霜の後の夢と誦じ給ふ。月甚明う射入て、些き旅の御坐所は奥まで隈なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入方の月凄く見るに、唯是れ西に行くなりと獨語給ひて、

源「何方の雲路に我も迷なん、
月の見らん事も恥し。」

と獨語給て、例の交睫れぬ曉の空に、千鳥甚哀に啼く。

源「友千鳥諸共に啼く曉は、

陰中ニ諸言ノ鹿者ニ以レ法ニ　東の對に侍ひし人々中將、中務などやうの源の方にありし女房なり

胡の國に遣はしけん王昭君の胡に嫁がせられしことなり

霜の後の夢大江朝綱が王昭君をよめる詩「胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸」胡角は胡の樂器なり

おぼえ給へば一本覺えければとあり源のめづらしき事のやうに京にてはかやうに精進にて御念誦などはまれなればなり

未だ起たる人もなければ、一人寢覺の床も賴し。」返々獨語て臥給ひ。夜深く御手水參りて御念誦など爲給ふも、珍き事の如に愛たくのみ覺え給ば、得見奉り捨ず、家に假初にも得出ざりけり。明石浦は唯這渡る程なれば、良清朝臣、彼入道の女を思出て文など遣けれど返事も爲ず。父の入道ぞ、入「聞べき事なん。白地に對面もがな」と言けれど、承引ざらんもの故行闕りて、空く歸ん後手も愚なるべしと屈し痛うて往ず。世に知ず心高う思るに、國の中は守の緣者のみこそは畏き事にすれど、僻る心は更に然も思で年月を經けるに、此君斯て在すと聞て母君に語ふやう、入「桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそ、朝廷の御勘當にて須磨浦に在し給ふなれ。吾子の宿世にて覺ぬ事のあるなり。如何で斯る序に此君に奉ん」と言ふ。母、母「噫偏や、京の人の語るを聞ば、止事なき御妻ども甚多く持給て、其間隙々に、忍び〳〵帝の御妻をさへ過ち給て、斯も騷れ給なる人は、正に斯く賤き山賤を心注め給てんや」と言ふ。腹立て、入「得知給じ。思ふ心殊なり。然る用意を爲給へ。序して此處にも在させん」と心を適て言も頑く見ゆ。眩きまで裝飾ひ冊きけり。母君、母「何て

さまの殊勝に見奉り捨て得ぬ臣下のさまなり

愛たくとも嫁娶の初に、罪に當て流され在したらん人をしも心掛ん。然ても心を留め給べくはこそあらめ、戯にても有まじき事なり」と言を最甚く呟く。入「罪に當る事は唐土にも我朝にも、斯く世に勝れ何事にも人に殊に成ぬる人の必ずある事なり。如何に在し給ふ君ぞ、故母御息所は、己が叔父に在し給し按察大納言の御女なり。甚警策なる名を取て宮仕に出し給りしに、國王勝て時めかし給ふ事比肩なかりける程に、人の猜多くて亡給にしかど、此君の存り給る甚愛たし。斯く女は心を高く用ふべきものなり。己斯る田舍人なりとて思し捨じ」など言居たり。此女勝たる容貌ならねど、懷う貴に趣致ある體などぞ、實に貴き人に劣るまじかりける。身の有樣を口惜きものに思知て、貴き人は我を何の數にも思さじ。分際に應たる世をば更に見じ。命長くて思ふ人々に後れなば海士にも成なん。海の底にも入なんなどぞ思ける。父君所狹く思ひ冊きて、年に二度住吉に詣でさせけり。神の御靈驗をぞ人知ず賴み思ける。「須磨には年復りて日永く徒然なるに、植し若木の櫻微に咲初て空の氣色麗なるに、萬の事思し出られて打泣給ふ折々多かり。二月二十日餘、往し年京を別し時、心苦かりし人々の御有樣など甚戀しく、南

わが作れる句春といふ文字給はれりと宣ひし時のことなり

殿の櫻は盛に成ぬらん、前年の花の宴に、院の御氣色、内の主上の甚美麗に優雅て、我作る句を誦じ給しも思出聞え給ふ。

源「何時と無く大宮人の戀しきに、

櫻かざしゝ今日も來にけり。」

甚徒然なるに、大殿の三位中將は、今は宰相に成て人柄の甚好れば、時世の威望重くて在し給ど、世中甚哀に味氣なく、物の折毎に戀しく覺え給へば、事の風評ありて罪に當るとも如何はせんと思し成て、俄に參で給ふ。打見るより珍く嬉きにも同一涙ぞ零れける。住居給る體言ん方なく唐向たり。所の佛繪に書たらんやうなるに、竹編る垣爲渡して、石の階松の柱疎略なるものから珍に興し。山賤めきて禁色の黄勝なるに、青鈍の狩衣指貫打窶て、殊更に田舍び扮し給へるしも、甚う見るに笑れて美麗なり。取用ひ給る調度も簡素にして、御座所も露に見入らる。碁雙六の盤、調度、碁の具など、田舍技に爲做て、念珠の具、行ひ勤め給けりと見たり。物食れるなど、殊更所に就け興ありて爲做たり。海士ども漁して貝ゐ物持て參れるを召出て御覽ず。浦に年經る佛など問せ給ふに、種々安氣なき身の憂を申す。其處果處と

外のものを著くるを禁ぜらるゝもの二は特種の色を限りてその著用をゆるされざるものの三は有文の織物をつくるを禁ぜらるゝもの扨普通禁色と第二とあるは第三と第一とを指したり第一位のは例へば著す深紫袍は二位以下の禁色の如し第二のは支子色（淺黄丹）黄丹色、深紫色、赤色、青色、深緋色、深蘇方色の七種なり第三は禁色を聽されざる人冬平絹とある例なりこゝの黄は淺紅色の黄勝ちなるなり

からめき樂天が香爐峯のもとに山居せし時の詩の句をそのまゝ書きたり「石垣」云々著松柱竹編

ゆるし色禁色に三種あり一ば當色以外の色なり

うれしきにも憂きにも心は一つにて分れぬものは涙なりけり

なく囀るも、心の行方は同事なるかなと哀に見給ふ。御衣ども被けさせ給を生る効ありと思へり。御馬ども近う立て、見遣なる庫か何ぞなる稻ども取出て興ふなど珍う見給ふ。飛鳥井少し謠て、月比の御物語泣み笑み、若君（夕霧）の何とも世を思さで在し給ふ悲さを、大臣の明暮に就て思し歎くなど語り給に、堪難く思したり。盡すべくもあらねば、却々片端も得異似ばず、終夜交睫ず詩文作り明し給ふ。然言ながらも物の風評を憚て急ぎ歸り給ふ、甚却々なり。御土器献りて「醉の悲の涙灑ぐ春の盃の裏」と諸聲に誦じ給ふ。御供の人們皆涙を流す。各自少時なる別惜むべかんめり。朝朗の空に雁連て渡る。主人の君、

源「故里を何の春か行て見ん、

羨きは歸る雁がね。」

宰相更に立出ん心地せで、

宰「飽なくに雁の常世を立別れ、

花の都に道や惑ん。」

然べき都の土産など趣ある體にてあり。主人の君、源「斯く忝き御送に」と

青鈍（はなだ）に青氣のまじれるなり

て、黒駒奉り給ふ。源「忌々しう思されぬべけれど、風に當ては嘶ぬべければ」など申給ふ。世に有難げなる御馬の體なり。形身に偲び給とて甚き笛の名ありけるなどばかり、人咎つべき事は互に得爲給ず。日漸う差上りて心慌ければ、顧のみしつゝ出給を、見送り給ふ氣色甚却々なり。宰「何時又對面給らんとすらん、然とも斯てやは」と申給にあるじ、

源「雲近く飛交ふ田鶴も空に見よ、
我は春日の曇なき身ぞ。」

半は賴れながら、斯く成ぬる人は、昔の偉き人だに捗々しう世に又交ふ事難く侍ければ、何か都の境を又見んとなん思侍ぬ」など宣ふ。宰相、

宰「たづがなき雲井に一人音をぞ啼く、
翼並し友を戀つゝ。」

畏く馴聞え侍て、甚しもと悔う思給らるゝ折多く」など、靜閑にもあらで歸り給ぬる名殘、甚ど悲う眺め暮し給ふ。三月の朔日に出來たる巳の日、今日なん斯く思す事ある人は御禊し給べきと、生賢き人の聞れば、海面も可懷くて出給ふ。甚疎略に軟障ばかりを引廻して、此國に通ける陰陽師召て

くらか何ぞすぐ見渡さるゝ處にある倉のやうなる處よりなり

いねども馬に秣かふなり

あすか井　催馬樂あすか井の中に「御秣（みまくさ）もよし」の句あり今御馬どもに秣かふに緣あり

なか〳〵あかず別るゝは逢はぬにまさりて名殘多かるべし

白樂天江州へ左遷の時三月卅日夷陵といふ處にて元稹にあひたる時の詩「醉悲淚灑春盃裏、吟苦支レ頤曉燭」

頭　都のつと三位中將の持參されしなり

ゆゝしう　左遷の人のなれば忌はしく思されんがなり

風にあたりては　「胡馬嘶ヘ北風ニ越鳥巢ニ南枝ニ」馬はもと胡國の獸なり仍北風に當れば故國を慕ひていばゆるとぞ

たづがなき　便官（たつき）なき心なり田鶴にかけていへるなるべし日本紀宣命に「捕多豆何奈伎波、哭爾」云々とありたつきなき意なり

稜せさせ給ふ。船に事大き人形載て流すを見給にも、擬られて、

源「知ざりし大海の原に流來て、
一方にやは物は悲き。」

とて居給る體、然る晴天に出て言ふ由なく見え給ふ。海の面は麗々と凪渡て行方も知ぬに、來し方行先思し續られて、

「八百萬神も哀と思らん、
犯る罪の其と無れば。」

と宣ふに、俄に風吹出て空も搔昏ぬ。御祓も爲果ず立騷たり。肱笠雨とかや降來て甚慌ければ、皆歸り給んとするに笠も取敢ず、然る心も無きに萬吹散し又なき風なり。浪甚嚴う立來て人々の足を空なり。海の面は襖を張たらんやうに光滿て神鳴り閃く。落懸る心地して辛じて辿り來て、「斯る眼は見ずもあるかな、風などは吹ど氣色づきてこそあれ。淺しう珍なり」と惑に、猶止ず鳴滿ち、雨の足當る所徹ぬべく散き落つ。斯て世は盡ぬるにやと心細く思惑ふに、君は悠閑に經打誦じて在す。暮ぬれば神少し鳴止て風ぞ夜も吹く。多く立つる願の力なるべし。今暫し斯だにあらば、浪に引れて入

ぬべかりけり。高汐といふものになん、取敢ず人損るゝとは聞ど、甚斯る事は未だ知ずと言合り。曉方皆打休たり。君も聊寢入給れば、其容とも見ぬ人來て、「何ど宮より召あるには參り給ぬ」とて、辿り歩くと見るに眼覺て、然は海の中の龍王の最甚う物愛するものにて、魅入たるなりけりと思すに甚物恐う、此住居堪難く思し成ぬ。

いとしも「思ふとてとしも人にむつれけんしかば慣ひてぞ見ねば戀しき」

己の日

漢代三月上己の日百官東流水上禊飲云々上巳の日にするを朔日のほどにその己の日あるを出で來るとはいへり

軟障帷幕（とばり）の如きものにて松など畫きたるものといふ

はれに目でゝいよ〳〵御容の曇りなく見ゆるとなり

ひぢかさ雨俄にふり來て笠もとりあへず袖をかざすほどなるをいふ

さる心もなきに俄に起る風なり

ふすまを電光の廣く大きに光るさまをたとへていへり

たどり來てやどりへたどり來てなり

氣色づきてかねて催して吹くことありこれは俄に大風吹きたるなりさる心もなきにとある首尾なり

空の亂れ

ふも五月の亂れなり雨風をいへり

道かひ

道にて往きちがふこと

明石

仍雨風止ず神鳴靜らで日頃に成ぬ。甚困惑き事數知ず、來し方行先悲き御有樣に、心強しも得思し做ず。如何に爲まし、斯りとて都に歸ん事も、未だ世に許れも無くては、胡慮なる事こそ勝め。猶是より深き山を探てや跡絶なましと思すにも、波風に騷されてなど人の言傳ん事、後世まで甚輕々しき名をや流し果んと思し亂る。御夢にも唯同じ容なる者のみ來つゝ纏し聞ゆと見給ふ。雲間も無く明暮る日數に添て、京の方も甚ど覺束なく、斯ながら身を零落しつるにやと心細う思せど、頭差出べくもあらぬ空の亂に、出立參る人も無し。二條院よりぞ、强に奇き姿にて濡ち參る。道交にてだに人か何ぞとだに御覽し分べくもあらず、先追拂つべき賤男の、切に睦う思さるゝも我ながら畏く、屈しにける心の程思し知る。御文には、紫「淺しく小歌なき頃の氣色に、甚ど空さへ閉る心地して、眺遣る方なくなん、

紫「浦風や如何に吹らん思遣る、
袖打濡し波間なき頃。」

哀に悲き事ども書集め給り。引披るより甚ど水際増ぬべく、搔昏す心地し給ふ。使「京にも此雨風甚奇き物の戒なりとて、仁王會など行るべしとなん聞え侍し。内裏に參り給ふ上達部なども、凡て在來鎖て政事も絶てなん侍る」など、正確しうもあらず鈍う語り做ど、京の方の事ゝ思せば欲聞うて御前に召出て問せ給ふ。使「唯例の雨の小歇なく降て、風は時々吹出つゝ日頃に成侍るを、例ならぬ事に驚き侍るなり。甚斯く地の底徹るばかりの氷降り、雷の鎮ぬ事は侍らざりき」など、甚き體に驚き怖て居る顔の、甚辛きにも心細さ増りける。斯しつゝ世は盡ぬべきにやと思さるゝに、其翌日の曉より、風甚う吹き潮高う滿て浪の音荒き事、巖も山も殘まじき氣色なり。雷の鳴閃く體更に言ん方なくて、落蒐ぬと思るに、有る限猛き人なし。人々「我は如何なる罪を犯て斯く悲き眼を見らん。父母にも逢見ず、可愛き妻子の顔をも見で死べき事」と歎く。君は御心を鎮て、何詔の沙失にてか此渚に命をば極んと強う思し做ど、甚物騒ければ色々の御幣捧させ給て、源「住吉の神近き境々鎮守り給ふ。眞に跡を垂給ふ神ならば助け給へ」と、多の大願を立給ふ。各自自身の命をば勿論にて、斯る御身の又無き例

みぎは　涙をいへり

仁王會　七難卽滅の心にてかやうの時行はる、經に曰く「要讀般若波羅密、七難卽滅、七福卽生、帝王歡安樂、人王歡喜」「日月火度、宿星失レ度、火、雨、風、旱、鬼賊謂二之七難一」「仁王經持誦天皇御宇始渡二來本朝一三月被レ行二仁王會一」

ひふり　霰などのふるなり

住吉の神　往來の舟を護り給ふ故に神功皇后新羅征伐の後船を以

て幣となされたり

跡を垂れ　佛氏の說に日本の神々も天竺なる本地の某佛の跡を此地に垂れて出で給へるもの本地垂跡といふことを稱へて天照太神を本地阿彌陀佛の垂跡とし八幡太神を觀世音なりとす

物おぼゆる限　正氣ある人は皆なり

大炊殿　雜舍にて、炊（かしき）などする處

に沈み給ぬべき事の甚う悲きに心を發して、少し物覺る限は身を代て此御身一つを救ひ奉んと動みて、諸聲に佛神を念じ奉る。新帝王の深き宮に養れ給て、種々の歡樂に驕り給しかど、深き御慈愛大八州に普く、沈淪る輩をこそ多く浮べ給しか。今何の報にか、許多横暴なる波風には溺れ給ん。天地判り給へ。罪無くて罪に當り、官位を褫れ、家を離れ、境を去て、明暮安き空なく嘆き給に、斯く悲き眼をさへ見、命盡なんとするは、前世の報か。此世の犯か。神佛明に在さば、此憂止め給へ」と、御社の方に向て種々の願を立て、又海の中の龍王萬の神達に願立させ給に、愈鳴轟て、在すに續たる廊に落蒐ぬ。炎燃上て廊は燒ぬ。心魂なくて有る限惑ふ。後の方なる大炊殿と思しき屋に移し奉りて、上下となく立込て甚亂雜く泣動む聲雷にも劣ず。空は墨を摺たるやうにて日も暮にけり。辛う風改り、雨の足濕り、星の光も見るに、此御座所の甚珍なるも甚畏くて、寢殿に歸し移し奉んとするに、燒殘りたる方も疎げに、許多の人の踏轟し惑るに、御簾なども皆吹散てげり。夜を明してこそはと躊躇合るに、君は御念誦し給て思し廻すに、甚心慌し。月射て潮の近く滿ける跡も露に、名殘猶

寄返る浪荒さを、柴の戸押啓て眺め在す。近き世界に物の理を知り、來し方行先の事打覺え、兎や角やと捗々しう曉る人も無し。賤き蜑們などの、貴さ人在る所とて集り參りて、聞も知給ぬ事どもを囀り合るも甚珍なれど、得追も拂ず。「此風今暫時止ざらましかば、潮上りて殘る所なからまし。神の助疎ならざりけり」と言を聞給ふも、甚心細しと言ば愚なり。

源「海に在す神の助にかゝらずば、
　汐の八重合に放浪なまし。」

終日に煎搩つる風の騷に、然こそ言へ甚う困じ給にければ、心にもあらず打睡み給ふ。畏さ御座所なれば、唯倚居給るに、故院唯在世し容ながら立給ひて、院「何ど斯く賤さ處には在するぞ」とて、御手を捉て引立給ふ。院「住吉の神の導き給ふ隨に、疾船出して此浦を去ね」と宣す。甚嬉て、源「畏き御蔭に別れ奉りにし此方、種々悲さ事のみ多く侍れば、今は此渚に身をや捨て侍なまし」と聞え給ば、院「甚有まじき事、是は唯些物の報なり。我は位に在し時、過つ事無りしかど、自然犯ありければ、其罪を終る間暇なくて、此世を顧みざりつれど、甚き憂に沈むを見るに堪難くて、海に入り渚に上り

きの守しほち　もとの播磨守にて新に佛門に入りしなり
源少納言良清をいふ
得意　良清の父も播磨守なりしか

甚く困じにたれど、斯る序に内裏に奏すべき事あるに依てなん、急ぎ上京ぬる」とて、立去り給ぬ。飽ず悲くて、源「御供に參りなん」と泣入給て暇給れば、人もなくて月の顔のみ晃々として、夢の心地もせず。御姿容止れる心地して、空の雲哀に棚引り。年來夢の中にも見奉で、戀しう覺束なき御容を、微なれど判に見奉りつるのみ、面影に覺え給て、我が斯く悲を極め、命盡なんとしつるを、助に翅り給ると切に思すに、好ぞ斯る騷もありけると名殘頼しう嬉しと思え給ふ事限なし。胸直と塞りて、却々なる御心惑に、現の悲き事も打忘て、夢にも御答を今少し聞ず成ぬる事と悒さに、又や見え給と故に寢入給ど、更に御眼も合で、曉方に成にけり。渚に小やかなる舟寄て、人二人三人ばかり、此度の御宿を指て來。何人ならんと問ば、使「明石の浦より、先の守新發意の、御船艤ひて參るなり。源少納言侍ひ給ば、對面して事の主旨執申ん」と言ふ。良清驚て、良「入道（明石入道）は、彼國の得意にて、年來相語ひ侍つれど、私に些相恨る事侍て、殊なる消息をだに通さで久う成侍ぬるを、浪の紛に如何なる事かあらん」と不審く。君の、御夢なども思し合る事もありて源「疾逢へ」と宣ば、舟に往て逢たり。然ばかり烈しかりつ

ば訓にての知識なるなり

夢現さまゝ故院夢に見え又今かゝる使のあるをなり世の人の聞きつたへむ雨風に恐れてなどの外聞を遠慮ありながらなり

まことの神の又眞實の神慮にてもあらば背きがたき事なりなど思す

る浪風に、何時の間にか舟出しつらんと心得難く思り。使「去る朔日の日の夢に、容殊なる者の告知する事侍しかば、信じ難き事と思給しかど、十三日に新なる驗見せん、舟を艤ひ設て、必雨風止ば此浦に着よと、重て示現す事の侍しかば、試に舟の艤を設て待ち侍しに、嚴き雨風雷の驚し侍つれば、他の朝廷にも夢を信じて國を助る類多う侍けるを、用させ給ぬまでも、此示現の日を過さず、此由を告申し侍んとて、舟出し侍つるに、奇き風細う吹て、此浦に着き侍る事、眞に神の嚮導違ずなん。爰にも若し知召す事や侍つらんとてなん。甚も憚多く侍ど、此由申給へ」と言ふ。良清忍やかに傳へ申す。君思し廻すに、夢現種々靜ならず、示現の如なる事どもを、來し方行末思し合て、世人の聞傳む、後の誹謗も安からざるべきを憚りて。眞の神の助にもあらんを、背くものならば、又是より增て胡盧なる眼をや見ん。現の人の心だに仍苦し。果敢き事をも多見つゝ、我より齡增り、若は位高く、時世の權勢今一層勝る人には靡從て、其意向を追隨べきものなり。退て咎なしとこそ、昔の賢き人も言置けれ。實に斯く命を窮め、世に又なき眼の限を見盡つ、更に後の後の名を省くとても、偉き事もあらじ。夢の中にも父帝の御

うつゝの人の心

現在の世間の人の心に背くだにあしことあるをまして神慮にはなり

退きてとがし

老子經に「不レ退有レ咎」とあり自分を卑下して人に隨ふべしとなり

命をきはめ辛苦を盡されしことなり

うれしきつり舟

「波にのみぬれつるものを吹く風の便りうれしきあまのつり舟」

奉れ乘せ申せなり

例の風前にすまにゆく時と同じく順風なるなり

訓ありつれば、又何事をか疑んと思して、御返事宣ふ。源「知ぬ世界に珍き憂の限見つれど、都の方よりとて、言問越する人も無し。唯行方なき空の日日　光ばかりを、古郷の友と眺め侍に、嬉き釣舟をなん。浜浦　靜かに隱へき所侍なんや」と宣ふ。限なく悅び畏り申す。使「兎もあれ角もあれ、夜も明ぬ果ぬ先に、御船に奉れ」とて、例の親き限四五人ばかりして、乘船ぬ。例の風出來て、飛やうに明石に着給ぬ。唯這渡る程は片時の間と言ど、仍奇きまで見る風の心なり。濱の體實に甚趣致殊なり。人繁う見るのみなん、御願望に背ける。入道の領じ占たる所々、海の面にも山隱にも、時々に就て興を覺すべき渚の苫屋、念誦をして後世の事を思ひ澄しつべき山水の面に、嚴き堂を建て、三昧行ひ、此世の設に、秋の田の實を刈納め、殘の齡積べき稻の庫町どもなど、折々處に付たる見所ありて爲集めたり。高汐に怖て、此頃娘などは岡邊の宿に移て住せければ、此濱の館に心安く在す。舟より御車に奉り移る程、日漸う差上りて、微に見奉るより、老も忘れ齡延る心地して笑榮て、先住吉の神を且々拜み奉る。月日の光を手に得奉りたる心地して、經營仕う奉る事道理なり。所の體をば更にも言ず、造成たる意匠木立

奇瑞の風なるべし

とぶやうに播磨風土記に「難波高津の宮の御時明石の驛家駒手御井の楠をもて舟につくるその舟の足はやきこと飛ぶが如し一かぢに七波を飛ぶにより舟はや鳥とその舟を名く」云々それにかなへり

立石、前栽などの有様、得も言ぬ入江の水など、繪に書ば心の致尠からん、繪師は書及まじと見ゆ。月頃の御住居よりは、此上なく明に懷し。御裝飾など得ならずして、住居ける體など、實に都の高貴き所々に異ず、艶に眩き體は勝り體にぞ見る。少し御心靜ては、京の御文ども聞え給ふ。參りし使者は、今は甚き道に出立て、悲き眼を見ると泣沈て、彼の須磨に留りたるを召て、身に余るものども多く給て遣す。昵き御祈禱の師ども、然べき所々には、此程の御有様委く言遣すべし。入道宮ばかりには、珍にて蘇生れる體など聞え給ふ。二條院の哀なりし程の御返事は、書も爲り給ず、打置々々押拭つゝ聞え給ふ、御氣色仍殊なり。文「返す〳〵甚き眼の限を、見盡し果つる有様なれば、今際と世を思離る心のみ增り侍れど、鏡を見てもと宜し面影の離る世なきを、斯く覺束なゝがらやと、許多悲き種々の憂しさは差措れて、

源「遙にも思遣かな知ざりし、浦より遠に浦傳して。

夢の中なる心地のみして覺果ぬ程、如何に僻事多らん」と其處果處と無く書亂り給るしもぞ甚見まほしき側目なるを、甚此上なき御寵遇の程と人々見

ひがこと文言もひがことと多からんとなり

あさりするあま

「あさりする與謝の蜃人ほころらし浦風ぬるみ霞みわたれる」

いひしにたがふ

「いとゞこそまさりにまされ忘れじといひしにたがふことのつらさは」

奉る。各自故郷に心細げなる傳言すべかめり。小歌なかりし空の氣色、名殘なく澄渡て、漁する蜑ども矜し氣なり。須磨は甚心細くて、蜑の窟も稀なりしを、人繁き厭は爲給しかど、爰は又特殊に怜なる事多くて、萬に思し慰まる。主人の入道行ひ勤たる體甚う思澄したるを、唯此娘一人を苦慮たる氣色、傍痛きまで時々洩し憂へ聞ゆ。御心地にも美しと聞置き給し人なれば、斯く意なくて廻り在したるも、然べき宿緣あるにやと思しながら、仍斯う身を沈たる間は、念誦より外の事は思じ。都の人(紫上)も只なるよりは、言しに違ふと思さんも、心耻う思されば、氣色立ち給ふ事なし。事に觸て性質有様凡ならずも有けるかなと、可懷う思されぬにしもあらず。爰には畏りて、自身(入道)も專參ず。物隔りたる下の屋に侍ふ。然は明暮見奉らまほしう、飽ず思ひ聞えて、如何で思ふ心を叶んと、佛神を愈念じ奉る。年は六十ばかりに成れど、甚清氣に有まほしう。念誦饒ひて人の程の貴なればにやあらん、打拗み耄々しき事はあれど、往昔の事も見知て、物穢らず才識づきたる事も交れば、昔の物語などを爲させて聽き給ふに、少し徒然の紛なり。年來公私御暇なくて、然しも聞置き給ぬ世の故實ども崩し出て聞ゆ。斯

母君と入道の妻と嘆くさまなり

見まつりし垣間見せしなるべし

あはとはるか

る處をも人をも見ざらましかば、淋々しくやとまで、興ありと思す事も変る。斯は馴れ聞れど、甚氣高う尊貴き御有樣に、然こそ言しか憚しう成て、我が思ふ事は心の儘にも得打出聞ぬを、心許なう口惜と、母君と言合て歎く。正身（明石上）も尋常の人だに眼易きは見ぬ世界に、世には斯る人も在しけりと見奉りしに就て、身の際知れて、甚遙にぞ思ひ聞ける。親達の斯く思扱ふを聞にも、似氣なき事かなと思ふに、唯なるよりは物哀なり。四月に成ぬ。更衣の御裝束、御帳の惟子など趣致ある體に爲出づ。万に仕奉り營むを、景惜う非分なりと思せど、人體の飽まで思上りたる體の貴なるに、思し恕して見給ふ。京よりも打頻りたる御訪問ども間斷なく多かり。長閑なる夕月夜に、海の上曇なく見え渡るも、住馴れ給し故郷の池水に、思ひ擬へられ給に、言ん方なく戀しき事、何方ともなく行方なき心地し給て、唯眼前に見遣るゝは淡路島なりけり。あはと遙になど宜ひて、

源「彼はと見る淡路の島の哀さへ、
　　残る隈なく澄る夜の月。」

久う手も觸れ給ぬ琴を、袋より取出給て、些く搔鳴し給る御體を、見奉る人も

あはとはるかに

「あはぢにてあはとはるかに見し月の近きをこよひ所がらかも」あは、彼（あ）は

なりあれはなり

安からず感に堪へぬなり

かうれう琴の秘曲、今傳はりたらぬよし

しはぶるひとどもやせがれたる賤民たちなりそゞろはしくうかれてなり

たが門さしてまだ宵に打來て叩くくひなかな誰がどさして入れぬなるらん」

安からず、哀に悲う思合り。かうれとういふ手を有る限彈き澄し給るに、彼の岡邊の家も、松の響波の音に合て、情趣ある若き人は、身に泌て思べかんめり。何とも聞分まじさ、此面彼面の萎る人們も、漫はしくて濱風を冒き歩く。入道も得堪で供養法燒みて急ぎ參り。入「更に背にし世中も、取返し思出ぬべく侍る、後世に願ひ侍る極樂の有樣も、思給へ遣るゝ夜の體かな」と泣々愛聞ゆ。我御心にも折々の御管絃、其人彼人の琴笛若は聲の出し體、時々に就て世に愛られ給し有樣、帝より初め奉りて殊遇き崇られ奉り給しを、人の上も我御身の有樣も思し出られて、夢の心地し給まゝに、搔鳴し給る聲も凄愴く聞ゆ。老人は涙も止敢ず、岡邊に琵琶箏の琴取に遣て、入道琵琶の法師に成て、甚有興う珍うて一曲二曲彈出たり。箏の御琴參りたれば、少し彈給ふも種々甚うのみ思ひ聞たり。甚然しも聞ぬ物の音だに折からこそは增るものなるを、遙々と物の滯なき海面なるに、中々春秋の花紅葉の盛なるよりは、唯何處と無う茂る蔭ども幽雅きに、水鷄の打叩きたるは誰が門鎖てと哀に覺ゆ。音も甚二無う出る琴どもを甚懐う彈鳴したるも、御心留りて、源「是は女の懐き體にて、亂次く彈たるこそ有興けれ」と、大方に宜ふを、入道はあ

あいなく　そゞろになり

先代王　延喜（醍醐）の帝の親王に傳へられしを入道の傳へられしなり

山臥のひがみ　娘に箏をさやうによろしきやうに思ひ侍るはわがひが耳にはあらでそれは箏にはあらで松風なるべくやと卑下せるなり

女五宮　嵯峨天皇の女五宮繁子（母は文屋氏久の女）琴の上手にて在せしを語らるゝなり

かきなで　深からぬ藝能をいへり

あき人の　潯陽江にて船中に白樂天が聞きゝし琵琶の

いなく打笑て、入「遊すより懷き體なるは何處のか侍ん。某延喜の御手より彈傳たる事、三代になん成侍りぬるを、斯う拙き身にて、此世の事は捨忘れ侍りぬるを、物の切に悒き折々は、搔鳴し侍りぬるを、奇う眞似ぶ者の侍るこそ、自然に彼先代王の御手に通て侍れ。山臥の僻耳に松風を聞渡し侍るにやあらん、如何で是忍て聞召せてしがな」と聞るまゝに打戰慄て、涙落すべかめり。源「君琴を琴とも聞き給はじかりける邊に憾き業かな」とて押遣給ふ。源「奇う昔より箏は女なん彈き取ものなりける。嵯峨の御傳にて、女五宮然る世中の上手に在し給けるを、其御筋にて取立て傳る人なし。凡て唯今世に名を取る人々、搔撫の心遣ばかりにのみあるを、爰に斯う彈き込給りける、甚興ありける事かな。如何でかは聞べき」と宜ふ。入「聞召んには何の憚かは侍ん。御前に召ても商人の中にてだにこそ、故事聞難す人は侍りけれ。琵琶なん眞の手を彈き鎭る人、往古も勅う侍しを、專澁滯る事なう懷き曲など筋殊になん。如何で辿るにか侍ん。荒き浪の聲に交るは悲うも思給へられながら、搔集る鬱悒さ紛る折々も侍る」など、賞玩居たれば、有興と思して箏の琴取換て給せたり。實に甚過して搔彈たり。今の世に聞ぬ筋彈付て、手使最甚う唐向き、

主は商人の妻になれる者なり、白樂天も江州の司馬に左遷せられし時のことにてありきまの似たるを引けるおもしろしし

「我從二去年一辭二帝京一謫居臥二病潯陽城一潯陽地僻無二音樂一終歲不レ聞二絲竹聲一今夜聞二君琵琶語一如レ聽二仙樂一耳暫明」と白氏文集にあり上には箏のことをいひ後に琵琶にも堪能なるを申さんとて商人の前にてと言出せりゆのて

搖の手深う澄したり。伊勢の海ならねど清き渚に貝や拾んなど聲美き人に歌せて、我も時々拍子取て聲打添へ給ふを、琴彈止つゝ愛聞ゆ。御菓子など珍き體にて參せ人々に酒强殺しなどして、自然忘憂もしぬべき夜の體なり。甚く更行まゝに松風涼て月も入方になる隨に、澄增りて靜なる程に、御物語殘なく聞て、此浦に住み初し程の用意、後世を勤る體、搔崩し聞て、此娘の有樣不問語に聞ゆ。可笑きものゝ有繫に哀と聞給ふ節々も有り。甚取申し難き事なれど、我君斯う意なき世界に假にても移ひ在したるは、若し年來老法師の祈申し侍る神佛の現れ在して、暫時の程御心をも惱し奉るにやとなん思ふ給る。其故は、住吉の神を賴み初め奉りて、此十八年に成侍りぬ。女童の幼う侍しより思ふ心侍りて、年來の春秋毎に、彼御社に詣る事なん侍る。晝夜の六時の勤行に、自身の運の上の願をば然るものにて、唯此人を高貴き本意叶へ給となん念じ侍る、前世の契拙くこそ斯く口惜き山賤と成侍りけめ。親大臣の位を保ち給りき。自身斯く田舍の民と成て侍り。次々然のみ劣り罷んは、何の身にか成侍んと悲く思ひ侍るを、是は生し時より賴む事なん侍る。如何にして都の貴き人に奉んと思ふ心深きに依り、程々に

付て數多の人の猜を負ひ、身の爲辛き眼を見る折々も多く侍れど、更に苦痛と思給ず、命の限は狹き袖にも育み侍りなん。斯くながら見捨侍りなば、海の中にも交り失ねとなん掟て侍る」など、總て眞似ぶべくもあらぬ事どもを打泣々々聞ゆ。君も物を種々思し續る折からは、打涙含つゝ聞召す。源「寃枉の罪に當て思掛ぬ世界に漂ふも、何の罪業にかと不審く思つるを、今宵の御物語にこそはと切になん。何かは斯く判然に思知り給ける事を、今迄は告給ざりつらん。都離し時より、世の常なきも味氣なう、誦經より外の事なくて月日を經るに、心も皆屈托にけり。斯る人在し給とは微聞ながら、左遷人をば忌々しき者にこそ思捨て給らめと思屈しつるを、然ば導き給べきにこそあなれ。心細き獨寢の慰安にも」など宣ふを、限なく嬉と思り。

入「獨寢は君も知ぬや徒然と、思ひ明石の浦寂さを。

況て年月思給へ渡る悒さを、推量せ給へ」と聞ゆる樣子、打戰きたれど有繋に趣なからず。源「然ど浦馴たらん人は」とて、

源「旅衣うら悲さに明しかね、

左手にて掬ることなり

いせの海明石なるにより伊勢の海ならねどゝいへり

六時の勤晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜をいふ

程々につけて若紫の卷に世々の國司などさる心ばえ見すれど承引ずとあり數多の人の憎しみ猜みを買ひしなるべし

うらさびし浦に心(うらゝ)をかけたりされどうらなれたらん人は波風の音も今初めて聞くやうにはあらじとなり

草の枕は夢も結ず。」

と打亂れ給る御容は甚ど愛嬌づき、言よしなき御樣子なり。數知ぬ事ども聞え盡したれど、煩しや。僻事ども書做たれば、甚ど愚に頑しき入道の性質も現れぬべかめり。思ふ事大半叶ぬる心地して爽涼う思ひ居たるに、翌日の晝つ方、岡邊に御文遣す。尊貴き體なめるも、却々斯る物の隈にぞ、思の外なる事も籠るべかんめると注意し給て、高麗の胡桃色の紙に、得ならず引粧ひて、

源「遠近も知ぬ雲井に眺め佗び、

霞し宿の梢をぞ訪ふ。

思ふには」とばかりやありけん、入道も人知ず待聞ゆとて、彼家に來居たりけるも著ければ、御使者甚耀きまで醉す。御返事甚久し。內に入て唆せど、娘は更に肯ず、甚尊貴げなる御文の體に、差出ん手容も恥う憚しう、人の御地位我身の程思に此上なくて、心地惡しとて倚臥ぬ。言佗て入道ぞ斯く、文「甚も畏きは田舍びて侍る袂に包み余りぬるにや、更に見給も及び侍ぬ畏さになん。然は、

思ふには「思ふにはしのぶることぞまけにける色には出じと思ひしものを」

袂につゝみ娘の心を推量りて言へり

「うれしさを

何に包まむ唐ごろも袂ゆたかに裁てといはましを」

さるはそれはなりながむらん娘も御心と同じ心に同じ雲井を眺め居りまするなり

玉もかづ〳〵の詞に緣ある故玉藻といへり女の美き裝束をいへり

宣旨書娘の文を入道書きしをいへり

いひがたみ「戀しともまだ見ぬ人の言ひがたみ（言り）心に物のなげかしきかな」しめたる香をたきそめたるなり

入「眺らん同雲井を眺るは、思ひ同し思なるらん。

となんじ給る。甚好々しや」と聞たり。檀紙に甚う古めきたれど、書體趣ばみたり。實にも好たるかなと眼覺しう見給ふ。御使者に普通ならぬ玉裳など被けたり。翌日、源「宮旨書は見知ずなん」とて、

源「悒くも心に物を悶むかな、

やよや如何にと問ふ人も無み。

言難み」と、此度は最甚う柔軟なる薄様に、甚美げに書給り。若き人の愛ざらんも甚余り因循からん。愛たしとは見れど准ならぬ身の程の甚う効なければ、却々世に在るものゝ尋知り給に就て涙含れて、更に例の勸なきを、切て言れて、淺からず染たる紫の紙に、墨付濃く淡く紛して、

男「思らん心の程ややよ如何に、未だ見ぬ人の聞か惱ん。」

手蹟の體、書たる樣子など、高貴き人に甚う劣まじう上手向たり。京の事思えて有興と見給ど、打頻て遣むも人眼憚しければ、二三日隔つゝ徒然なる

三月十三日入道の夢に十三日にあらたなるしらせむとある同じ日京にもかくありしなり又院の帝源氏の夢に見えさせ給ひし夜なれば十二日の夜より京へ上らせ給へるさまにかけるなり

おぼきおとゞ

夕暮、若は物哀なる曙などゞうに紛して、折々人も同心に見知ぬべき頃推量りて、書交し給に似氣なからず、思慮深く思上りたる氣色も、見では止じと思すものから、良清が領じて言し氣色も眼覺う、年來懸念てあらんを眼前に思念遣んも最惜う思し廻されて、女進み參ば然る方にても紛してんと思せど、女將た却々高貴き際の人よりも甚う思上りて、憾氣に遇し聞たれば心較にてぞ過ける。京の事を斯く關隔りては、愈覺束なく思ひ聞え給て、如何にせまし。戯れ難くもあるかな。忍てや迎へ奉てましと思し弱る折々あれど、然とも斯てやは年を重ん。今更に外觀惡き事をやはと思し鎭たり。

其年朝廷に物の怪異頻りて、物騷き事多かり。三月十三日雷鳴閃き雨風騷き夜、帝の御夢に、院の帝御前の御階の許に渡せ給て、御氣色甚惡うて、睨み聞させ給ふしに、畏り在す。聞させ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけんかし。甚ど恐う最惜と思して、母后に聞させ給ければ、后「雨など降り空亂る夜は思做なる事は然ぞ侍る。輕々しきやうに思し驚くまじき事」と聞え給ふ。睨み給しに見合せ給ふと見し驗にや、御眼煩ひ給て堪難う惱み給ふ。御物忌內裏にも宮にも限なく爲させ給ふ。大政大臣亡給ぬ。道理の御餘なれ

朱雀の祖父二條の大臣なり

ど次々に自ら騒き事あるに、大宮（母后）も何處と無う煩ひ給て、程經れば弱り給ふやうなる、主上に思し歎く事種々なり。仍此源氏の君、眞に犯す事なきにて斯く沈むならば、必此報ありなんとなん覺え給ふ。今は仍舊の位をも賜てんと度々思し宣ふを后「世の誹謗輕卒きやうなるべし。罪に落て都を去し人を三歳をだに過さず免されん事は、世人も如何言傳へ侍ん」など母后固う諫止給ふに思し憚る程に、月日重りて、御病惱ども種々に重り增らせ給ふ。明石には例の秋は濱風の殊なるに、獨寢も眞正に物佗しうて、入道にも折々語せ給ふ。兎角紛して此方參せよと宣ひて、渡り給ん事をば有まじう思したるを、正身將た更に思立べくもあらず、甚口惜き際の田舍人こそ、假に下りたる人の打解言に就て、然樣に輕卒に語ふ事をも爲なれ。人數にも思されざらんもの故、我は甚き物思をや添ん。斯く及なき心を思る親達も、世籠て過す年月こそ無驗賴に行末奥床く思らめ。却々なる心をや盡さんと思て、唯此浦に在せん問、斯る御文ばかりを聞え交さむこそ疎ならね。年來音にのみ聞て、何時かは然る人の御有樣を微にも見奉んなど、遙に思ひ聞しを、斯く思掛ざりし御住居にて、正面ならねど微にも見奉り、世に無き物と聞傳へ御琴の音をも風に付て聞き、明暮の御有樣覺束なからで、斯まで世に在る者と思し尋るなどこそ、斯る蜑の中に朽ぬる身に余る事なれなど思に、愈耻うて露も氣近き事は思寄ず。親達は、許多の年來の祈の叶べきを思ながら、偶然に見せ奉りて、思し數へざらん時、如何なる歎をかせんと思遣に忌々しくて、愛たき人と聞とも辛う甚うも有べきを、眼に見ぬ佛神を賴み奉りて、人の御心をも宿世をも知でなど、打反し思亂れたり。君は此頃の浪の音に、彼物の音を聞ばや、然ずば効なくこそなど常は宣ふ。忍て吉き日見せて、母君の兎角思煩ふを肯入ず、弟子どもなどだに知せず、心一つに起居輝くばかり裝飾て、十三日の月の花かに差出たるに、たゞあたら夜のと聞えたり。君は數奇の體やと思せど、御直衣奉り引粧て夜更して出給ふ。御車は二なく造たれど窮屈とて御馬にて出給ふ。惟光などばかりを侍せ給ふ。稍遠く入る所なりけり。路次の程も四方の浦々見渡し給て、思ふ同志見まゝ欲き入江の月影にも、先戀しき人の御事を思出聞え給に、卽て馬引過て赴きぬべく思す。

弟子ども出家の後仕ふる人をいふ

十三日の月八月のなり

あたら夜の「あたら（可惜）夜の月と花とを同くは心しれらん人に見せばや」

すき物好きなり

思ふどち「思ふどちいざ見にゆかん玉津島入江の

源「秋の夜の月毛の駒よ我戀る、雲井に翔れ時の間も見ん。」

底に沈む月影〜海の面　入道の源氏を置き參らす家なり

三昧堂　入道の行ひ勤むる處なり

月入れたる槇の戸口　この詞この物語中第一と定家の賞美されしよし艶なる書きざまなり

源氏を導き申すためけしきばかりあけおきたるなり

と打獨語れ給ふ。作る體木深く甚き處勝りて、見所ある住居なり。海の面は嚴う面白く、是は心糾く住たる體、爰に思殘す事はあらじとすらんと思し遣るゝに物哀なり。三昧堂近くて、鐘の聲松の風に響合て物悲う、岩に生たる松の根ざしも、趣致ある體なり。前栽どもに虫の聲を盡したり。爰彼處の有樣など御覽ず。娘住せたる方は特殊に磨て、月入たる槇の戸口、氣色ばかり押披たり。打慰ひ何彼と宣ふにも、斯までは見え奉らじと深う思に、物歎しうて打解ぬ性質を、此上なうも人向たるかな。然しも有まじき際の人だに、斯許り言寄ぬれば、心强しもあらず慣たりしを、甚斯く零落たるに侮しきにやと憾う種々に思し惱り。情無う押立むも事の體に違り。心較に負むて外觀惡けれなど亂れ恨み給ふ體、實に物思ひ知ん人にこそ見せまゝ欲けれ。近き几帳の紐に、箏の琴の彈鳴されたるも樣子亂次く、打解ながら搔弄りける程見えて有興ければ、源「此聞馴したる琴をさへや」など萬に宣ふ。

源「睦言を語合ん人もがな、
憂世の夢も半覺やと。」

明「明ぬ夜に即て惑る心には、

あいなき　俗につまらぬなり

あながちなる　俗にあんまりなゝり

執を夢と分て語ん。」

徹なる樣子、伊勢の御息所に甚酷う肖似たり。何心も無く打解て居たりける。を、斯う意外に甚卑無くて、近かりける曹子の内に入て、如何で固めけるにか甚强きを、强ても押立ち給ぬ體なり。然ど然のみも如何でかはあらん。人品甚貴に聳て、尊貴き樣子ぞしたる。斯う强なりける宿緣を思すにも淺からず哀なり。御志の近增するなるべし。常は厭しき夜の長さも、疾く明ぬる心地すれば、人に知れじと思すも心慌うて、細に語ひ置て出給ぬ。御文甚忍てぞ今日は有る。あいなき御心の鬼なりや。爰にも斯る事如何で洩さじと憚て、御使事々しくも遇さぬを胸痛く思り。斯て後は忍つゝ時々在す。路程も少し離たるに、自分批言分別なき蜃の子もや立交んと思し憚る程を、然ばよと思歎たるを、實に如何ならんと、入道も極樂の願をば忘て、唯此御氣色を待つ事にはす。今更に心を亂るも甚最惜氣なり。二條の君の風の傳にも洩聞き給ん事は、戯にても心の隔ありけると思疎れ奉らんは、心苦う耻う思さるゝも、强なる御志の程なりかし。斯る方の事をば、有繁に心留て恨み給りし折々、何て要なき戯事に就ても、然思れ奉けんなど取返さまほし

ちかひしこと　「忘れじ」と誓ひしことをあやまたば三笠の山の神もことわれ（ことわるは裁判するなり）

松より浪は　「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなん」

う、人（明石上）の有様を見給に就ても、戀しさの慰む方なければ、例よりも御文細に書給て、奥に文「眞や我なから心より外なる等閑事にて、疎れ奉し節々を思出るさへ胸痛きに、又奇うもの儚き夢をこそ見侍しか。斯う聞る不問語に隔なき心の程は思し合せよ、誓し事も」など書て、

源「萎々と先ぞ泣るゝ假初の、
　みるめは蜑の戯なれども。」

とある。御返事何心なく可愛氣に書て、果に文「忍難たる御夢語に就ても、思合らるゝ事多かるに、

紫「二心なくも思けるかな契しを、
　穩なるもの乍唯ならず微め給るを、甚哀に打置難く見給て、眺久う忍の旅寢も爲給ず。女思しわ著きに、今ぞ眞に身も投つべき心地する。行末知げなる親ばかりを賴しきものにて、何時の世に人並々に成べき身とは思ざりしかど、唯何處となくて過しつる年月は、何事をか心をも惱しけん。斯う甚う物思しき世にこそ有けれと、豫て推量り思しよりも萬に悲けれど、柔和に擧止て憎からぬ體に見え奉る。憐とは月日に添て思し增ど、止事なき方（紫上）の侍遠くて年月を過し給が、平ならず打思越せ給らんが甚心苦しければ、一人臥勝にて過し給ふ。繪を種々書集て、思ふ事どもを書付け、返事聞べき體に爲做給へり。見ん人の心に泌ぬべき物の體なり。如何でか空に通ふ御心ならん。二條の君も物哀に慰む方なく覺え給ふ折々、同じ樣に繪を書集め給つゝ、卽て我御有樣を日記の如に書給り。如何なるべき御有樣どもにかあちん。年改りぬ。內裏に御藥の事ありて、世中種々に騷る。當代の皇子は、右大臣の御娘承香殿の女御の御腹に、男親王生れ給る、二歲に成給ば甚幼稚し。春宮（冷泉）にこそは讓り聞え給め、朝廷の御後見をし、世を政つべき人を思し廻すに、此源氏の斯く沈み給ふ事、甚可惜う有まじき事なれば、終に母后の御諫止をも背て、免されぬべき令出來ぬ。去年より母后も御靈氣に惱み給ひ、種々の物の異變頻に騷きを、甚き御慎どもを爲給ふ驗にや、快う在しける御眼の惱さへ、此頃重く成せ給て、物心細く思されければ、七月廿余日の程に、又重て京へ歸り給べき宣旨降る。終の事と思しかど、世の常なきに就ても如何に或果べきにかと嘆き給ふを、斯う俄なれば、嬉きに就ても又此浦を今は

右大臣　鬚黑の父大臣なり承香殿の女御は鬚黑の妹なり

心苦しき明石上懷胎なり

つひには行めぐり

都を出でし時は必時あり帰るべき縁あり

しに此の浦は又かへりみすべきことも難き別なれば一入名殘をしきとなり

この頃明石に繁く渡らせらる故なりしるべして北山にての物がたりなり

と思離ゝ事を思し嘆くに、入道然べき事と思ながら、打聞より胸塞りて覺れど、思の如榮え給ばこそは、我念願の叶ふにはあらめなど思なほす。其頃は夜離なく語ひ給ふ。六月ばかりより心苦き氣色ありて惱けり。斯く別れ給べき程なれば牛憎なるにやありけん、往しよりも憐に思して、奇う物思べき身にもあるかなと思し亂る。女は更にも言ず思ひ沈みたり。甚道理や思の外に悲き道に出立給しかど、遂には行廻り來なんと半は思し慰き。此度は嬉き方の御出立の、又やは願るべきと思すに哀なり。侍ふ人々も程々に就て は悅び思ふ。京よりも御迎に人々參り、心地快げなるを、主の入道涙に昏て月も經ぬ。頃さへ哀なる空の氣色に、何ぞや心づから今も昔の不覺なる事にて、身を煩すらんと種々に思し亂る。事情を知る人々は、臣「噫憎、例の御癖ぞ」と見奉り憤るめり。月頃は露人に氣色見せず、時々搔紛れなどし給る冷靜さを、此頃生憎に却々の人の心盡にと突合ふ。少納言(良清)、案内して聞え出し初の事など密語合るを、平ならず思ひ。明後日ばかりに成て、例の如に甚うも更さで渡り給り。分明にも未だ見給ぬ容貌など、甚高雅しう氣高き態して、驚異うも有けるかなと見捨難く口惜う思さる。然べき體にて迎んと思し成ぬ。然樣にて語ひ慰め給ふ。男の御容貌有樣、將た更にも言ず、年來の御勤に甚く面痩給るしも、言ふ方なく愛たき御有樣にて、心苦げなる氣色に打涙含つゝ、切に深く契り給るは、唯斯許を幸福にてや何か止ざらんとまでぞ見めれど、愛たきにしも我身の程を思にも盡せず。浪の聲秋の風には愈響殊なり、鹽燒く烟微に靉靆し、取集たる所の體なり。

源「此度は立別るとも藻鹽燒く、
煙は同じ方に靡ん。」

と宣へば、

明「搔集て螢の燒く火の思にも、
今は効なき浦見だにせじ。」

哀に打泣て、寡言なるものから、然べき節の御答など淺からず聞ゆ。彼常に可懷がり給ふ物の音など、更に聞せ奉ざりつるを、甚う恨み給ふ。源「然ば記念にも偲ぶばかりの一ことをだに」と宣ひて、京より持て在したりし琴の御琴取に遣して、特殊なる調を微に搔鳴し給る、深き夜の澄るは譬ん方なし。入道も得堪で、自身箏の琴取て差入たり。自身(明石上)も甚ど涙さへ咬されて、

止べき方なきに誘るゝなるべし。忍やかに調たる程甚上手めきたり。入道宮の御琴の音を、當代の二なきものに思ひ聞えたるは、今向しう噫愛たと聞く人の心愉て、容貌さへ思遣るゝ事は、實に甚限なき御琴の音なり。是は飽まで彈澄し、奥床く憾き音ぞ增れる。此御心にだに初て多感に懷う、未だ耳慣れ給ぬ曲など懊惱き程に彈止つゝ、飽ず思さるゝにも、月來何ど强ても聞馴さゝりつらんと口惜う思さる。心の限將來の契をのみ爲給ふ。源「琴は復搔合するまでの形身に」と宣ふ。女、

男「等閑に頼め置めるひとことを、盡せぬ音にや懸て偲ん。」

言ともなき口吟を恨み給て、

源「逢までの形身に契る中の緒の、調は殊に變ざらなん。此音違ぬ先に必逢見ん」と頼め給ふめり。然ど唯別ん際の理無さを思ひ咽たるも甚道理なり。發足給ふ曉は夜深う出給て、御迎の人々も騷ければ心も空なれど、人間を計ひて、

源「打捨て立も悲き浦浪の、名殘如何にと思やるかな。」

御返事、

男「年經つる苫屋も荒て憂き浪の、返る方にや身を配へまし。」

と打思けるまゝなるを見給ふに、忍び給ど潛然と溢れぬ。心知ぬ人々は、仍斯る御住居なれど、年來といふ許馴れ給るを、今際と思す將た然もある事ぞかしなど見奉る。良淸などは疎ならず思すなめりかしと憎くぞ思ふ。嬉きにも實に今日を限に此渚を別るこそなど哀がりて、口々悄れ言合る事どもあんめり。然ど何かはとてなん。入道今日の御饗應甚嚴う仕う奉り。侍臣下の階まで旅の裝束珍き體なり。何時の間にか爲敢けんと見たり。御裝束は言べくもあらず、御衣櫃數多掛け侍はす。眞の都の苞に爲つべき御贈物ども、趣付て思寄ぬ隈なし。今日奉るべき狩の御裝束に、

入「寄る浪に立重ねたる旅衣、汐解しとや人の厭ん。」

されどその人たちの歌などしるすも益なければしるさぬとなり

とあるを御覽じ付て、驚けれど、

源「形身にぞ更へかりける逢ふ事の、

日數隔む中の衣を。」

形身にぞぬぎかへて形身に留めんとなり

とて志あるをとて奉り換ふ。御身に褻たるどもを遣す。實に今一重偲れ給べき事を添る形身なめり。得成ぬ御衣に香の移たるを、如何人の心にも染ざらん。入道今はと世を離れ侍にし身なれども、今日の御送に仕う奉ぬ事など申て、泣顔作るも最惜ながら、若き人は笑ぬべし。

志あるを入道の志にて奉りたるをなり

入「世を海に許多汐染む身と成て、

仍此岸を得こそ離ね。」

心の闇は甚ど惑ぬべく侍ば、境までだに」と聞て入「好々しきやうなれど思し出させ給ふ折侍ば」など御氣色給る。甚う物を哀と思して、所々打赧み給る御眼の邊など、言ん方なく見え給ふ。源「思捨て難き筋も有めれば、今最疾く見直し給てん。只此住家こそ見捨難けれ、如何すべき」とて、

心の闇はなほ思ひ捨がたき情緒の事なり

源「都出し春の歎に劣めや、

年經る浦を別ぬる秋。」

心の闇「人の親の心はやみにあらねども」の例の歌の心なり

とて押拭給るに、甚ど物覺ず潮垂增る。起居も淺しう蹌跟ふ。正身の心地は譬べき方なくて、斯しも人に見じと思ひ鎭れど、身の憂を本にて、理なき事なれど打捨給る恨の遣ん方なきに、面影添て忘れ難きに、健き事とは只涙に沈り。母君も慰め佗て、母「何に斯く憂悶なる事を思初けん、總て偏僻しき人に隨ける心の懈怠ぞ」と言ふ。入「噫囂や、思し捨まじき事も在し給めれば、然とも思す所あらん。思ひ慰て御湯などをだに參れ。噫忌々しや」とて、片隅に寄居たり。乳母母君など僻る心を言合つゝ、疾如何で思ふ體に見奉らんと年月を賴み過し、今や念願叶とこそ賴み聞つれ。心苦き事をも婚の初に見るかなと嘆くを見るにも最惜ければ、甚ど耄られて、晝は日一日寢をのみ寢暮し、夜は健に起居て、珠數の行方も知ず成にけりとて、手を押擦て仰ぎ居たり。弟子們に迫められて、月夜に出て行道するものは、遣水に倒ふれ入にけり。巖の片岨に腰も突損ひて惱臥たる程になん、少し物紛ける。君は難波の方に渡て、御秡し給て、住吉にも無事にて種々の願果し申べき由、御使して申せ給ふ。俄に所狹て自身は此度得詣で給ず。殊なる御逍遙などなくて、急ぎ入京給ぬ。二條院に在し着て、都の人も御供の人も

御湯娘の食もまゐらぬをなぐさめて湯づけにてもといふなり

すくよかに起居て全然起き居るなり

ずゞのゆくへおこなひをもおこたりたるさまなり

行道するものは物の字意義なし行來するになり、誦經

しつゝ佛堂のめぐりを行くをいふ

身をば思はず「わすらるゝ身をば思はずちかひてし人の命の惜くもあるかな」

彰より外の寛平九年大納言正三位藤原時平十一人なり六月十九日菅原道眞と源光の二人權大納言に任ぜらるこれらを摸して書けるか、職員令には大納言二人とあり外の外は數より外なれはふは權の字を加へるべきか後世は

夢の心地して行會ひ、悅泣も忌々しさまで立騷たり。女君も効なきものに思し捨つる命嬉う思さるらんかし。甚美げに成熟整りて、御物思の間に所狹りし御髮の少し削れたるも甚う愛たさを、今は斯て見べきぞかしと御心安堵に就ては、又彼飽ず別し人の思りし體、心苦う思し遣る。仍世と共に斯る方にて御心の暇ぞ無きや。其人の事どもなど聞え出給り。思し出たる御氣色淺からず見るを、平ならずや見奉り給らん、殊となら「身をば思ず」など微かし給ぞ有興う可愛く思ひ聞え給ふ。半見るにだに飽ぬ御容をば、如何で隔つる年月ぞと驚嘆きまで思すに、取返し世中も甚恨しうなん。程も無く舊の御位改りて、數より外の權大納言に成給ふ。次々の人も、然べき限は舊の官復し給ふ。世に赦るゝ程、枯たりし木の春に遭る心地して、甚愛たげなり。召ありて內裏に參り給ふ。御前に侍ひ給に、成熟勝り給て、如何で然る陋しき住居に、年經給つらんと見奉る女房などの、院の御時より侍て老衰る們は悲くて、今更に泣騷ぎ愛で聞ゆ。主上も耻うさへ思されて、御裝束など殊に引粧て出御す。御心地例ならず日來經させ給ければ、甚う衰させ給るを、昨日今日ぞ少し快う思されけり。御物語靜閑にありて夜に入ぬ。十

大納言一人權大約言十人となれり

ひるの子日本書記に「伊弉諾尊伊弉册尊爲二夫婦一生二蛭兒一雖二已三歲一脚猶不レ立故載二之天磐櫲樟船一而順風放棄」と見ゆ其船西宮の社下蛭子浦に泊りしかば是より夷三郎（三男）と稱したりしとなり三歲といふことに用ゐられたり

みやばしらめぐり合ふの枕詞に柱といへり

なげきつゝ古來さまゝ

五夜の月面白う靜なるに、昔の事搖崩し思し出られて、潮垂させ給ふ。もの心細く思さるゝなるべし。文「管絃などもせず、昔聞し物の音なども聞で、久う成にけるかな」と宣するに、

源「渡つ海に萎へ心佗れ蛭の子の、
足立ざりし歲は經にけり。」

と聞え給ば、甚哀に心恥う思されて、

帝「宮柱遠り合ける時しあれば、
別し春の恨殘すな。」

甚優雅き御有樣なり。院の御爲に、御八講行るべき事、先急せ給ふ。春宮を見奉り給ふに、此上なく成長させ給て、珍う覺え悅び給るを、限なく憐と見奉り給ふ、御才も此上なく增せ給て、世を保ち給んに憚あるまじく、賢う見えさせ給ふ。入道宮にも、御心少し鎭て御對面の程にも、切なる事どもあらんかし。眞や彼明石には、歸る波に付て御文遣す。引秘して委細に書給めり。文「波のよる〳〵如何に、

源「歎つゝ明石の浦に朝霧の、

に言ひあるやうなれど明石の浦になげきつゝ立つやと簡つゝ思ひやつると簡単に見てるべしよろしかるべし人丸の明石の浦の朝ぎりにまがくれぞゆく舟をしぞ思ふ」名高ければ立つの枕につかひたるべし

立やと人を思遣るかな。」

彼帥の娘の五節、あいなく人知ぬ物思覺ぬる心地して、蟣蝨作せて差置せけり。

五「須磨の浦に心を寄し船人の、
即て腐せる袖を見せばや。」

手など此上なく勝りにけりと見了せ給て遣す。

源「反りては喞言や爲ましし寄たりし、
名殘に袖の干難かりしを。」

飽ず愛しと思しゝ名殘なれば、驚され給て甚ど思し出れど、此頃は然樣の御擧動更に憚み給めり。花散里などにも只御消息ばかりにて疎遠く、却々恨しげなりとなん。

まゝなき瞬（まゝなぎ）の意なりかつをむしとて人をしれて飛びてまたゝきせしむればいふとぞ、何處よりともいはずして眼をくはせたる體なるべし

ふな人須磨へ音信せし時より今までとなり船人とは自身をいへり

見おほせ何處よりとも言はずきし置かせし文を五節と見了せられしなり

なか〳〵都に歸られても疎遠なれば明石に在らるゝ時よりもかへりてなり

13. 11. 15 T. 12

八講
一日に朝座夕座
一度に二度に法華經
一卷づゝ修し
四日に全部八卷を終ふ

あいなく
何となくなり
ないしのかみ
朧月夜なり

澤標

分明に見え給し夢の後、院の帝の御事を心に懸け聞え給て、如何で彼沈み給らん罪救ひ奉る事を爲んと思し嘆けるを、斯く歸洛給ては其御準備爲給ふ。神無月には御八講し給ふ。世人靡き仕う奉る事昔の如なり。大后仍御病腦重く在す中にも、終に此人（源氏）を得消ず成ぬる事と煩悶思しけれど、帝は院の御遺言を思ひ聞え給ふ。物の報ありぬべく思しけるを直し立給て、御心地涼くなん思しける。時々起り惱せ給し御眼も爽ぎ給ぬれば、大方世に得永く在まじう心細き事とのみ、久しからぬ事を思しつゝ、常に召ありて源氏君は參り給ふ。世中の事なども隔なく宣せなどしつゝ、御本意の如なれば、大方の世人もあいなく嬉き事に悅び聞えける。讓位なんの御用意近く成ぬるにも、尚侍の心細氣に世を思ひ嘆き給る甚哀に思されけり。朱「大臣（父右大臣）亡給ひ、大宮（后）も賴しげなくのみ病弱給るに、我世の殘少き心地するになん、甚最惜う、名殘なき體にて留り給んとすらん。昔より他（源氏）には思ひ貶し給れど、自身の志の一無き慣に、只御事のみなん憐に覺ける。立勝る人又御本

限あれば源氏の御子にてはなり

かひなきさま天子の位はすべりてもなり

意ありて見給とも、疎ならぬ志はしも准はざらんと思さへこそ心苦けれ」とて打泣給ぬ。女君顔は甚赧く匂て、溢るばかりの愛嬌にて泪も溢ぬるを、萬の罪忘て哀に可愛しと御覺ぜらる。朱「何か御子をだに持まへるまじき、口惜うもあるかな。宿緣深き人の爲には、今見出給てんと思も口惜や。限あれば臣下にてぞ見給んかし」など、行末の事をさへ宣するに、甚恥うも悲うも覺え給ふ。御容貌など優雅う美麗にて、限無き御志の年月に添ふ如に遇させ給ふに、愛たき人なれど、然しも思らざりし氣色情意など物思ひ知れ給ふ隨に、何て我心の若く幼稚きに任せて、然る騷をさへ引出て、我名をば更にも言ず、他(源氏)の御爲さへなど思し出るに、甚憂き身なり。翌る年の二月に東宮(冷泉)の御元服の事あり。十一に成給ど、齡より大に成人しう美麗にて、只源氏の大納言の御顔を、一に映したらん如に見え給ふ。甚眩きまで光合ひ給るを世人愛たきものに聞れど、母宮(藤壺)は甚う傍痛き事に、何なく御心を盡し給ふ。主上にも愛たしと見奉り給て、世中讓り聞え給ふべき事など懷う聞え知せ給ふ。同じ月の廿余日、御國讓の事俄なれば、大后思し慌ける。朱「効無き體ながらも、心長閑に御覽ぜらるべき事を思ふなり」とぞ、聞え慰め給ける。

内春宮の殿上主上の方へも春宮の方へも殿上奉仕する

坊には承香殿の御子居給ぬ。世中改りて引代へ趣致しき事ども多かり。源氏の大納言内大臣に成給ぬ。數定りて寛く所もなかりければ加り給なりけり。即て世の政事を爲給ふべきなれど、源「然樣の事繁き職には堪ずなん」と、致仕大臣(葵上の父)攝政し給ふべき由、讓り聞え給ふ。致「病に依て位も返し奉りてしを、愈老の積添て、賢き事侍じ」と承引申給はず。他の國にも事移り世中定らぬ折は、深き山に蹤を絶たる人だにも、治れる世には、白髮を也恥ず出仕へけるをこそ、眞の聖には爲けれ。病に沈て返し給ける位を、世中變りて又改め給んに、更に咎あるまじう、公私定らる。然る例もありければ、角力給で太政大臣に成給ふ。御歳も六十三にぞ成給ふ。世中冷きに因り半は籠り居給しを、取返し華やぎ給ば、御子供など沈む如に在し給るを皆浮び給ふ。取分て宰相中將權中納言に成給ふ。彼四君の御腹の姫君十二に成給ふを、内に參せんと冊き給ふ。彼高砂謠し君も叙爵爲させて甚思ふ體なり。腹々に御子ども甚數多次々に生出つゝ、賑はしげなるを、源氏大臣は羨み給ふ。大殿腹の若君(夕霧)は、人より殊に美うて、内春宮の殿上し給ふ。故姫君(葵上)の亡せ給し嘆を、宮大臣又更に改て思し嘆く。然ど在せぬ名殘も、

なり

やよひついたち 去年六月よりの懐妊なれば三月に入りてやがて朔日に思しやらるゝなり

珍きさま 女子なるをいふ

宿曜 天の二十八星宿（東西南北に七宿づゝの星）と九曜（日月火水木金土）に蝕星彗星を合せたるもの）とに配して人の運命を占ふ法なり

住吉の神のしるべ 須磨をはなれ明石入道の方に行かれしことなり

およびなき 娘を源氏にとの及ばぬ望みをかけしことなり

かしこき筋 后の位をいふ

唯此大臣の御光に萬事庇護れ給て、年來思し沈みつる名殘なきまで榮え給ふ。仍昔に御懇情變ず、折節毎に渡り給などしつゝ、若君の御乳人達然ぬ人々も、年來の間罷出散ざりけるは、皆然べき事に觸つゝ、便宜着ん事を思し置つるに、幸福人多く成ぬべし。二條院にも同事待聞ける人を哀なるものに思して、年來の胸開く許と思せば、中將中務やうの人々には、際々に就つゝ情を見え給に、御暇なくて外出も爲給ず。二條院の東なる宮、院（父帝）の御處分なりしを二なく改め作せ給ふ。花散里などやうの心苦き人々住せんなど思し宛て、修飾せ給ふ。眞や彼明石に、心苦げなりし事は如何にと思し忘る時なけれど、公私忙き紛に得思す儘にも見舞ひ給ざりけり。三月朔日の程、此頃やと思し遣るに、人知ず多感にて御使あり。疾く歸り參りて、使「十六日になん女にて平産に在し給ふ」と告聞ゆ。珍き體にてさへ有なるを思すに疎ならず。何て京に迎て、斯る事をも爲させざりけんと口惜う思さる。宿曜に御子三人、帝后必ず並て生れ給べし。中の劣は太政大臣にて位を極むべしと勸へ申たりし。中の劣腹に女は出來給べしとありし事指て叶ふなめり。大方上なき位に上り世を政ち給べき事、然ばかり偉かりし數多の相人

們の聞え集たるは、年來は世の煩しさに、皆思し消ちつるを、當代（冷泉）の斯く位に叶ひ給ぬる事を思の如嬉と思す。自身は極致給る筋は更に有まじき事と思す。數多の親王達の中に勝れて可愛き者に思したりしかど、臣下に思し掟てげる御心を思に、宿世遠かりけり。主上（冷泉）の斯て在すを、露に人の知る事ならねど、相人の言空からずと御心の中に思しけり。今行末の豫想を思すに、住吉の神の嚮導、眞に彼人（明石上）も世に普通ならぬ宿世にて、僻々しき親も及なき心を用ふにや有けん。然にては畏き筋にも成べき人の、賤き世界に生れたらんは、最惜う畏くも有べきかな。此程過して迎てんと思して、東の院急ぎ造すべき由催し仰せ給ふ。然る所に捗々しき人も有難からんを思して、故院に侍し宜旨の娘、宮內鄕宰相にて、亡りにし人の娘なりしを、母なども亡て微なる世に經けるが、果敢き體にて子生たりと聞召付たるを、知る便ありて事の序に眞似び聞ける人召て、然べき體に宣ひ契る。未だ若くて何心も無き人にて、明暮人知ぬ荒屋に眺る心細さなれば深うも思ひ辿ず、此御邊の事を偏に愛たう思ひ聞て、參るべき由申させたり。甚憐に半は思して、出し立給ふ。物の序に甚う忍び紛て在いたり。然

おぼえぬ意外のなり

取返しつべき乳母として下向させんは惜くなりしとなり

したひやついてゆかんかとなり

思はむ方明石上の方を慕はるゝなるべしとなり

うちつけに乳付（ちつけ）の意をかけたるか

は聞ながら如何にせましと思ひ亂けるを、甚畏きに萬思ひ慰めて、唯宣せん儘にと聞ゆ。好き日なれば急し立て給て、源「奇う同情なき如なれど、思ふ體異る事にてなん。自身も覺ぬ住居に鬱結れたりし例を思ひ擬て、暫時は念じ給へ」など事の有樣委う語ひ給ふ。主上の宮仕時々爲しかば見給ふ折もありしを、甚う衰へにけり。家の體も言知ず荒涼ひて、有繋に大なる所の木立など疎しげに、如何で過しつらんと見ゆ。人體若やかに美しければ御覽じ放たれず、兎角戯れ宣ひて、源「取返しつべき心地こそすれ。如何に」と宣ふに就ても、實に同うは御身近くも仕う奉り馴ば、憂身も慰みなましと見奉る。

源「豫てより隔ぬ中と習ねど、別は惜き物にぞありける。慕やせまし」と宣へば耻ひて、

乳母「直接の別を惜む托言にて、思む方に慕やは爲ぬ。」

馴て聞るを甚しと思す。車にてぞ京の間は行離れける。甚親き人差添て努洩すまじく嗜め給て遣す。御佩刀然べき物など、所狹きまで思し遣ぬ隈なし。乳母にも、有難う細なる御慰勞の程淺からず。入道思ひ册き思らん有樣思遣るも微笑れ給ふ事多く、又哀に心苦くも、唯此事の御心に懸るも淺からぬにこそは。御文にも疎に遇し給まじと、返す〳〵戒め給へり。

源「何時しかも袖打被ん少女子が、
　世を經て撫ん岩の生先。」

津の國までは舟にて、其より彼方は馬にて急ぎ着ぬ。入道待取り悅び畏り聞る事限なし。其方に向て拜み聞て、有難き御懇情を思に、彌々大切う恐きまで思ふ、兒の甚由々しきまで美う在する事比類無し。實に畏き御心に、册き聞んと思したるは宜なりけりと見奉るに、奇き路に出立て夢の心地しつる歎も覺にけり。甚美う可愛く覺て扱ひ聞ゆ。子持の君も、月頃物をのみ思ひ沈て甚ど弱れる心地に、生たらんとも覺ざりつるを、此御待遇の少し憂悶慰らるゝにぞ頭擡て、御使にも二無き體の志を盡す。疾く參りなんと急ぎ苦しがれば、思ふ事ども少し聞え續て、

明「一人して撫るは袖の程なきに、

いつしかも「君が代は天の羽衣まれに來て撫づともつきぬ岩ほなるらん」盤石劫へばんじやくごふ」とて四十里の岩を天人の羽衣にて撫でで盡せるを一劫といふとぞ

そなたに京になり

あやしき路に乳母の心なり都をはなれてはかゝしからぬ所に下りつる歎も忘るゝなり

御使前にいと親しき人さし添へ